

八尾市渋川所在

久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書 II

- 一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査 -



1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

久宝寺遺跡は、河内平野中央部の旧大和川の沖積地に立地し、周知の遺跡範囲が3 km²近くにもおよぶ大遺跡である。この遺跡の存在は、昭和10年の道路工事中に弥生土器や土師器、刳舟の残片が出土したことで明らかになった。しかし、河内平野に立地する低湿地遺跡群の常として、久宝寺遺跡においても遺構面が地中深く埋没しており、遺跡の実態が人の目に触れられることはなかった。

この遺跡に対する本格的な発掘調査は、近畿自動車道天理吹田線建設に先立って当センターにより実施されたものが嚆矢であった。この発掘調査は、昭和55年から昭和61年にかけて6次にわたって実施され、縄紋時代から現代にいたる連綿と重複する遺構面が検出されている。検出された遺構・遺物も膨大であったが、中でも古墳時代前期のその稠密さは特筆すべきものであった。この遺構群の広がり、西に隣接する大阪市域の加美遺跡、JR 関西線を越えた南の亀井北遺跡にも連なり、河内平野における同時期の一大拠点集落に位置付けられるものであった。

また、この時代に続く古墳時代中期においても、韓式系土器を伴う集落が検出されるとともに、大和川の分流の一つに構築された大規模な堰や護岸が検出された。この堰や護岸に使用された木材は、建築用材の転用品が多く、その量からして集落をそっくり壊したのではないかと思われるほどであった。この時期、渡来人が河内平野を大規模に再開発しようとしたことを裏付けるものであろう。

近畿自動車道の発掘調査以降、久宝寺遺跡の西端部周辺での発掘調査が八尾市や大阪市の手で実施され、遺跡の様相もかなり解明されてきた。反面、遺跡の中心部や東部については発掘機会が少なかったが、昭和59年に廃止された旧国鉄竜華操車場跡地の再開発計画が具体化したことで、この地域も発掘調査が実施されることになった。再開発面積が20ヘクタールと広大なことでもあり、当センターと八尾市および財団法人八尾市文化財調査研究会が分担して調査に従事することになった。

当該地域は、西半分が亀井、東半部が渋川となっている。亀井側では近畿自動車道部分からの遺構群の広がりが注目されるのに対し、古代の大豪族“物部氏”の本貫地と目される渋川側は、物部氏の実態にどこまで迫れるかが期待される場所である。

本書は、竜華操車場の中心部を南北に横切る府道住吉八尾線の付け替えに伴って実施した1～3次調査の発掘調査報告書である。今回の調査範囲は府道の北端部にあたり、かつては亀井と渋川を区切る道路が存在した。発掘調査では、平成7年度に西に隣接する久宝寺駅舎部分の調査で検出された古墳時代中期の大規模な堰が当該地にまで延びていることが判明した。近畿自動車道部分で検出された同様の遺構とは800mほど離れていることとあわせて、旧大和川の分流に施工された当時の開発がいかに大規模であったかが改めて認識されることになった。

このような成果を上げえたのも、ひとえに大阪府教育委員会、大阪府土木部、同八尾土木事務所をはじめとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜う切に希望する。

平成10年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市渋川所在久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般府道住吉八尾線の付け替え事業に伴い、大阪府八尾土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
調査担当は、調査部長井藤 徹、参事兼調整課長中西靖人、調整係長福田英人、中部調査事務所長赤木克視、同所調査第1係長岩崎二郎の指示のもと、その1の調査を同係技師後藤信義が、その2の調査を後藤・同係技師島崎久恵が、その3の調査を後藤・同係専門調査員福島里浦・長田芳子が担当した。また、堰および遺物の写真撮影は同係主査片山彰一、金属器・木製品の保存処理および木製品の樹種鑑定を同所調査第3係主査山口誠治が行った。
3. 調査期間および整理期間は次の通りである。
受 託 期 間
その1 1996年2月1日～1996年3月31日
その2 1996年4月1日～1997年3月31日
その3 1997年4月1日～1998年3月31日
4. 調査の実施にあたっては、下記の諸氏の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。
調査指導 米田敏幸・吉田野乃・沼 斎・藤井淳弘・吉田珠己（八尾市教育委員会）原田昌則・岡田清一・坪田真一・西村公助・森本めぐみ・古川晴久・樋口 薫（財）八尾市文化財調査研究会）田中清美・大庭重信（財）大阪市文化財協会）高橋 学（立命館大学）敬称略・順不同
調査参加 金子英児、佐伯春子、大西理恵・佐藤里美・斎藤梨佳・齋藤陽子・近澤 元・東 徹志・平田淑子・渡邊富彦（大阪市立大学）敬称略・順不同
なお、自然科学分析については下記の諸氏・諸機関をお願いした。記して感謝の意を表したい。
須恵器・韓式系土器胎土分析 奈良教育大学 三辻利一、¹⁴C分析 株式会社地球科学研究所、プラントオパール分析・花粉分析 株式会社古環境研究所 敬称略・順不同
6. 本書の執筆は、後藤、島崎、長田が担当し、文責は目次に示した。編集は後藤が行った。

凡 例

1. 本書で用いたレベルは特に明記しない場合東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。また、座標の記載はすべて km 単位とする。
2. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編・著『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 土器の実測図の断面は須恵器は黒つぶし、以外は白抜きで表示した。
4. 遺構全体図の縮尺率は96 - 1 トレンチは 1 / 200、1 / 400、97 - 1 トレンチは 1 / 125である。本文中の挿図の縮尺率は任意とする。
5. 遺構番号はトレンチ毎にそれぞれ時代の新しい遺構面から順に通し番号を設定した。
6. 遺物実測図の縮尺率は土器が 1 / 4、杭は 1 / 20である。
7. 遺物番号はトレンチ毎にそれぞれ実測図版の最初から通し番号を設定した。
8. 遺物写真の縮尺率は任意である。遺物写真番号は実測図版と同一の番号に揃える。

目 次

序 文	
例 言	i
凡 例	i
目 次	ii
挿図目次	ii
図版目次	iv
I . 位置と環境	(後藤) 1
II . 調査に至る経緯と経過	(後藤) 4
III . 調査の方法	(後藤) 4
IV . 調査成果	
1 . 基準層序	(後藤) 6
2 . 96 - 1 トレンチ	
a . 遺構	(後藤・島崎) 10
b . 遺物	(島崎) 29
3 . 97 - 1 トレンチ	
a . 遺構	(後藤) 42
b . 遺物	(長田) 50
V . まとめ	(後藤) 60

挿 図 目 次

図 1 久宝寺遺跡周辺の遺跡	2
図 2 久宝寺遺跡・竜華地区 トレンチ配置図	3
図 3 トレンチ位置図	5
図 4 96 - 1 トレンチ 西辺断面図・南辺断面図	8
図 5 97 - 1 トレンチ 西辺断面図・南辺断面図	9
図 6 96 - 1 トレンチ第 1 面 遺構平面図	10
図 7 96 - 1 トレンチ第 2 面 遺構平面図	11
図 8 96 - 1 トレンチ第 3 面 遺構平面図	11
図 9 96 - 1 トレンチ第 4 - 1 面 遺構平面図	12
図 10 96 - 1 トレンチ第 4 - 2 面 遺構平面図	12
図 11 96 - 1 トレンチ第 5 - 1 面 遺構平面図	13
図 12 96 - 1 トレンチ 遺物出土状況	13
図 13 96 - 1 トレンチ 掘立柱建物 1 平面図・断面図	14

図14	96 - 1 トレンチ 土器群3 平面図	15
図15	96 - 1 トレンチ 土器群4・6・7・8・11・14・15 平面図	16
図16	96 - 1 トレンチ第5 - 2面 遺構平面図	17
図17	96 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図	18
図18	96 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図	18
図19	96 - 1 トレンチ 堰1・2 平面図	19
図20	96 - 1 トレンチ 堰1 立面図	21
図21	96 - 1 トレンチ 堰2 立面図	21
図22	96 - 1 トレンチ 堰 平面模式図	22
図23	96 - 1 トレンチ 堰2 構築模式図	23
図24	96 - 1 トレンチ 流木及び堰1 使用材	24
図25	96 - 1 トレンチ 堰1 使用材	25
図26	96 - 1 トレンチ 堰2 使用材	26
図27	96 - 1 トレンチ 堰2 使用材	27
図28	96 - 1 トレンチ第7面 遺構平面図	28
図29	96 - 1 トレンチ第8面 遺構平面図	28
図30	96 - 1 トレンチ第3層~第4 - 1層 出土遺物	29
図31	96 - 1 トレンチ第4 - 2面~第4 - 2層 出土遺物	30
図32	96 - 1 トレンチ第5 - 1面 出土遺物	32
図33	96 - 1 トレンチ第5 - 1面 出土遺物	33
図34	96 - 1 トレンチ第5 - 1層~第5 - 2層 出土遺物	35
図35	96 - 1 トレンチ第5 - 2層 出土遺物	37
図36	96 - 1 トレンチ第6面 堰1・2 出土遺物	39
図37	96 - 1 トレンチ第6面 堰2 出土遺物	40
図38	96 - 1 トレンチ第6層 出土遺物	41
図39	96 - 1 トレンチその他 出土遺物	41
図40	97 - 1 トレンチ第1面 遺構平面図	42
図41	97 - 1 トレンチ第2面 遺構平面図	42
図42	97 - 1 トレンチ 道路状遺構 土層断面図	43
図43	97 - 1 トレンチ第3面 遺構平面図	43
図44	97 - 1 トレンチ第4 - 1面 遺構平面図	44
図45	97 - 1 トレンチ第4 - 2面 遺構平面図	44
図46	97 - 1 トレンチ第5 - 1面 遺構平面図	45
図47	97 - 1 トレンチ第5 - 2a面 遺構平面図	45
図48	97 - 1 トレンチ第5 - 2b面 遺構平面図	46
図49	97 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図	47
図50	97 - 1 トレンチ第6面 堰 平・立面図	47
図51	97 - 1 トレンチ第6面 堰 使用材	48

図52	97 - 1 トレンチ第7面 遺構平面図	49
図53	97 - 1 トレンチ第8面 遺構平面図	49
図54	97 - 1 トレンチ第1面～第4 - 1層 出土遺物	50
図55	97 - 1 トレンチ第4 - 2面～第4 - 2層 出土遺物	51
図56	97 - 1 トレンチ第5 - 1面 出土遺物	52
図57	97 - 1 トレンチ第5 - 1層 出土遺物	53
図58	97 - 1 トレンチ第5 - 2a面～第5 - 2a層 出土遺物	54
図59	97 - 1 トレンチ第5 - 2b層 出土遺物(1)	55
図60	97 - 1 トレンチ第5 - 2b層 出土遺物(2)	57
図61	97 - 1 トレンチ第5 - 2b層 出土遺物(3)	58
図62	97 - 1 トレンチその他 出土遺物	59
図63	96 - 1・97 - 1 トレンチ 合成遺構変遷図(1)	61
図64	96 - 1・97 - 1 トレンチ 合成遺構変遷図(2)	62

図 版 目 次

図版1 96 - 1 トレンチ

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 左：● 第1面 北半部 ● 第2面 北半部 ● 第3面 北半部 ● 第4 - 1面 北半部 | <ul style="list-style-type: none"> 右：● 第2面 南半部 ● 第3面 南半部 ● 第4 - 1面 全景 ● 第4 - 2面 出土甑 |
|--|---|

図版2 96 - 1 トレンチ

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 左：● 第4 - 2面 北半部 ● 第5 - 1面 北半部 ● 第5 - 1面 全景 ● 第5 - 1面 掘立柱建物1 | <ul style="list-style-type: none"> 右：● 第4 - 2面 全景 ● 第5 - 1面 南半部 ● 第5 - 1面 土器群 ● 第5 - 1面 柱穴断面 |
|--|--|

図版3 96 - 1 トレンチ

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 左：● 第5 - 2面 土器群17 ● 第5 - 1面 ピット14 ● 第5 - 1面 北半部 ● 第6面 全景 | <ul style="list-style-type: none"> 右：● 第5 - 1面 土器10 ● 第5 - 1面 ピット20 ● 第5 - 1面 土器12 ● 第6面 堰1・2検出状況 |
|---|---|

図版4 96 - 1 トレンチ

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 左：● 第6面 堰1・2検出状況 ● 第6面 堰2草敷検出状況 ● 第6面 堰2草敷除去後 ● 第6面 堰2二股木接合部 | <ul style="list-style-type: none"> 右：● 第6面 堰1 ● 第6面 堰2草敷 ● 第6面 堰2二股木出土状況 ● 第7面 全景 |
|---|---|

図版5 97 - 1 トレンチ

左：・第1面 全景
・第3面 全景
・第4 - 1面 全景
・第5 - 1面 全景

右：・第2面 全景
・第3面 島畑・道路間
・第4 - 2面 全景
・第5 - 1面 全景

図版6 97 - 1 トレンチ

左：・第5 - 2a面 全景
・第5 - 2b面 全景
・第6面 堰
・第7b面 土坑3

右：・第5 - 2a面 溝14
・第6面 全景
・第7a面 全景
・第8面 全景

図版7 96 - 1 トレンチ 第3層・第4 - 1層・第4 - 2面・第4 - 2層・第5 - 1面 遺物

図版8 96 - 1 トレンチ 第5 - 1面 遺物

図版9 96 - 1 トレンチ 第5 - 1面 遺物

図版10 96 - 1 トレンチ 第5 - 1面・第5 - 1層 遺物

図版11 96 - 1 トレンチ 第5 - 1層・第5 - 2面・第5 - 2層(シルト層) 遺物

図版12 96 - 1 トレンチ 第5 - 2層 遺物

図版13 96 - 1 トレンチ 第5 - 2層・第6面・堰1・堰2 遺物

図版14 96 - 1 トレンチ 第6面 堰2 遺物

図版15 96 - 1 トレンチ 第6面 堰2・第6層・その他 遺物

図版16 97 - 1 トレンチ 第2層・第4 - 1面・第4 - 2層・第5 - 1層 遺物

図版17 97 - 1 トレンチ 第5 - 1層・第5 - 2a面 遺物

図版18 97 - 1 トレンチ 第5 - 2a層 遺物

図版19 97 - 1 トレンチ 第5 - 2a層・第5 - 2b層 遺物

図版20 97 - 1 トレンチ 第5 - 2b層 遺物

図版21 97 - 1 トレンチ 第5 - 2b層 遺物

1. 位置と環境

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部（久宝寺・北亀井・渋川・跡部他）および大阪市、東大阪市にまたがる南北1.6km、東西1.7kmと広範囲の遺跡である。本遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に位置しており、従来より縄文時代後期～近世にかけての複合遺跡として、また、遺跡名でもある久宝寺の寺内町としてもよく知られている。

さらに、当遺跡の周辺にも多くの遺跡が存在する。西には弥生時代中期の長大な方形周溝墓を検出した加美遺跡、南には銅鐸が出土した跡部遺跡、「貨泉」や犬の骨などが出土した亀井遺跡がある。北には多くの貴重な木製品が出土した山賀遺跡や重要文化財に指定された家形埴輪が出土した美園遺跡、南東には白鳳～奈良時代に属する渋川廃寺がある。ただ、これらの各遺跡は、市域別、土地区画の関係などで便宜上区分されたものであり、地表面下の遺構面の分布限界を示すものではない（図1）。

当遺跡は、昭和10年に小字西口・栗林での道路工事中に弥生土器・土師器・削船の残片が発見されたことで知られるようになった。しかし、その後周辺で発掘調査が行われなかったため、長い間遺跡の概要は不明なままであったが、昭和48年から49年にかけて行われた近畿自動車道の建設予定地で実施された試掘調査によって、弥生時代～中世にいたる遺構・遺物が検出され、当遺跡が広範囲にわたる遺跡であることが確認された。そして、その結果をもとに昭和55年から61年まで（財）大阪文化財センター（現（財）大阪府文化財調査研究センター 以下センターと表す）が、近畿自動車道建設予定地の発掘調査を行った。その後も大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会、東大阪市教育委員会、（財）東大阪市文化財協会によって調査が行われ、多大な成果が得られた。

梶山彦太郎・市原 実両氏による大阪平野（河内平野）発達史の研究や周辺遺跡における既往の調査成果を照らし合わせて当遺跡周辺の環境を考察すれば、この地域で人が生活を行うようになったのは、縄文時代後期頃と考えられる。この時期は河内湾が淡水化して河内潟が形成された時期に相当する。山賀・亀井遺跡などで縄文時代晩期の土器片の出土がみられるほか、長原遺跡においても集落が検出された。久宝寺遺跡は河内潟の南側にあたる微高地および自然堤防上に立地する。既往の調査では自然河川しか確認されていないが、この河川の中には足跡が認められる。

弥生時代前期には、河内潟に注ぐ河川によって形成された微高地を中心として集落が営まれた。この時期の周辺遺跡は、山賀・美園・中田・跡部・亀井・田井中・長原・瓜破・八尾南遺跡があげられる。当遺跡では住居址こそ検出されていないが溝やピット、さらにしがらみや杭列を施した河川などが検出された。さらに中期になると河内潟の陸化に伴って、次々と新たに集落が営まれていったようである。新たに営まれた集落として若江北・東郷・小阪合・加美・東弓削・木の本・弓削遺跡などがあげられる。この時期には水稻耕作を基盤とする生活が安定期に入った頃で、集落規模の拡大が顕著である。当遺跡でも水田のほかに住居址・方形周溝墓などの遺構が検出されたことから、集落として安定した時期であったと考えられる。ところが後期になると一転して自然環境が不安定になる。各遺跡でも中期に相当する面が洪水砂で覆われてしまっているような状況が看取できる。この時期には当遺跡では、水田や住居址および自然河川に伴うしがらみ、さらに大規模な河川の埋没が認められる。

古墳時代は一般的に集落の増加が顕著にみられるが、萱振・友井東・美園・東郷・小阪合・中田・東弓削・加美・亀井・瓜破・八尾南遺跡などの諸遺跡は、庄内式～布留式期にかけて盛行する。当遺跡でも庄内式～布留式期を中心に集落が展開する。さらに、この時期に属する準構造船の一部も出土してお



- | | | | | | |
|------------|-----------|------------|---------------|----------|-----------|
| 1 久宝寺遺跡 | 13 友井東遺跡 | 25 成法寺遺跡 | 37 平野環濠都市遺跡 | 49 志紀遺跡 | 61 瓜破遺跡 |
| 2 玉串遺跡 | 14 美園遺跡 | 26 中田遺跡 | 38 亀井北(加美南)遺跡 | 50 田井中遺跡 | 62 瓜破廃寺 |
| 3 池島・福万寺遺跡 | 15 佐堂遺跡 | 27 東弓削遺跡 | 39 亀井遺跡 | 51 木の本遺跡 | 63 ゴマ堂山古墳 |
| 4 若江遺跡 | 16 弥刀遺跡 | 28 矢作遺跡 | 40 竹淵遺跡 | 52 弓削遺跡 | 64 成本廃寺 |
| 5 若江北遺跡 | 17 衣摺遺跡 | 29 龍華寺跡 | 41 植松遺跡 | 53 本郷遺跡 | 65 花塚山古墳 |
| 6 上小阪遺跡 | 18 西郷遺跡 | 30 洪川廃寺 | 42 太子堂遺跡 | 54 太田遺跡 | 66 瓜破北遺跡 |
| 7 小若江遺跡 | 19 加美北遺跡 | 31 跡部遺跡 | 43 勝軍寺跡 | 55 八尾南遺跡 | 67 三宅西遺跡 |
| 8 西郡寺跡 | 20 久宝寺寺内町 | 32 跡部銅鐸出土地 | 44 長原遺跡 | 56 大堀遺跡 | 68 三宅遺跡 |
| 9 萱振遺跡 | 21 宮町遺跡 | 33 加美遺跡 | 45 城山古墳跡 | 57 別所遺跡 | 69 三宅古墳跡 |
| 10 東郷遺跡 | 22 穴太廃寺 | 34 長楽廃寺 | 46 六反古墳跡 | 58 蔵重遺跡 | 70 権現山古墳跡 |
| 11 東郷廃寺 | 23 八尾寺内町 | 35 鞍作廃寺 | 47 長吉野山遺跡 | 59 三宅東遺跡 | |
| 12 山賀遺跡 | 24 小阪合遺跡 | 36 平野寺前遺跡 | 48 老原遺跡 | 60 喜連東遺跡 | |

図1 久宝寺遺跡周辺の遺跡

り、当遺跡が他地域との幅広い交流を持っていたことを伺わせる。中期においても前述の諸遺跡はひきつづき集落として営まれるほか、この時期には河内平野において開発が盛んに行われる。特に旧大和川や淀川、そしてその支流を中心に治水事業が行われており、『日本書紀』にも記述がみられる。また、既往の調査においても合掌型の堰など、大規模開発の一端を伺わせる遺構が検出された。さらに、丘陵付近にしか築造されていないと考えられていた古墳が、友井東・亀井・長原・八尾南遺跡といった平野部の遺跡においても多数確認された。当遺跡ではこの時期、溝・土坑・水田・自然河川および堰などの遺構が検出されたほか、韓式系土器など大陸との交流を伺わせる遺物の出土もみられる。後期になると周辺地域における集落は減少し、萱振・矢作・竹淵遺跡で確認される程度になり、それと同時に平野部に築造されていた古墳群も造営を停止してしまう。

飛鳥・奈良および平安時代になると、再び集落が増加しはじめ、弓削廃寺・渋川廃寺・竜華廃寺・鞍作廃寺などの寺院の建立も盛んに行われるようになる。当遺跡でも掘立柱建物や井戸といった集落遺構のほかには水田の検出も認められる。なお、平安時代の水田は現在の条里地割に一致するものである。

鎌倉時代～近世には、萱振・佐堂・小阪合・中田・矢作・長原遺跡などで集落が検出された。当遺跡では、人が居住した痕跡はみあたらず、水田・島畑などの耕作遺構が検出されたのみである。

近代～現代も引き続き当遺跡では水田や島畑などの耕作遺構が検出され、当調査区においてはその後、竜華操車場として利用された。そこで簡単に竜華操車場の歴史について述べる。現在の関西本線（大和路線）は、明治22年に大阪 - 柏原間に開通した大阪鉄道が同41年に複線化したものである。久宝寺駅は明治43年に設置された。昭和6年には竜華 - 加美 - 放出を結ぶ城東貨物線が開通し、貨物輸送の基地として竜華操車場が昭和13年10月より操業された。操車場は平面紡錘形を呈し、敷地面積が6万678坪、場内建物は160棟（4057坪）、場内レールの延長は約39kmあり、1日に約1500両の列車編成や客車・貨車の点検も行われた。さらに当操車場には機関区および客車区があり、城東貨物線を経て東海道本線の吹田操車場に通じていたため、東京をはじめとして稲沢および吹田操車場など各方面にも列車を送っていた。このように貨物輸送の基地として盛行していた竜華操車場であったが、トラック輸送の発展などに伴い序々に衰退の傾向を示すようになり、国鉄が民営化される前年の昭和61年に廃止された。

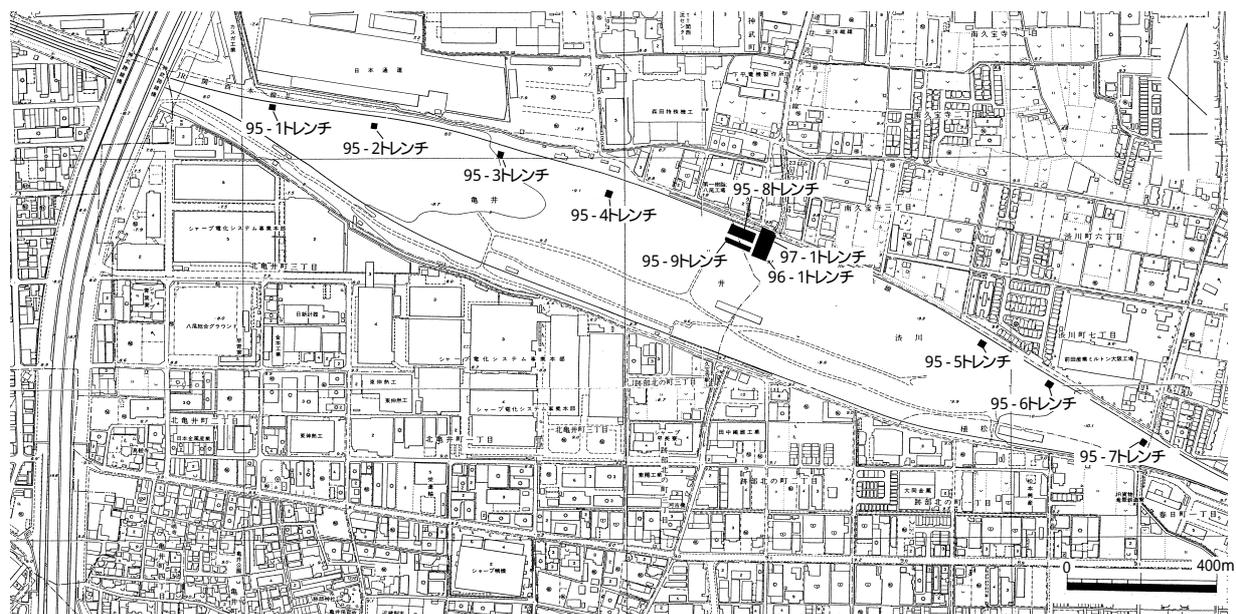


図2 久宝寺遺跡・竜華地区 トレンチ配置図

II . 調査に至る経緯と経過

久宝寺遺跡は縄紋時代～近・現代にまたがる複合遺跡として周知されている。縄紋時代の自然河川、弥生時代の方形周溝墓・水田、古墳時代の住居址・水田、平安時代の住居址、江戸時代の島畑など多数の遺構が検出されているが、特に弥生時代末から古墳時代の遺構については密度が高い。

今回の調査地は、旧国鉄の竜華操車場跡地内にあたる。平面紡錘形を呈す竜華操車場は鉄道輸送の基地として活躍していたが、1986（昭和61）年に国鉄民営化に先立って廃止され、その南北両辺を JR 関西本線（大和路線）の線路が走るのみとなっていた。しかし、その年の7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発事業が進められることとなった。そして、この広大な跡地の再開発を進めるために、操車場の南北両側に敷設されていた線路を北側に集約させ、北側中央部に久宝寺駅舎を新設することとなった。そこで、1988（昭和63）年¹⁾と1996（平成8）年²⁾に八尾市教育委員会が、1990（平成2）年³⁾と1996（平成8）年に(財)八尾市文化財調査研究会がそれぞれ調査を行った。さらに、1995（平成7）年には当センターが国鉄清算事業団近畿支社大阪事務所の委託を受け、操車場跡地北側の新線路予定地脇⁴⁾および JR 久宝寺駅舎・自由通路設置箇所⁵⁾の調査を行った。そして今回、一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴って大阪府八尾土木事務所の委託を受け、現地における発掘調査を96 - 1 トレンチはその1・2として1996年2月～同年7月、97 - 1 トレンチはその3として1997年7月～同年8月まで行った。

1) 八尾市文化財調査報告20『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 II』八尾市教育委員会1989

2) 八尾市文化財調査報告37『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書 II』八尾市教育委員会1997

3) (財)八尾市文化財調査研究会報告41『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 III』(財)八尾市文化財調査研究会1994

4) (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第5集『久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター1996

5) (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6集『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター1996

III . 調査の方法

トレンチの位置と呼称 96・97年度の2年度にわたる調査で2か所のトレンチを設定したが、位置は共に JR 久宝寺駅舎の東側、一般府道住吉八尾線の西側で八尾市渋川に所在する。そのトレンチの呼称であるが、久宝寺遺跡・竜華地区において1996（平成8）年度・1997（平成9）年度に当センターが調査を行った1番目のトレンチであることを示すために、「96 - 1 トレンチ」「97 - 1 トレンチ」と表した。

調査の方法 96 - 1 トレンチは現地表面（T.P.+9.0m）から T.P.+3.1m、97 - 1 トレンチは T.P.+3.8 m まで掘り下げなければならないため、トレンチの周囲に土留めの綱矢板を巡らし、操車場建設時の盛土および地下道建設時の裏込め土を重機で掘削、その後層位ごとに人力掘削によって調査を進めた。その際、綱矢板倒壊防止のため人力掘削の途中で2段の鉄骨切梁を設置した。土層観察用断面は96 - 1 トレンチは北辺・西辺・南辺・中央に、97 - 1 トレンチは北辺・西辺・南辺にそれぞれ設けた。

面と層の呼称法 機械掘削を終了し、人力による調査の開始される面を「第1面」と呼び、以下、上から順に調査面番号を付す。層名は、調査した面から次の調査面までを1つの層として番号を付す。すなわち同じ数字の「面 層」という順番になる。なお、ここでいう層とはあくまでも掘削と遺物の取り上げの単位であり、面と次の調査面との間の堆積は、土層観察の結果分層される。但し、場合によっては同一層内でも「上層」「下層」などに分けることもある。両トレンチとも同一番号の面は対応する。

遺構番号 両トレンチ共、遺構の種類別にそれぞれ上から下へ検出順に通しの遺構番号を付した。

地区割り 地区割りは当センターの地区割り方法に則り、国土座標第VI系（原点 東経136°00 北緯36°00 福井県越前岬付近）を基準にして使用した。調査時は100×100mの大区画と10×10mの小区画をそれぞれアルファベットとアラビア数字の組み合わせによる4文字で地区名を表して遺構の位置を特定し、さらに遺物の取り上げも行った。

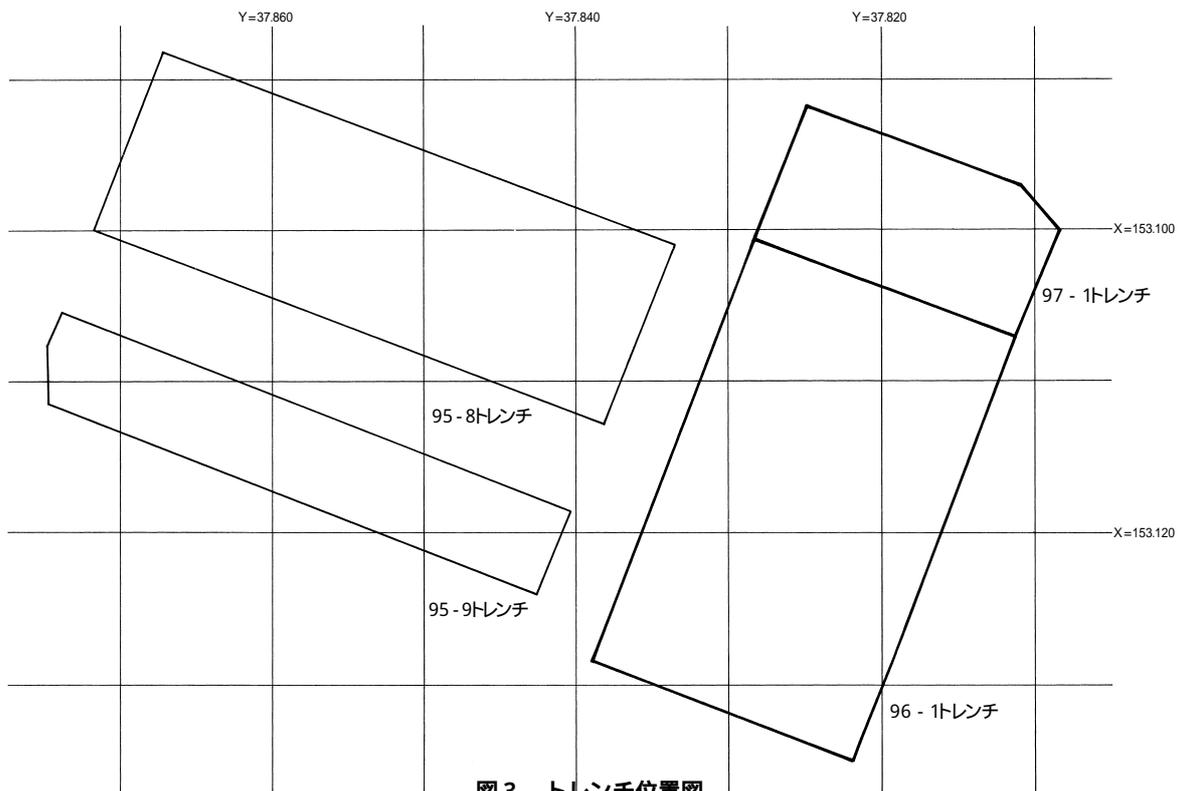
方位 地区割りを国土座標に準じていることから方位も座標北をもって表示する。調査時点における座標北は、96年度では磁北より東へ6°26'06"、真北より西へ0°13'54"、97年度では磁北より東へ6°24'、真北より西へ0°14' 振れる。

高さ 東京ペイル（T.P. 1874年から数年間の東京湾中等潮位 関東大震災により補正）を基準とした高さ・いわゆる標高0m）を適用した。ちなみに、東京ペイルと大阪ペイル（O.P. 1885年の大阪湾低潮位）はT.P. ± 0m=O.P. + 1.3mの関係にある。

記録の方法 全体遺構実測作業は、測量業者に委託して行ったクレーンを使用した写真測量による図化作業（1/100・1/50）の他に、平板測量（1/40）を行った。土層断面図は1/20のスケールで、堰の実測は1/10で行った。その他現地で行った個々の遺構や遺物の実測は、その都度適切なスケールを使用した。また、写真記録は35mm（モノクロ・スライド）と6×7（モノクロ・スライド）で撮影を行った。

整理作業 出土遺物は、トレンチ・地区・層位ごとに分類し、洗浄・注記・接合・復原を行った後、遺物の出土量を面・層位別にチェックすると共に、遺物を選別して実測を行った。両トレンチともに、実測を行った遺物の中から報告書に掲載するものを選出し、主に残存状態のよい遺物に関しては写真撮影を行い、当報告書に掲載した。

各種分析 花粉分析・珪酸体分析・¹⁴C年代測定・胎土分析・樹種鑑定などを行った。



IV . 調査成果

1 基本層序

今回の調査区は2か所あるが、96 - 1および97 - 1トレンチは隣接した位置にあることや、両トレンチとも土層の堆積状況と遺構面の検出とがほぼ同じであること、将来周辺の調査が行われることなどを考慮して、基本層序の記述はまとめて行うこととする。

第0層（現代） 第0層は竜華操車場設置に伴う盛土および攪乱層である。同層は2種類認められる。まず上層から、線路敷として使用された碎石層で、層厚約30～50cmを測る。碎石は10cm大のものが使用されている。下層は黄色粗砂混シルト層である。これは操車場造成の際の客土である。これらの層はすべて重機で掘削を行ったため、土層断面図には記載しないが、層厚は0.9～1.5mを測る。これとは別に操車場の地下をはしる府道の建設に伴ってコンクリートボックスを設置するための掘方埋土が調査区の東辺約3～5m幅で認められる。また、深さは掘削限界近くまでおよんでいるため、現地盤から1.5mまで重機で掘削し、それ以下は人力で掘削を行った。

第1層（現代） 竜華操車場造成直前の作土層である。島畑部・水田面および道路部で確認された。島畑上には粗砂混シルトの軟弱な作土が堆積する。層の上面には耕作に伴う溝が検出された。島畑と道路間の水田域にはグライ化の著しい粗・中砂混シルト層が厚く堆積する。97 - 1トレンチの西側に道路遺構がはしり、層厚約5cmの緑灰色細砂混シルト層の盛土で、1cm大のバラスを混ぜて強く突き固める。層厚は島畑部で約0.1m、水田域で約0.1m、道路部で約0.1～0.4mを測る。

第2層（江戸時代） 近世の作土層である。島畑部には粗・中砂混シルト層が堆積する。同層は管状斑が多くみられるほか、層の下部にはマンガンの沈着もみられる。層はあまり締まっていない。また、当該層は土器の細片を比較的多く含むが、多くは下層からの巻き上げによるものである。水田域には微砂混シルト層がよく攪拌を受けた状態で堆積する。層厚は島畑部で約0.4m、水田域で約0.1mである。

第3層（江戸～室町時代） 江戸～室町時代にかけての作土層である。島畑部に粗・細砂混シルト層が堆積する。土壌化が著しく、強く締まった土である。当該層も陶磁器や瓦器などの土器の細片を比較的多く含む。水田域は微・細砂混シルトが堆積し、マンガンの沈着が著しい。層厚は島畑部で約0.2m、水田域で約0.2mである。

第4 - 1層（鎌倉時代） 鎌倉時代の作土層である。水田域では後世の耕作に伴う攪拌によって残っていないため、島畑の下層にのみ残る。長期間に渡って安定していたと思われ、下層の第4 - 2層との境目はわかりにくい。層厚は約0.2～0.5mを測る。

第4 - 2層（鎌倉～平安時代） 鎌倉～平安時代にかけての土壌化層である。比較的安定した面であるが、第4 - 1層との境が不明瞭で検出が困難である。灰黄褐色中・細砂混シルト層やにぶい黄褐色粗砂混シルト層が堆積する。層中には土器の細片が多く含まれており遺構も多く検出された。層厚は0.1～0.3mで、調査区の東側に厚く堆積する。

第5 - 1層（古墳～平安時代） 上層は古墳～平安時代にかけての土壌化層（5 - 1層）である。5 - 1層は土壌化が著しく、かつ強く締まっていることなどから、長期間安定していたと思われる。また、同層は暗青灰色シルトで微砂をブロック状に含む。5 - 1層上面では掘立柱建物・溝・土坑・土器群などの遺構を多数検出した。層厚は約0.4mである。

第5 - 2層（古墳時代前・中期） 5 - 2層は5 - 1層を除去して検出したが、土壌化層である5 - 2

a層は97 - 1トレンチの一部にのみ堆積が認められ、96 - 1トレンチでは分層できなかった。5 - 2b層は古墳時代前期～中期にかけて埋没した旧河川内に堆積した洪水砂である。断面の観察によると、ラミナの方向や植物遺体の堆積状況などから考えて、洪水による堆積は大きく3回に分けることができる。

まず下層は、旧河川の最下層に堆積した洪水砂で、洪水が河床および下層を抉った際に堆積した中・細砂層と、河床のシルト層の上面に砂洲状に堆積する粗・中砂層が認められる。この層は95 - 8・95 - 9トレンチで検出された洪水砂の最下層に堆積したものと同一時期に堆積したものと考えられるが、それを利用して堰が構築される。次に、旧河川を覆い尽くして、ほぼその機能を失わせるほどに堆積した層である。この層は何層かに分層することができる。そして97 - 1トレンチでは旧河川が河道を移動させながら堆積していった状況が、また、96 - 1トレンチの南辺断面では堰1によって河道が分岐している状況が看取されるが、時間的には極めて短時間に堆積したものと考えられる。最後に、中層の洪水砂層が一気に堆積して河川としての機能をほぼ失った後、洪水砂の凹部を小さな流れがはしり、そこに堆積した細砂およびシルト層である。96 - 1トレンチではこのシルト層の中から完形の須恵器蓋杯が数点出土した。この洪水砂の層厚は約2.1～3.4mを測る。

第6層（～古墳時代以前） 当該層から下層は96 - 1・97 - 1トレンチとも全く同じ堆積状況であることが看取できた。第6面は5世紀後半に埋没した旧河川（第5 - 2層）の河床にあたり、当該層は均一な細かいシルト層が概ね水平に堆積しており、土壌化が認められかなり安定した状態にあったと考えられる。遺物は鉄鏃が1点のみ出土した。層厚は0.3～0.6mを測る。

第7層（古墳時代以前） 当該層は上層の土壌化層と下層の自然堆積層に分層できる。上層の土壌化層である暗灰・黒褐色シルト層はほぼ水平に堆積する。層中には炭化した植物遺体を多く含む。また、土壌化層の下面には踏み込みが多くみられる。これらのことなどから水田層の可能性も考えられるが、畦畔などの遺構は検出されなかったため、確定できなかった。層厚は約0.1mである。下層の自然堆積層は何層かに分層できるが、細砂とシルトの細かいラミナ・未分解の植物遺体層・炭酸マグネシウム結核の集積層などがみられることから、いずれの層の上面も遺構面として捕らえることができなかった。

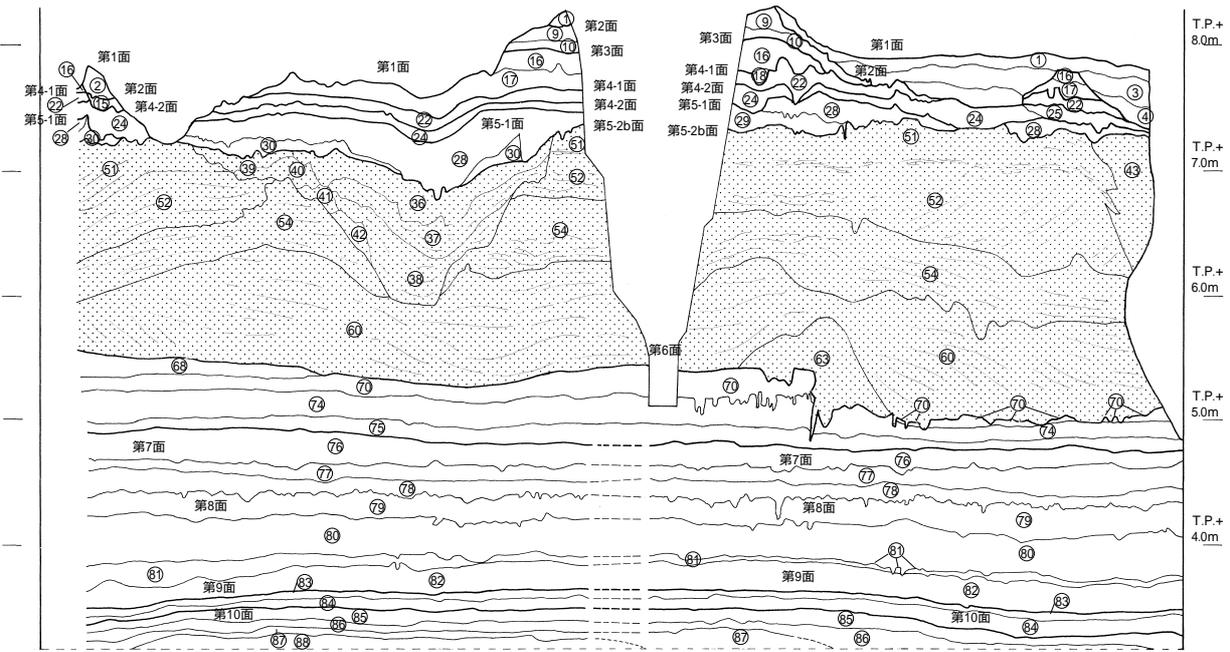
第8層（古墳時代以前） 当該層は従来第7層中の細分として扱ってきたが、やや土壌化が認められることから97 - 1トレンチのみ調査を行った。上層の土壌化層と下層の自然堆積層に分けられる。層はほぼ水平に堆積しているが、土壌化層上面は乾痕状の凹凸が多数認められ、精査した結果遺構は検出されなかった。これは、湿地状に水成堆積した土壌が何らかの理由でやや乾燥した状況になった後、再び湿潤な環境に戻ったためと考えられる。

第9層（古墳時代以前） 当該層は掘削深度の都合上96 - 1トレンチのみ調査を行った。土壌化層の暗灰色シルト層と自然堆積層の緑灰色シルト層からなる。暗灰色シルト層には未分解の植物遺体、アシの根などがみられ、下面には踏み込みが多くみられる。緑灰色シルト層は均一にシルトが堆積する。層厚は上・下層ともに約0.1mである。

第10層（古墳時代以前） 当該層も掘削深度の都合上96 - 1トレンチのみ調査を行った。土壌化層の黒色シルト層と自然堆積層の黒色・明緑灰色シルト層の2層からなる。黒色シルト層の下面には生痕が認められる。黒色・明緑灰色シルト層は細かいラミナがみられ、未分解の植物遺体や炭酸カルシウム結核の集積層が間層として入る。掘削深度を越えて堆積するため正確な層厚は不明であるが、上層で約0.1m、下層で約0.3m以上である。

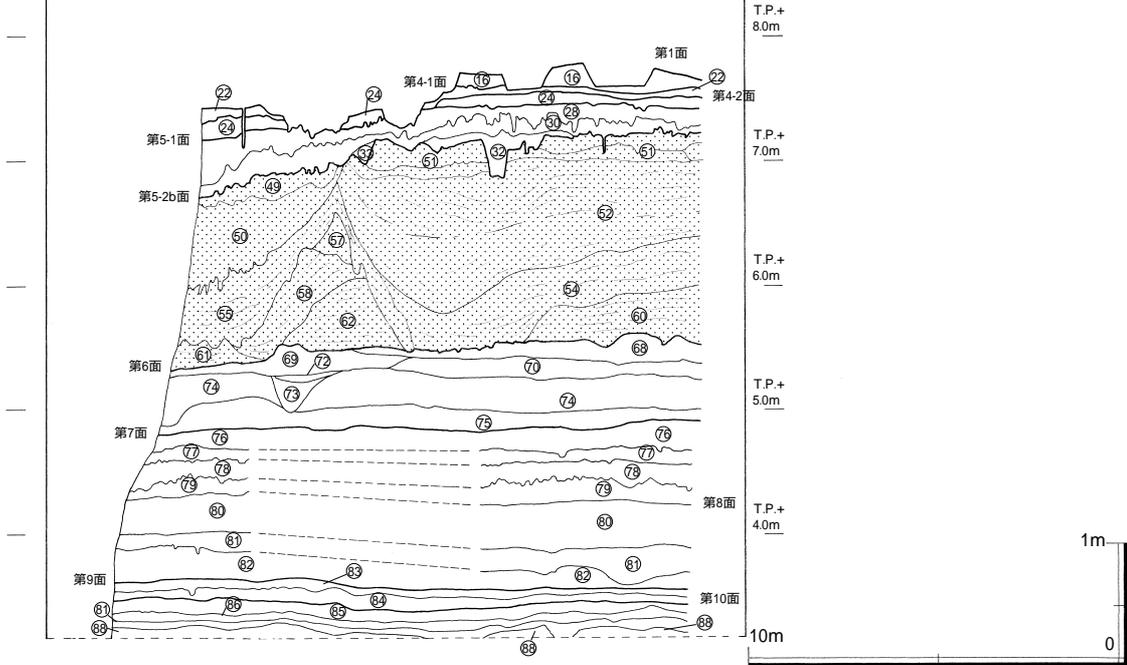
SW

NE



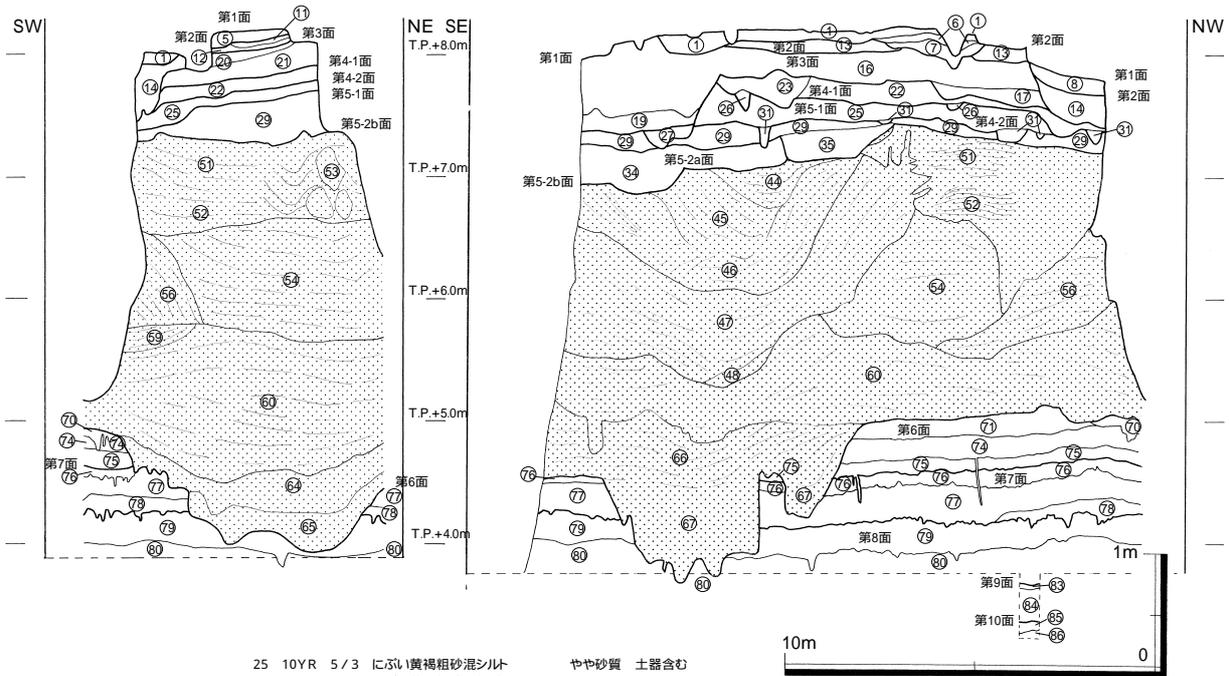
SE

NW



- | | | | | |
|----|------|-----|-------------------|---------------------------------------|
| 1 | 75Y | 5/1 | 灰粗砂混細砂 | 炭、3-5mm大の礫含む |
| 2 | 25Y | 7/4 | 浅黄シルト混細砂 | マンガン、土器片含む |
| 3 | 58BG | 4/1 | 暗青灰粗砂混細砂 | シルトブロック含む 粘性やや高い |
| 4 | 10G | 4/1 | 暗緑灰粗砂混細砂 | シルトブロック含む 粘性高い |
| 5 | 75Y | 6/1 | 灰細砂 | 5mm大の礫含む 固く締まる |
| 6 | N | 4/0 | 灰粗砂混細砂 | |
| 7 | 5GY | 5/1 | オリブ灰粗砂混細砂 | ややシルトっぽい |
| 8 | 58G | 4/1 | 暗青灰中砂混細砂 | |
| 9 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐粗砂・シルト混細砂 | マンガン、土器、炭含む 5Y 6/1 灰シルトまじり細砂をブロック状に含む |
| 10 | 25Y | 6/3 | にぶい黄粗砂混細砂 | 3-5mm大の礫含む |
| 11 | 5Y | 7/2 | 灰白粗砂混細砂 | 5mm大の礫含む |
| 12 | 25Y | 6/3 | にぶい黄粗砂混シルト | 3-5mm大の礫含む 踏み固めている |
| 13 | 10YR | 4/2 | 灰黄褐粗砂シルト混細砂 | 土器片含む 上層に鉄分・マンガンの沈着有 |
| 14 | 10BG | 3/1 | 暗緑灰細砂混シルト | 3mm大の礫含む |
| 15 | 10BG | 5/1 | 青灰シルト混細砂 | |
| 16 | 25Y | 6/4 | にぶい黄粗砂・シルト混細砂 | 3-5mm大の礫、土器片、炭含む やや粘性高い |
| 17 | 25Y | 5/1 | 黄灰中砂・シルト混細砂 | 鉄分沈着有 |
| 18 | 25YR | 5/3 | にぶい赤褐粗砂混シルト | |
| 19 | 75YR | 6/6 | 橙 N 6/0 灰細砂混シルト | 粘っこい |
| 20 | 5Y | 6/1 | 灰細砂混シルト | 1-3mm大の礫と炭含む 踏み固める |
| 21 | 75YR | 4/3 | 褐 10Y 6/1 灰粗砂混シルト | |
| 22 | 10YR | 5/3 | にぶい黄褐中・細砂混シルト | 3mm大の礫含む 鉄分・マンガンの沈着有 |
| 23 | 25Y | 4/1 | 黄褐粗砂混シルト | 土器片多く含む |
| 24 | 10YR | 5/2 | 灰黄褐中・細砂混シルト | マンガンの沈着多い |

図4 96-1 トレンチ 西辺断面図・南辺断面図



25	10YR	5/3	にぶい黄褐粗砂混シルト	やや砂質 土器含む
26	10YR	5/3	にぶい黄褐粗砂混細砂	
27	10YR	6/6	明黄褐 10Y 6/1	灰粗砂混シルト
28	10YR	5/1	褐灰粗・細砂混シルト	土器、炭含む の細砂ブロック含む
29	7.5YR	5/2	灰褐中・細砂	シルトブロック含む
30	7.5YR	6/4	にぶい橙シルト混細砂	若干の土壌化がみられる
31	10YR	6/4	にぶい黄橙粗砂混シルト	3-5mmの礫含む
32	2.5Y	5/1	黄灰中・細砂混シルト	土器片含む(39)の細砂ブロック含む
33	5Y	6/1	灰中・細砂混シルト	
34	10YR	6/6	明黄褐 7.5Y 6/1 灰細砂、極細砂	
35	2.5Y	7/1	灰白 10YR 6/6 明黄褐中砂混細砂	1-3mmの礫含む
36	N	3/0	暗灰シルト	炭、アミの根含む
37	N	4/0	灰細砂混シルト	植物遺体含む
38	N	5/0	灰シルト混細砂	
39	5Y	7/1	灰白中・細砂	ラミナ有
40	5Y	5/2	灰オリブ中砂	シルトブロック含む
41	5Y	5/2	灰オリブ中砂	N 5/0 シルトブロック含む
42	5Y	6/2	灰オリブ粗・中砂	N 5/0 灰シルトブロック含む
43	5Y	7/3	浅黄細砂とシルトの互層	
44	5BG	4/1	暗緑灰細砂混シルトと2.5Y 6/6	明黄褐細砂混粗砂(1-3mmの礫含む)と2.5GY 5/1 灰極粗砂の互層
45	2.5Y	7/1	灰白シルト混極細砂と2.5Y 7/4	浅黄極細砂と2.5Y 6/1 黄灰シルト混極細砂と2.5Y 6/6 明黄褐中砂混粗砂の互層
46	5BG	4/1	暗緑灰シルト	
47	7.5YR	7/8	黄橙粗砂混極細砂	1-3mmの礫含む
48	5G	4/1	暗緑灰極粗砂混シルト	
49	N	3/0	暗灰シルト	炭、アミの根を含む
50	N	4/0	灰中・細砂混シルト	植物遺体含む
51	10Y	6/1	灰中砂混細砂	シルトブロック含む
52	5Y	6/2	灰オリブ中砂・細砂の互層	ラミナ有
53	5B	5/1	青灰シルト	
54	7.5Y	6/1	灰中砂と細砂の互層	ラミナ有 下層は植物遺体層・シルト・細砂の互層
55	2.5Y	6/6	明黄褐粗・中砂	シルトブロック含む
56	2.5Y	6/6	明黄褐極粗砂混粗砂と10Y 5/1	灰中砂と10Y 5/1 灰中砂混粗砂と7.5Y 6/1 灰極粗砂混粗砂の互層
57	5Y	6/3	オリブ黄中・細砂・シルトの互層	
58	2.5Y	6/1	黄灰 2.5Y 6/4 にぶい黄細砂・シルトの互層	
59	7.5Y	6/1	灰細砂混中砂と7.5Y 7/1	灰白粗砂の互層
60	10Y	7/2	灰白粗・中砂	ラミナ有
61	5YR	5/8	明赤褐粗砂混礫	
62	2.5GY	7/1	暗オリブ灰中・微砂の互層	
63	N	6/0	灰中砂	
64	7.5Y	6/2	灰オリブ中砂とN 6/0	灰細砂の互層
65	N	5/0	灰粗砂	0.5-2cmの礫含む
66	7.5Y	6/2	灰オリブ中砂とN 6/0	灰細砂の互層
67	N	6/0	灰中砂混細砂の互層	5GY 4/1 暗オリブ灰シルトブロック含む
68	N	5/0	灰微砂とシルトの互層	アミの根含む
69	10GY	4/1	暗緑灰シルト	
70	7.5GY	4/1	暗緑灰シルト	炭酸カルシウム結核多く含む
71	10BG	3/1	暗青灰シルト	
72	5BG	4/1	暗青灰微砂混シルト	炭酸カルシウム結核、アミの根含む
73	N	5/0	灰微砂混シルト	炭酸カルシウム結核多く集積する
74	5PB	4/1	暗青灰シルト	炭の層がみられる アミの根含む 上下2枚の土壌化層有
75	5BG	4/1	暗青灰シルト	炭酸カルシウム結核含む
76	N	4/0	灰微砂混シルト	
77	10Y	6/2	オリブ灰細砂混シルト	
78	7.5Y	5/2	灰オリブ微砂混シルト	
79	2.5Y	4/3	オリブ粗シルト	植物遺体含む 表面に乾泥がみられる 土壌化層
80	2.5Y	4/1	黄灰シルト	炭酸カルシウム結核の集積層と植物遺体の互層 ビビアナイト含む
81	5Y	6/2	灰オリブ粗砂	ラミナ有 ビビアナイト含む
82	2.5Y	4/2	暗灰黄微砂とシルトの互層	ビビアナイト含む
83	2.5Y	3/1	黒褐微砂混シルト	ビビアナイト、植物遺体含む
84	2.5Y	5/1	黄灰シルト	
85	N	1.5/0	黒シルト	アミの根有
86	10GY	5/1	緑灰シルト	
87	N	4/0	灰シルト	
88	5G	5/1	緑灰シルト	

図5 97-1 トレンチ 西辺断面図・南辺断面図

2 96-1 トレンチ

a. 遺構

第1面 (図6) 調査区北半部では島畑が検出された。島畑の上面には耕作に伴う溝(犁溝)が検出された。溝は北西-南東方向にはしるものが19条検出された。溝はいずれも幅20~40cm、深さ5~10cmを測る。溝間幅(畝)は北側では0.4~0.8mと広く、南側では0.2~0.3mと狭い。これらの溝に直交して北東-南西方向の溝が3条はしる。そのうちの1条は島畑の西端をはしる。規模は直交する溝とほぼ同じである。また、島畑の西側からは水田が検出された。島畑と水田面の比高は0.4mを測る。調査区の東端は前述の攪乱と、その影響を受けて幅約1mにわたって崩落がみられるため、島畑の東端は確認できなかった。さらに調査区南半部は竜巻操車場造成時の攪乱が第3層にまで達しているため、当該面の遺構は確認できなかった。標高は8.4mを測る。

第2面 (図7) 当該面で検出された主な遺構はピット列である。一辺約0.2mの方形の掘方を持ち、北西-南東方向に2~2.4mの間隔で並ぶ。ピット列は調査区北側に3列、中央に1列みられる。方形のピットはその他にも数基検出された。また、島畑の西側にある水田面からは畦畔の一部が検出された。畦畔の規模は幅1.0m、高さ0.2mを測る。島畑と水田の比高は約0.5mである。調査区南半部の大部分は、第1面と同様削平を受けており、遺構の検出には至らなかった。標高は8.3mを測る。

第3面 (図8) 調査区北半部では北西-南東方向にはしる溝(犁溝)が10条、およびピット数基を検出した。溝は第2面の北側のピット列と中央のピット列の間にはしる。このことから、これらの溝は第2面での耕作に伴う溝の可能性が高い。また、ピットも第2面に伴うものと考えられる。調査区南半部は第1・2面同様削平を受けており遺構の検出には至らなかった。標高は8.2mを測る。

第4-1面 (図9) 調査区東端で南北方向にはしる溝を検出した。深さは約0.5mを測り、掘り直しがみられる。溝は調査区外にのび、粗~中砂を含むシルトで埋まる。南半部は溝(犁溝)数条、ピットが2基検出された。それ以外には遺構は検出されなかった。標高は7.8mを測る。出土遺物は陶磁器・

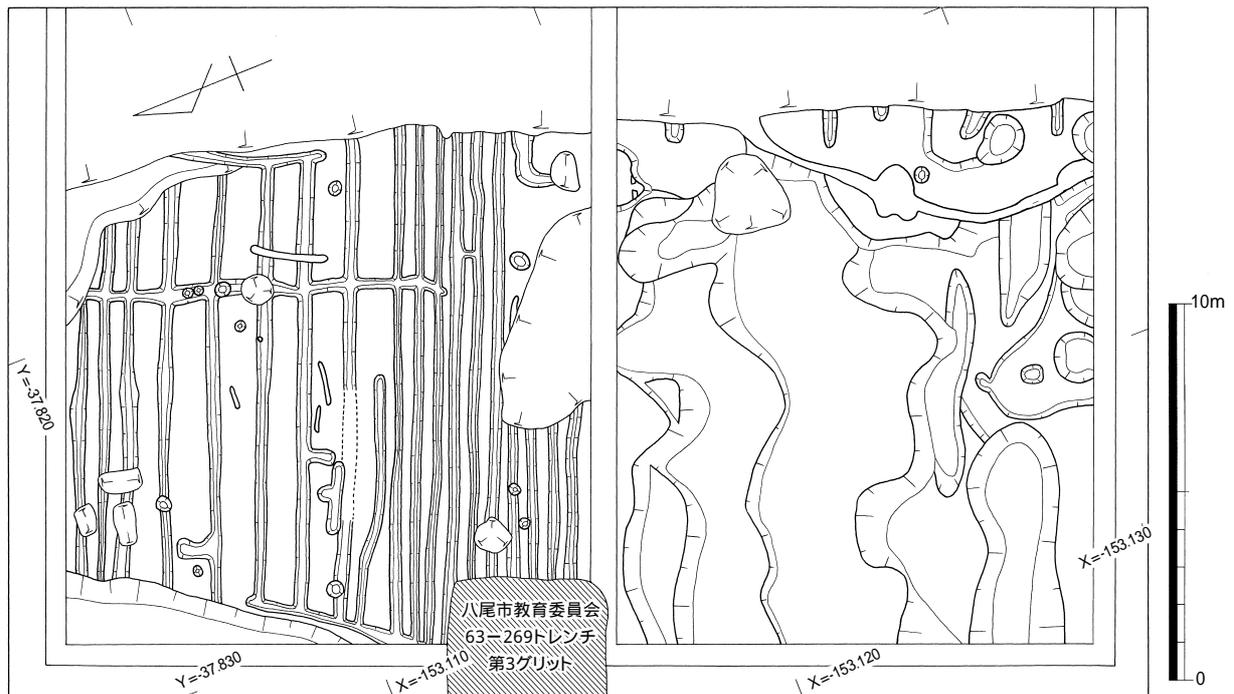


図6 96-1 トレンチ第1面 遺構平面図

瓦質土器・土師器・須恵器・瓦などである。下層から巻き上げられた遺物も含まれる。

第4 - 2面 (図10) 調査区北東部は微高地状の高台になり、その上面には北東 - 南西方向にはしる溝、北西 - 南東方向にはしる溝が直交しており、ピットも数基検出された。溝、ピットの埋土は第4 - 1層の黒色土層である。調査区西側もやや高台になっており、その上面では溝が検出された。調査区南半分は北西 - 南東方向にはしる溝3条および、落ちがみられた。標高は7.6mを測る。出土遺物は須恵器・土師器・韓式系土器などである。



図7 96 - 1 トレンチ第2面 遺構平面図

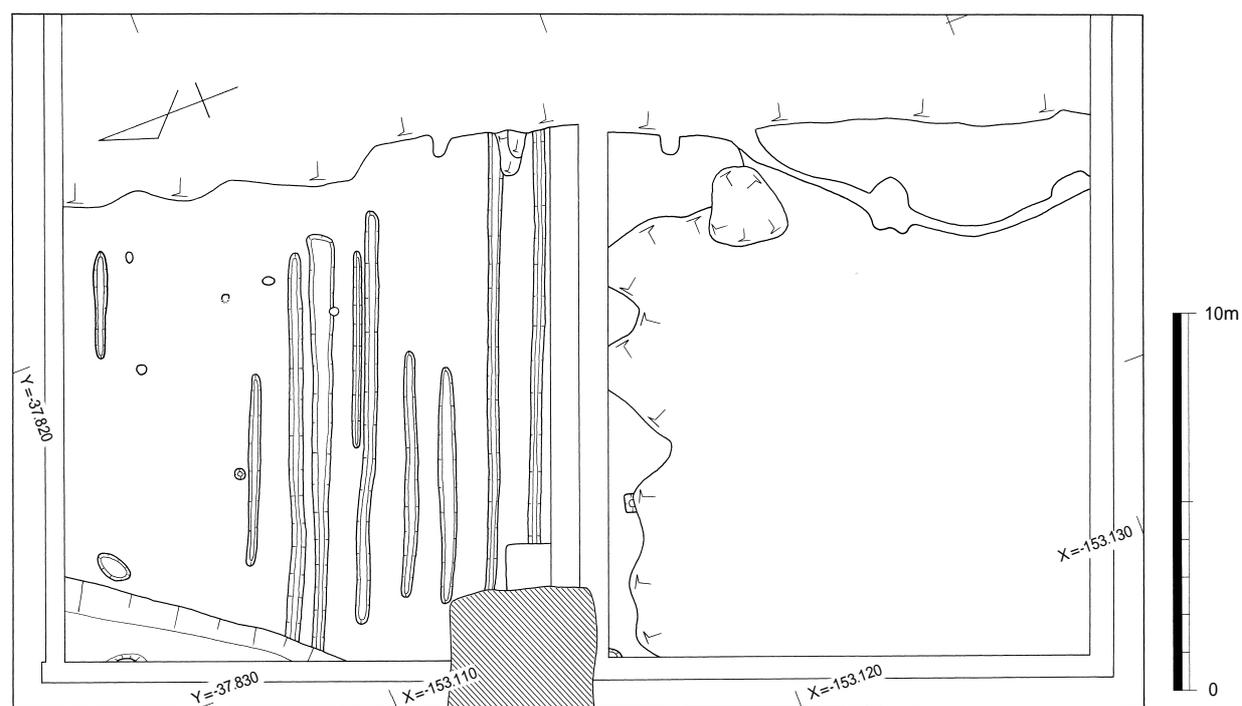


図8 96 - 1 トレンチ第3面 遺構平面図

第5 - 1面(図11) 安定した土壌層であり、比較的長期にわたって存在した面と考えられる。遺構は調査区北側に南北方向にはしる溝43が検出された。幅は1.1m、深さ3.0mを測り、断面は逆台形を呈する。溝埋土は上層には中砂を、下層には粗砂を多く含んだシルトに細分でき、ある程度溝として機能していたが、洪水砂によって埋没したと考えられる。遺物が多く含まれており、手捏土器・須恵器・土師器などが出土した。その他に数条の溝、ピットなどが検出されたが、遺物をほとんど含まない。調査区中央部から2間(3.8m)×2間(3.4m)の掘立柱建物が検出された(図13)。掘方は東列と西列は方形

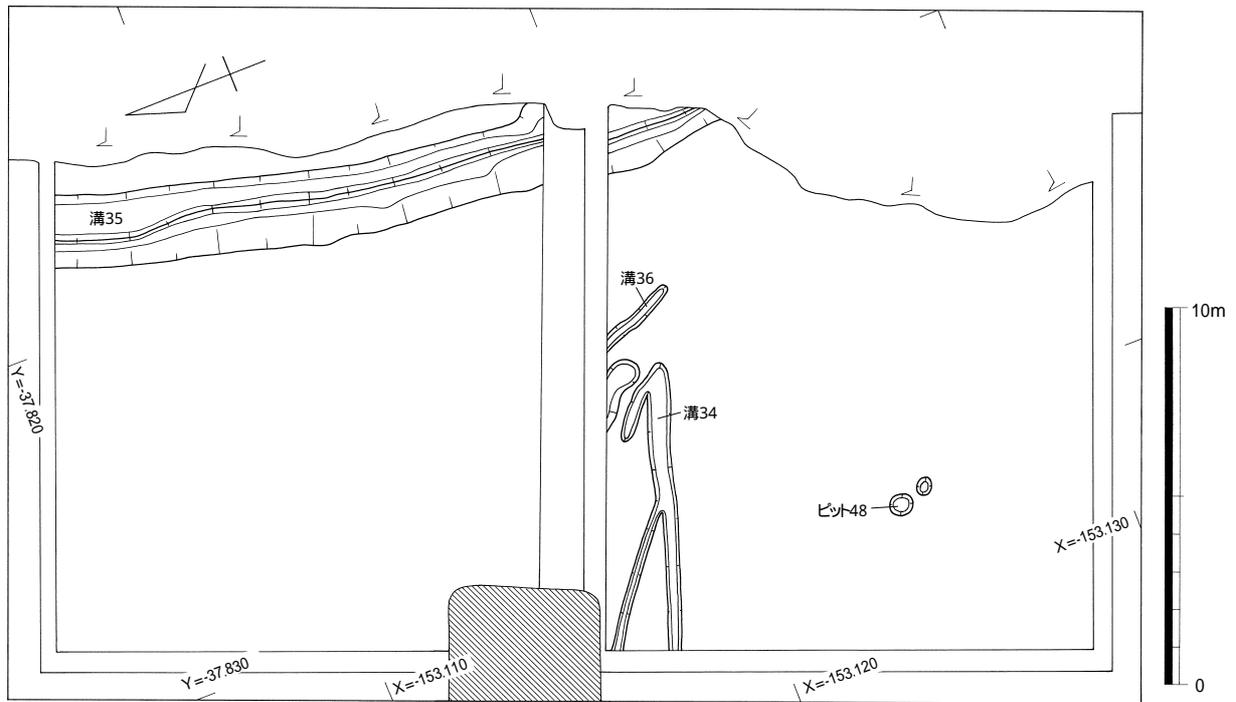


図9 96-1トレンチ第4-1面 遺構平面図

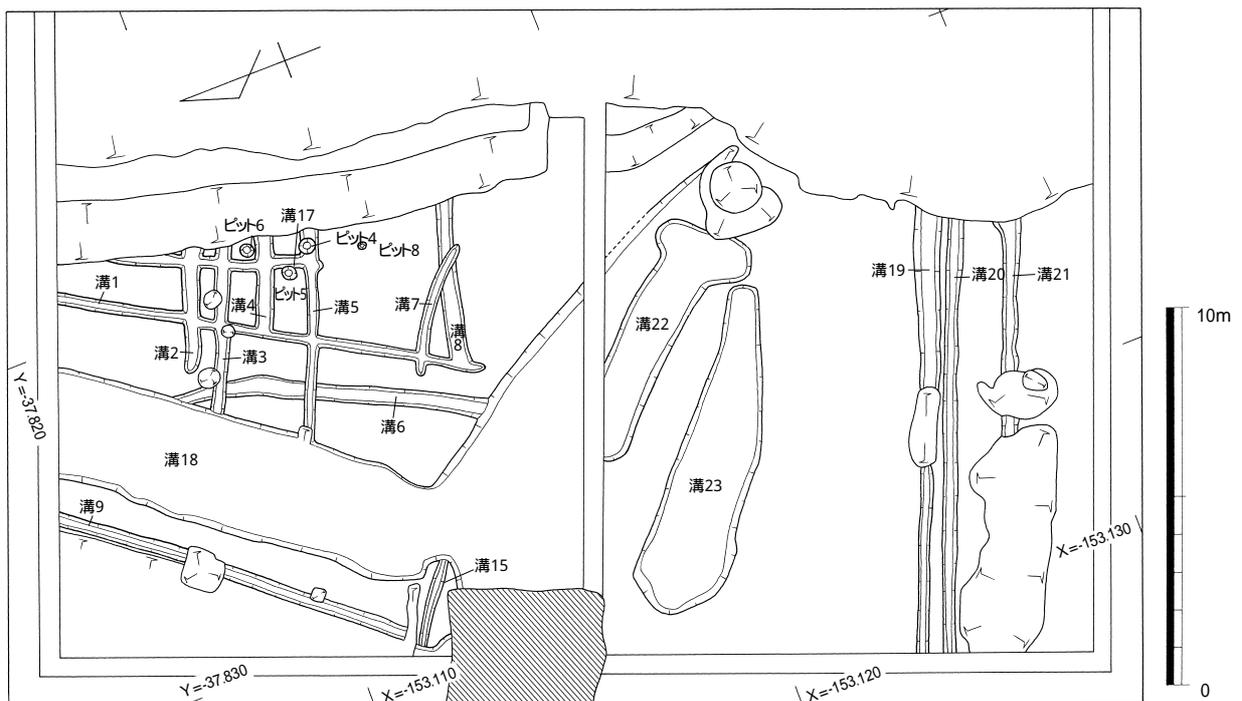


図10 96-1トレンチ第4-2面 遺構平面図

であり、中央列は柱あたりのみで掘方の検出ができなかった。掘方内から出土した遺物で図示できるものはないが、土師器と黒色土器の細片がある。調査区中央部で土器が集中している状況がみられた。土器群は大きく7群に分けられる(図14・15)。土器群を構成する遺物は、土師器・須恵器・韓式系土器などがあげられる。器種は樽型甕・甕・鉢・高杯・蓋杯などである。完形で出土したのは須恵器の蓋杯のみである。しかし、遺物の破片は個体ごとに集中しており、完形に近い状態に復原することができた。土器群はかなり重層的に出土したが掘方などは確認できなかった。それぞれの土器群には時期差がみられないことから同時期に廃棄されたものであると考えられる。時期は古墳時代後期に相当する。さらに、特筆すべきこととして、提瓶がほぼ完形で3個体検出されたことがあげられる(図12)。北東-南西方向に約2.5m間隔でほぼ一直線に並ぶ。しかし、土器12は溝43の肩部中程より出土しているため、性格が異なる可能性もある。土器1、土器2については掘方を検出したが、あまり明瞭ではない。しかし、土器1は側面を立てた状態で出土したことから、ピット内に埋められた可能性が高い。それぞれの提瓶の検出レベルだが、ピット14出土の土器1は7.4m、ピット20出土の土器2は7.6m、土器12は7.1mとな

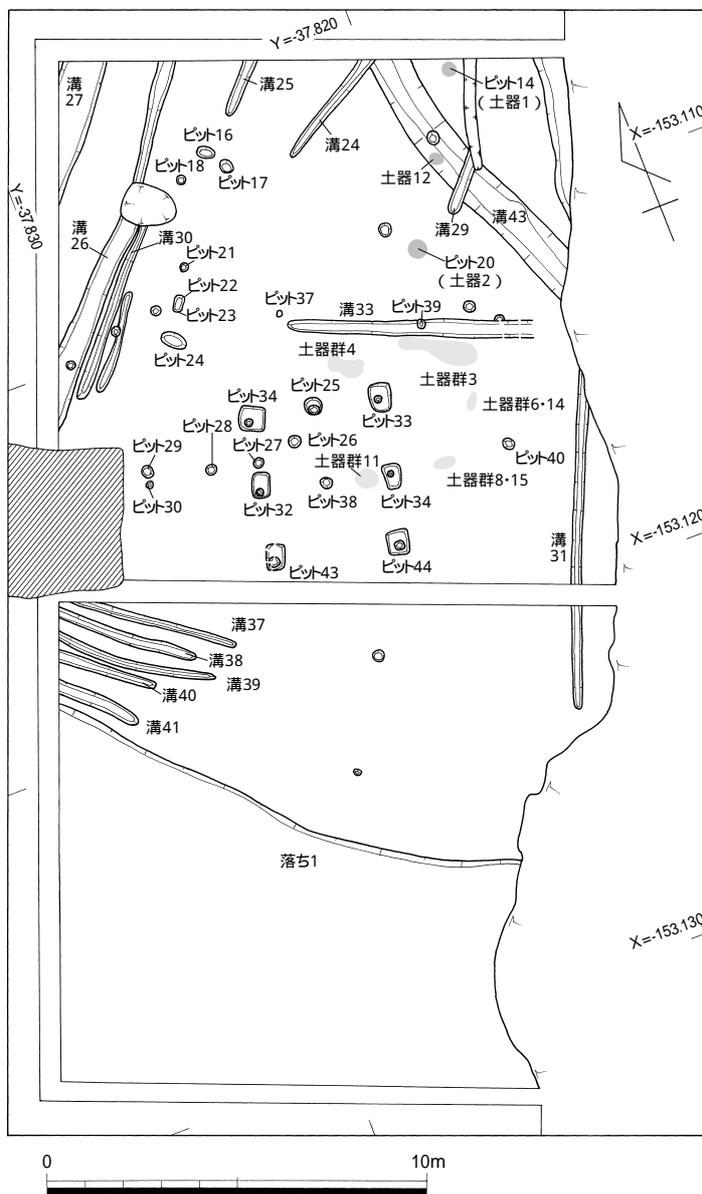


図11 96-1トレンチ第5-1面 遺構平面図

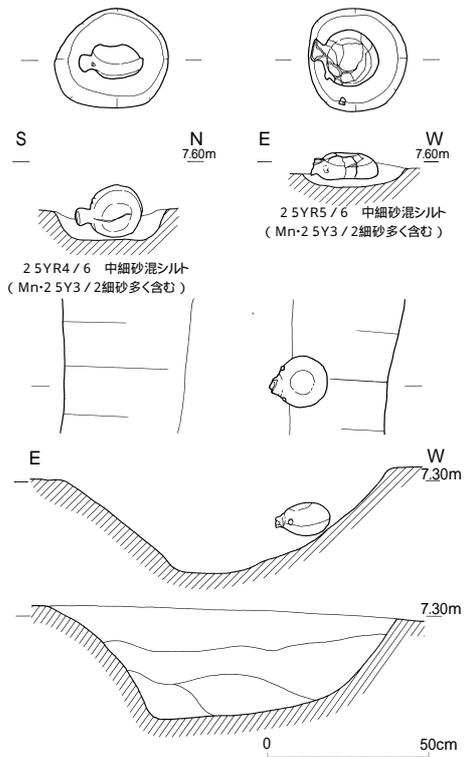


図12 96-1トレンチ 遺物出土状況

- ① 5YR3/6 暗赤褐粗・中砂混シルト
- ② 5Y4/1 灰粗・中砂混シルト 小石を含む
- ③ 5Y3/2 オリーブ黒粗砂 小礫混シルト
- ④ 5Y3/1 オリーブ黒小礫混細砂

左上 ピット13(土器1)・右上 ピット20(土器2)
真ん中 土器12(溝43)・下 溝43 土層断面

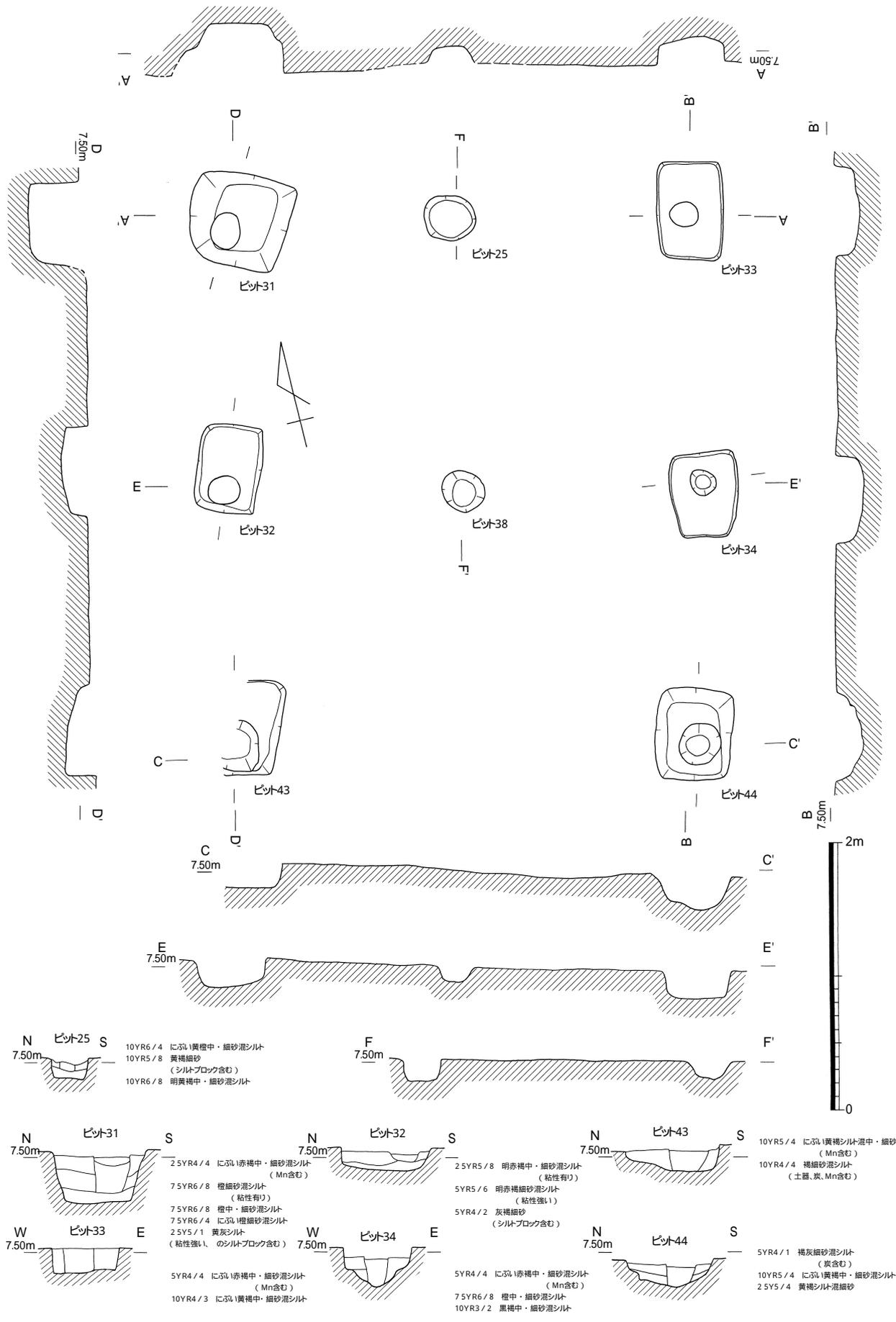


図13 96-1トレンチ 掘立柱建物1 平面図・断面図

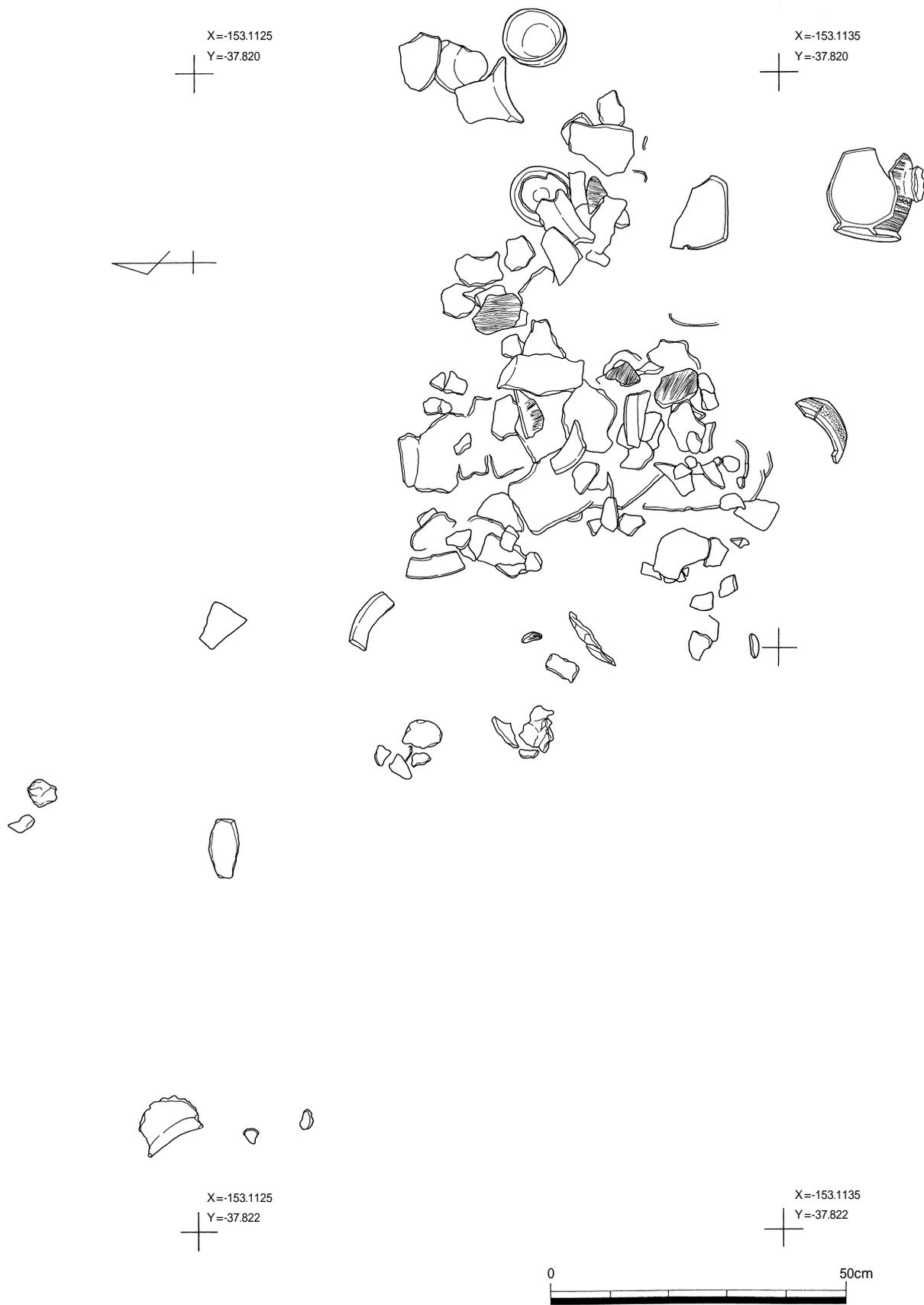


図14 96 - 1 トレンチ 土器群 3 平面図

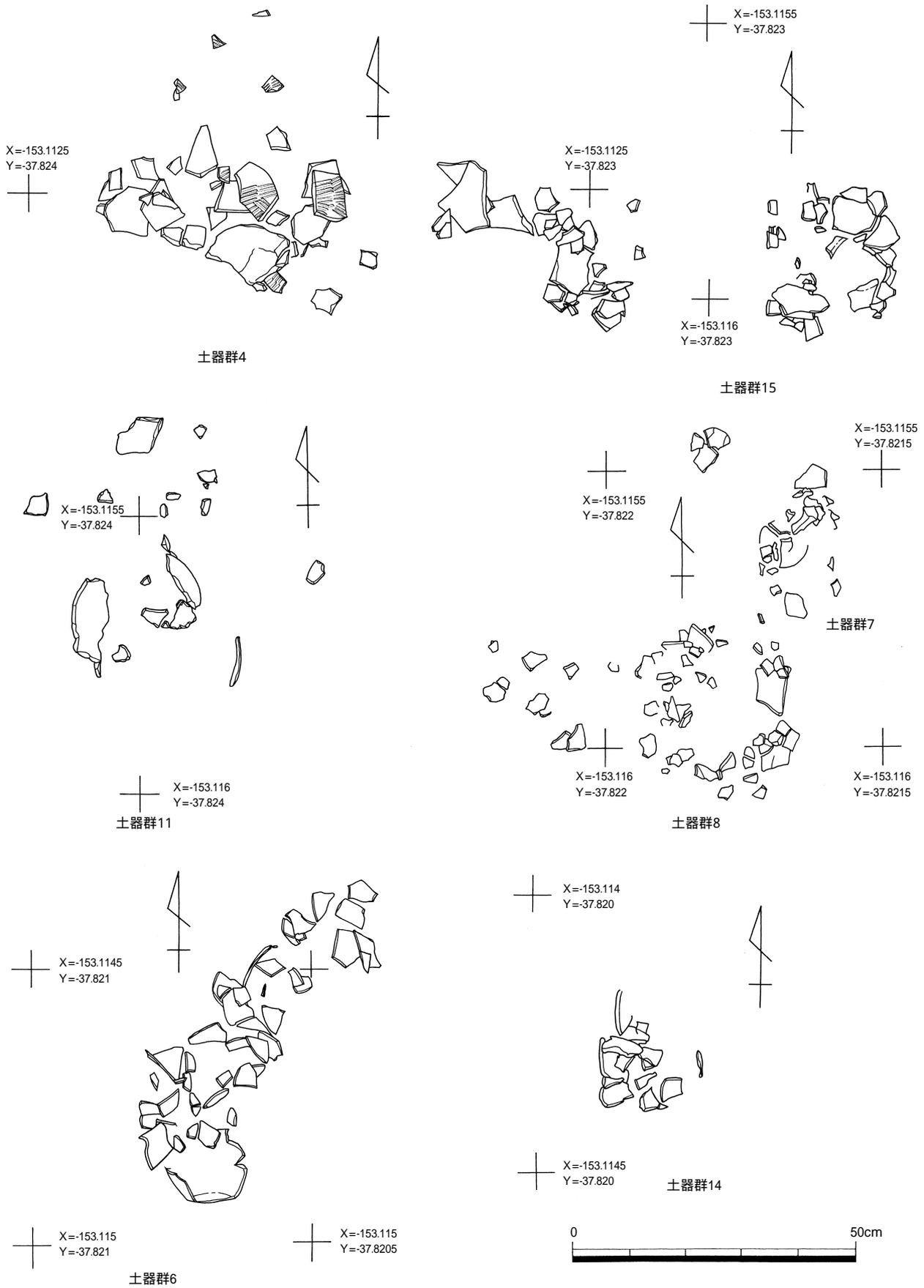


図15 96 - 1 トレンチ 土器群4・6・7・8・11・14・15 平面図

る。調査区中央では、北西 - 東南方向に溝が5条みられるが、これらの溝は第4 - 2面での耕作に伴う溝と考えられる。その他、調査区北側では獣歯が検出された。標高は7.4~7.6mを測る。

第5 - 2面 (図16) 当該面は古墳時代中期に埋没した旧河川の洪水砂の上面である。遺構は少なく調査区北半部でピット数基、南半部で落ちが2か所検出された。ピットは径0.2~0.4mを測り、5 - 1面からの掘込みと考えられる。調査区西側にある落ち2は3つの段を有し、深さは0.4mを測り、シルト層が堆積する。調査区の東側にある落ち3は緩やかな落ちで、長さ8m以上、幅5m以上、深さ0.3mを測る。これも埋土にシルト層が堆積する。これらの落ちは洪水砂が堆積した際の凹地部分と考えられ、流木や須恵器杯などが出土した(図34 - 130~133)。標高は7.1~7.4mを測る。

第5 - 2層 旧河川に堆積した洪水砂である。層厚1.5~2.0mを測る。洪水砂は幾つかのラミナの不整合がみられるが、大きく3層に分けることができる。まずは、下層に堆積する粗・中砂層で、第6面の直上を砂洲状に堆積しており、調査区の中央を南北方向に幅約5mにのびる。この砂洲状の高まりを利用して堰2が構築される。次に中層に堆積する中砂を中心とする層で、河床面に構築された堰を埋没させて厚く堆積する。この洪水砂の堆積によって旧河川は埋没してしまい、その機能を失う。最後にシルト層と細砂層、それに植物遺体層の互層がみられる。これらの層は、この旧河川が中砂の堆積によって一気に埋没した後、洪水砂の堆積のうすい部分が流水と滞水を繰り返して堆積し、最終的には第5 - 2面の落ちを形成するに至る。

下層の洪水砂からは須恵器・土師器・叩き石・サヌカイト片の他、ローリングをうけて磨滅した弥生土器片など多くの遺物が出土した。

第6面 (図17・18) 洪水砂を除去した面で、旧河川の河床部分に当たり、合掌型堰2基・溝1条・落ち2基などを検出した。しかし、当該面は自然科学分析の結果、多量のイネのプラントオパールが検出され、水田であった可能性の高いことが指摘されたが、これは従来地表面であったところが洪水により河道が変化して河床面となったために水田の耕作土層が削平を受けたものか、もしくは第6層が堆積し

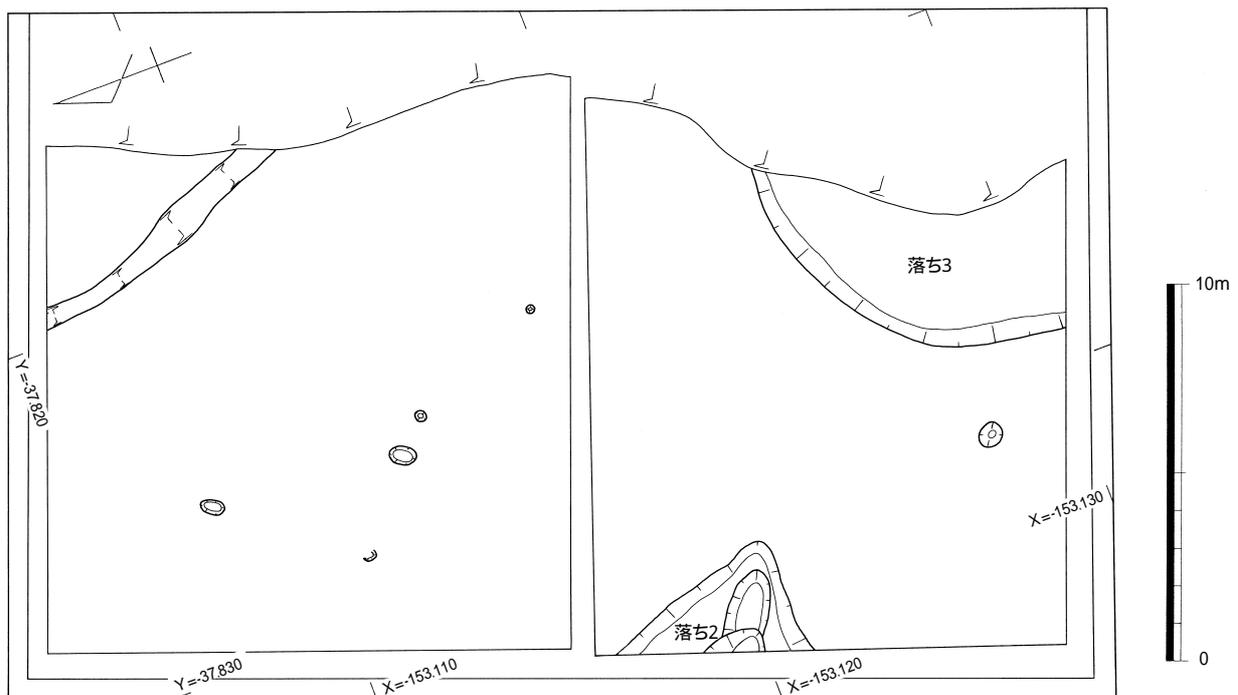


図16 96 - 1トレンチ第5 - 2面 遺構平面図

た際に、プラントオパールが二次堆積したものと考えられる。当該面の標高は5.0~5.4mを測る。堰2の真下部分に土坑状の落ち4があるが、その深さは0.4~0.8mを測る。中には粗・中砂が堆積する。落ち5は調査区の北西隅に位置する。落ち5の底には平面「V」字形の深い抉れがみられ、深さは1.6mを測る。埋土はやはり粗・中砂が入る。落ち6は南北方向にのびる階段状の落ちで、西へ下がる。これらの落ちは洪水によって河床が抉られてできたと考えられる。溝は幅2.7m、深さ0.3mを測り、調査区西端をほぼ南北にはしるが、これは95-8トレンチで検出した溝18の続きである。

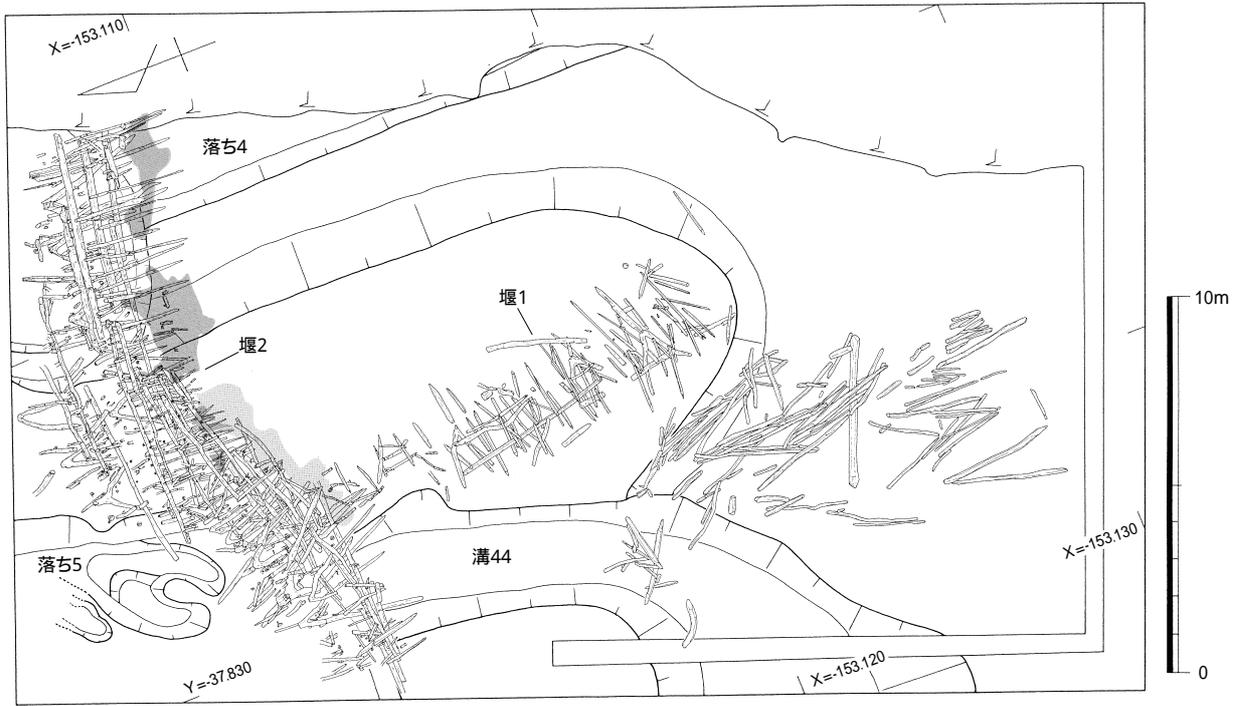


図17 96 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図

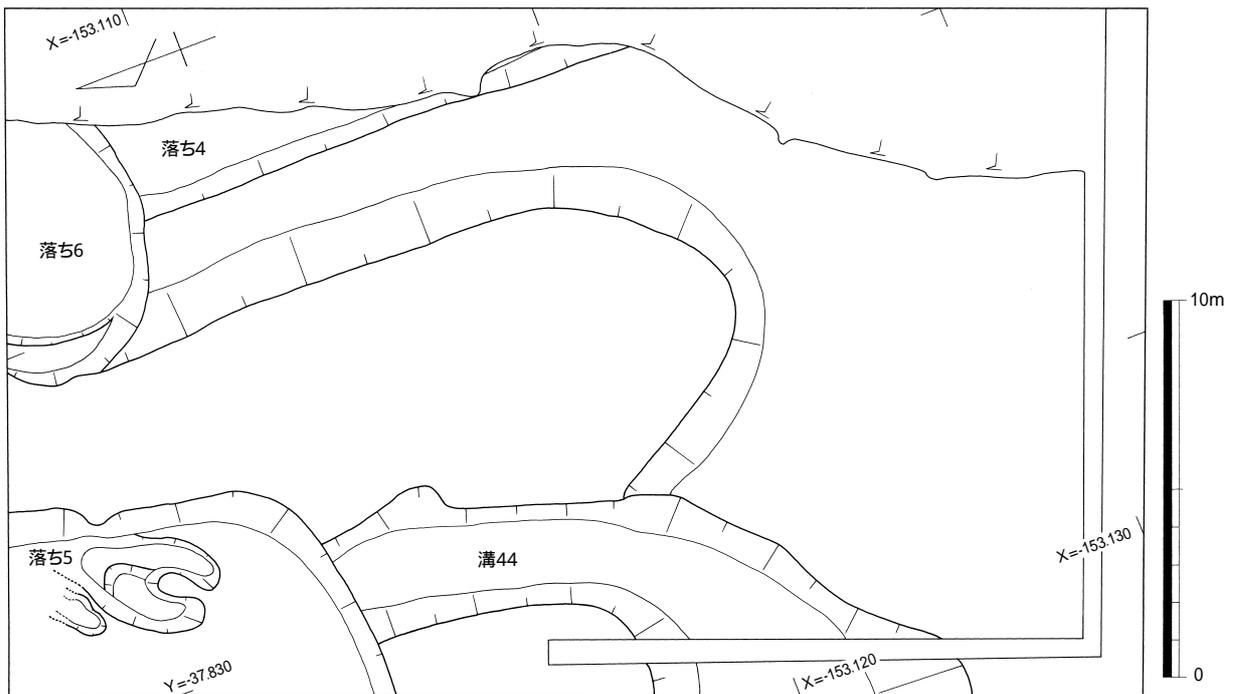


図18 96 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図



図19 96-1 トレンチ 堀1・2 平面図

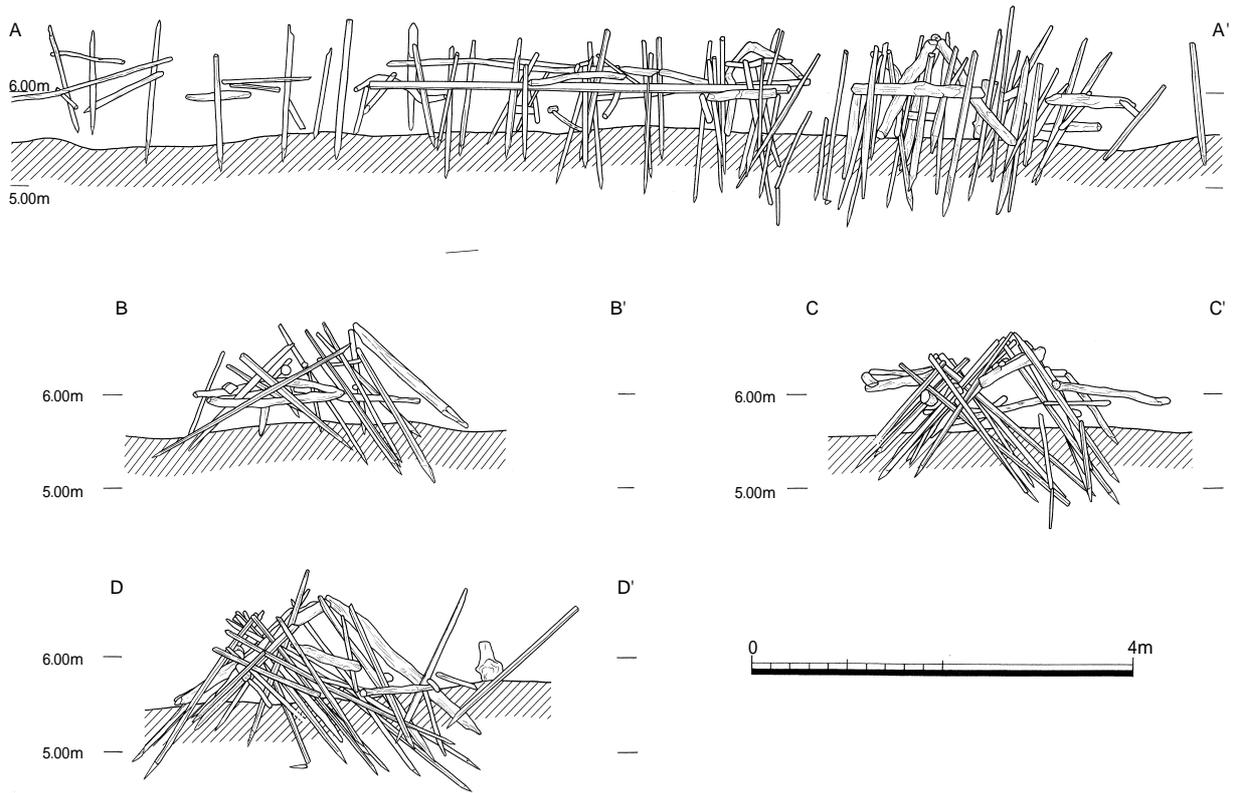


図20 96 - 1 トレンチ 堰 1 立面図

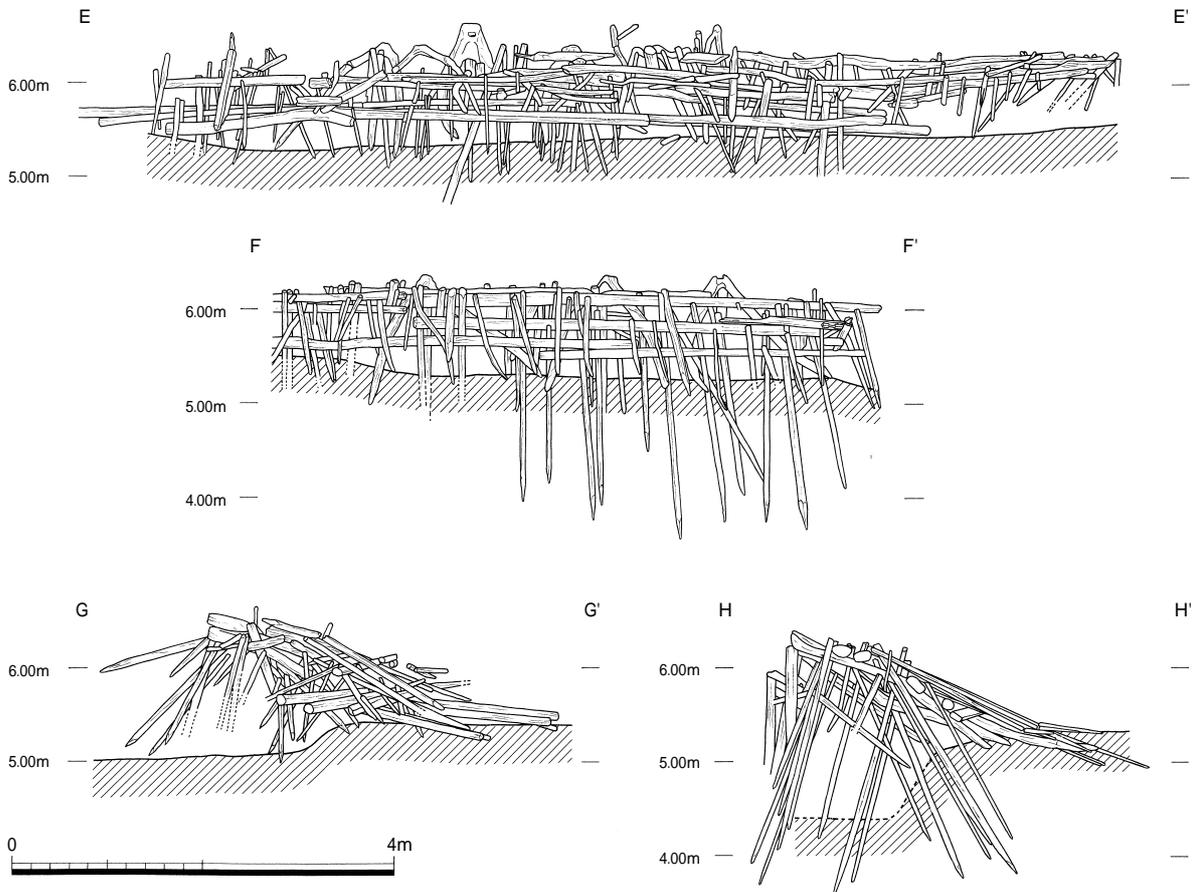


図21 96 - 1 トレンチ 堰 2 立面図

堰は2基検出し、堰1と堰2は平面「T」字状に交わる(図19~21)。堰2は、河床に堆積した砂洲状の粗砂の帯を利用して構築される。堰2は東西方向にのびるが、東部分は彎曲させながら北方向へのびる。その堰2の中ほどから南北方向に堰1が構築される。堰1は全長約12m、地上での幅と高さはそれぞれ約2.5m、約1.2mで、堰頭部の標高は6.7mである。堰2は両端とも調査区外へのびており、残存長は約25mを測る。地上での幅と高さはそれぞれ約3m、約0.8mを測り、標高は6.4mである。堰2はアーチ状に彎曲させており、その彎曲部の後ろ側には補強のための堰を構築する。従って、堰2は5つの単位に分けることができる(図22)。堰2は平成7年度に調査した95-8・95-9トレンチから検出された堰と連続するものと考えられ、その全長は40m以上を測る。さらに、堰1の西側には大量の流木が集積していた。この流木を運んできた洪水の際に堰1、堰2ともその機能を失ったと考えられる。また、今回の調査では岸といえるものがみつからなかった。従って、堰1・2の具体的な機能については不明である。

遺存状況の良好であった堰2の構造は、概ね以下のとおりである(図23)。

1. 河床に堆積した砂洲状の粗砂を利用して、頭部にほぞをつくりだし長さ約2~2.5mの縦杭(基礎杭)を、約1mの間隔に垂直もしくは頭部をやや上流側に傾けてシルト層に約60cmほど打ち込む。次にその杭に、根元にほぞ穴を穿った長さ2~3m前後の二股木を差し込んで、上流側に脚部を向ける。脚部の先端は尖らせてあり、流されないように軽く河床に突き刺して固定する。
2. 二股木の上に横木を3~4段並べる。横木は補助杭を合掌型に打ち込んで固定する。横木のほとんどは自然木であるが、なかには角材に加工したり、樹皮を剥いだものもみられた。横木は長さ6mを測るものもある。補助杭は先端を鋭く尖らせただけのもので、その他に加工のおよんでいるものはない。

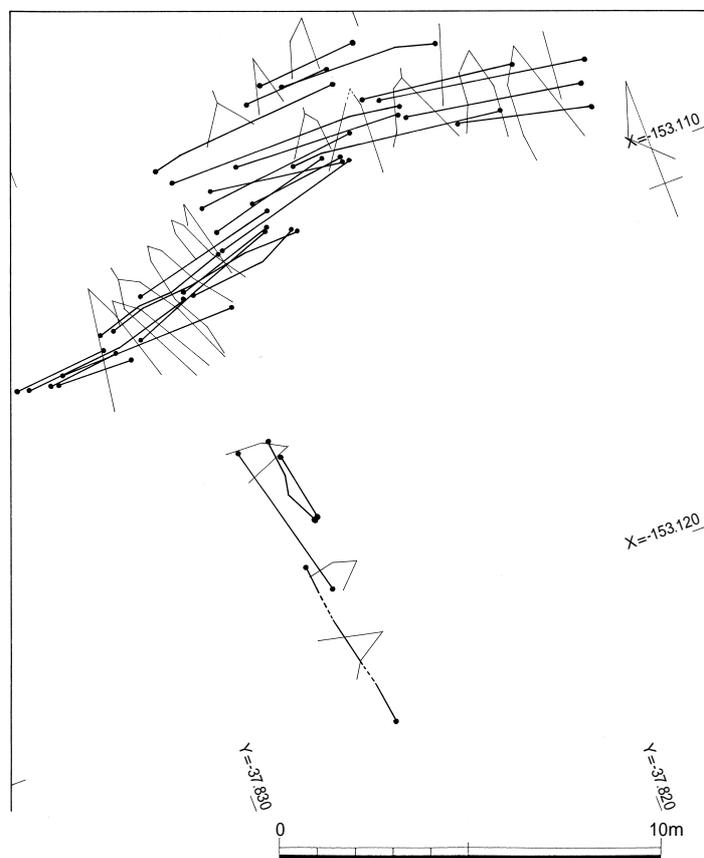


図22 96-1トレンチ 堰 平面模式図

補助杭は全体に細く、長さにもややばらつきがみられたがシルト層に深くまで打ち込まれていた。

3. 横木の上に0.3~0.5m間隔で縦木を並べる。縦木は細く短いもので、先端を尖らせており、軽くシルト層に突き刺す。

4. 下から約0.4mの高さまで草敷きを施す。草敷きは遺存する部分としない部分が見られたが、かなり保存状況のよい状態であった。植物を束にしたものを交差して重ねたものがある。草敷きは縦木の上に置かれるのみで、縛ったり、錘を置いたりした痕跡はみられなかった。草敷きはアシなどの水生植物であると思われるが、現在鑑定中である。

1~4の工程を横木の長さを1つの単位として、東から順番に重複させながら構築した後、彎曲部の後方に補強としてもう一列構築する。

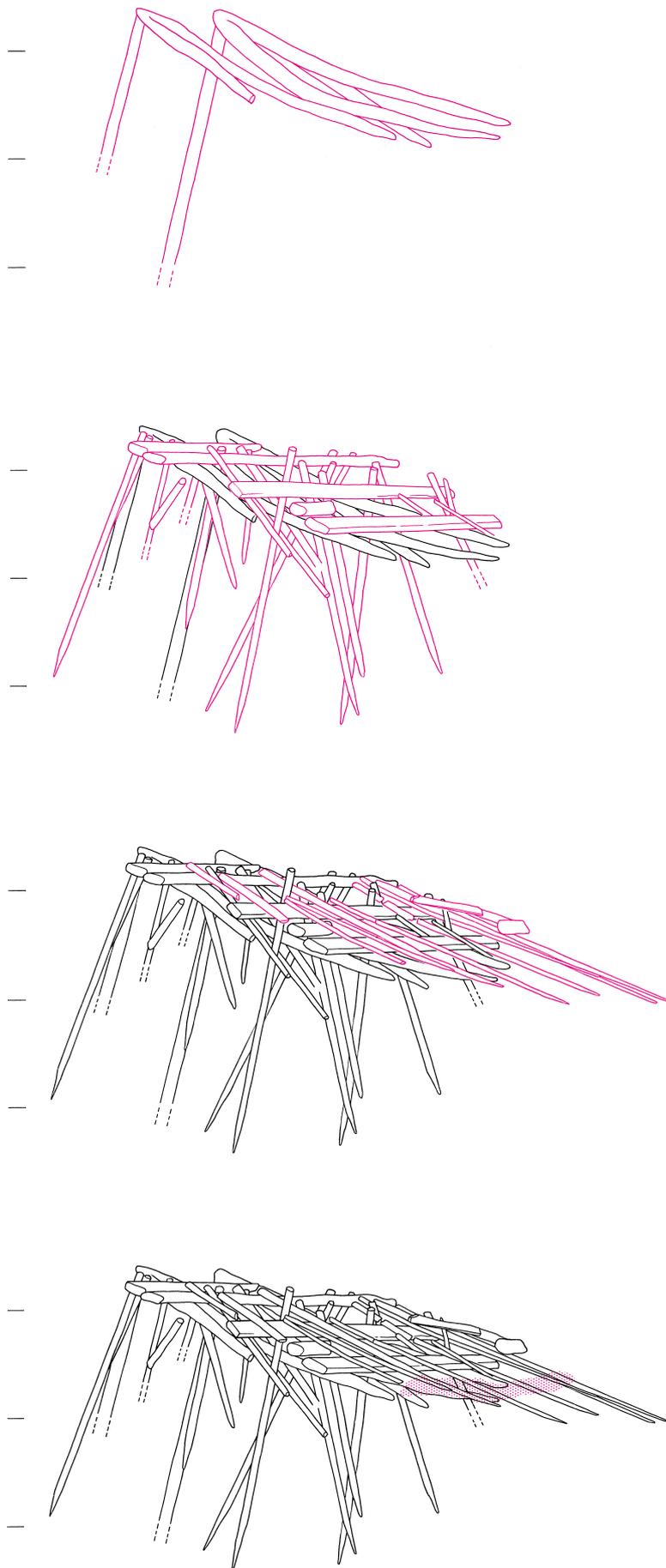


図23 96 - 1 トレンチ 堰2 構築模式図

堰1は堰2と比較して遺存状況が悪く、草敷の存在も確認できなかった。しかし、二股木と縦杭を使用して基礎を築く構造が3か所で認められたことから、堰1は構造的には堰2と同じものであると考えられるが、堰2との相違点は補助杭に建築部材を転用した角杭や丸杭の使用がみられることである。堰2の補助杭は先端を加工しただけの自然木を使用しており、堰1のような加工木はみられない。因みに、堰2の続きと考えられる95 - 9 トレンチで検出された堰には、加工材や建築部材などの転用材が多く使用されているが、このことは作業単位の違いを示すものと考えられる。

次に堰を構成していた材について述べる(図24~27)。1は二股木である。上流に構築されていたと思われる堰の構造物で、上流から流されて堰の手前に漂着したものである。樹木が二股に分かれた部分を利用する。頭の部分を北にして出土した。残存長372cm、脚部径16cmを測る。非常に丁寧な加工が施されており、明瞭に加工痕が残る。枝と樹皮を落とし、その後面取りを行う。二股になった先端を杭状に尖らせる。頭の部分には15×15cm以上のほぞ穴を穿つ。

2~11は堰1に使用された材である。2は横木で、一辺5×10cm、長さ456cmの角材である。材の一部に火を受けた痕跡を残す。さらに、材の先端に擦痕があることから、紐で縛って使用されていた建

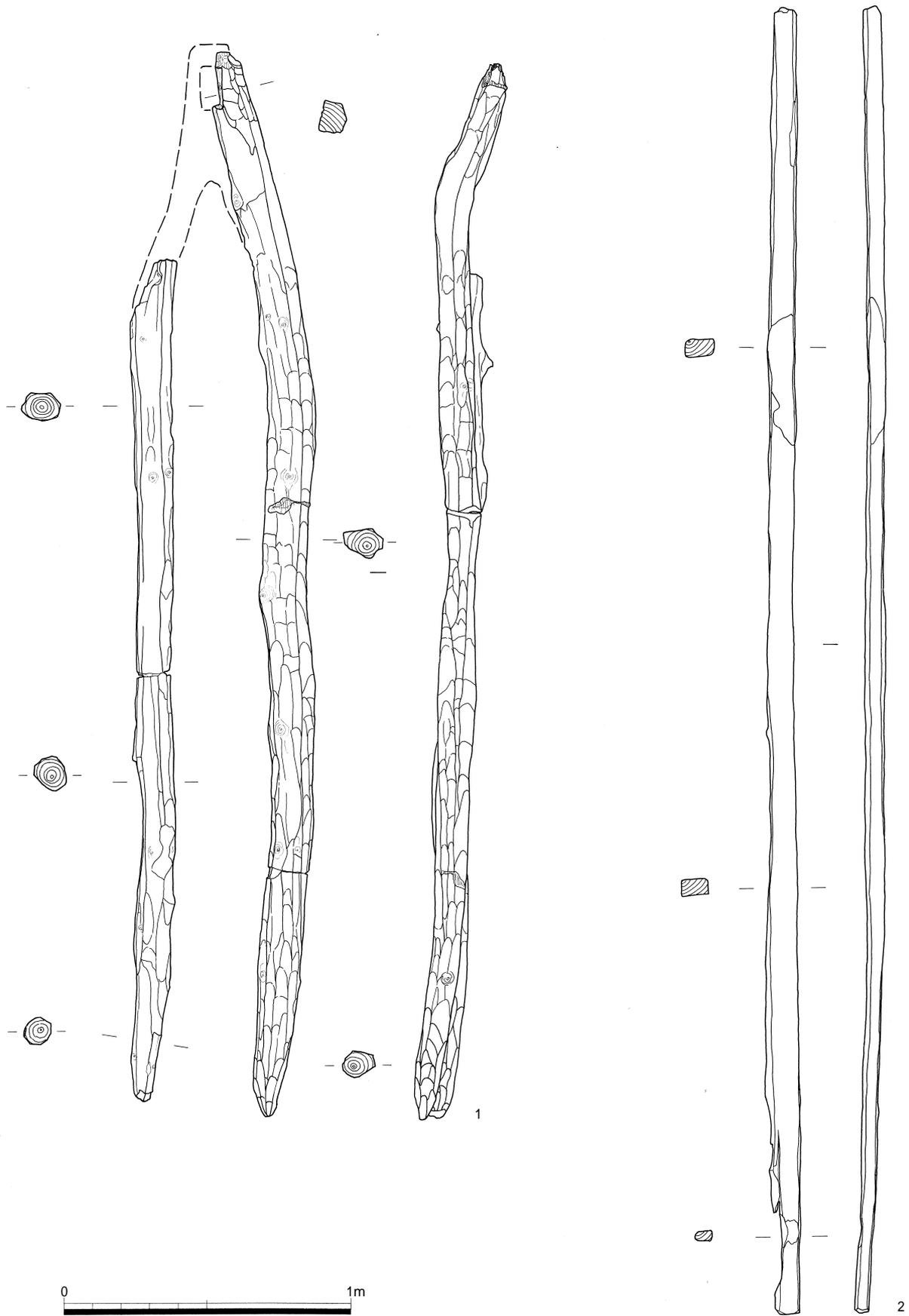


図24 96 - 1トレンチ 流木及び堰1 使用材

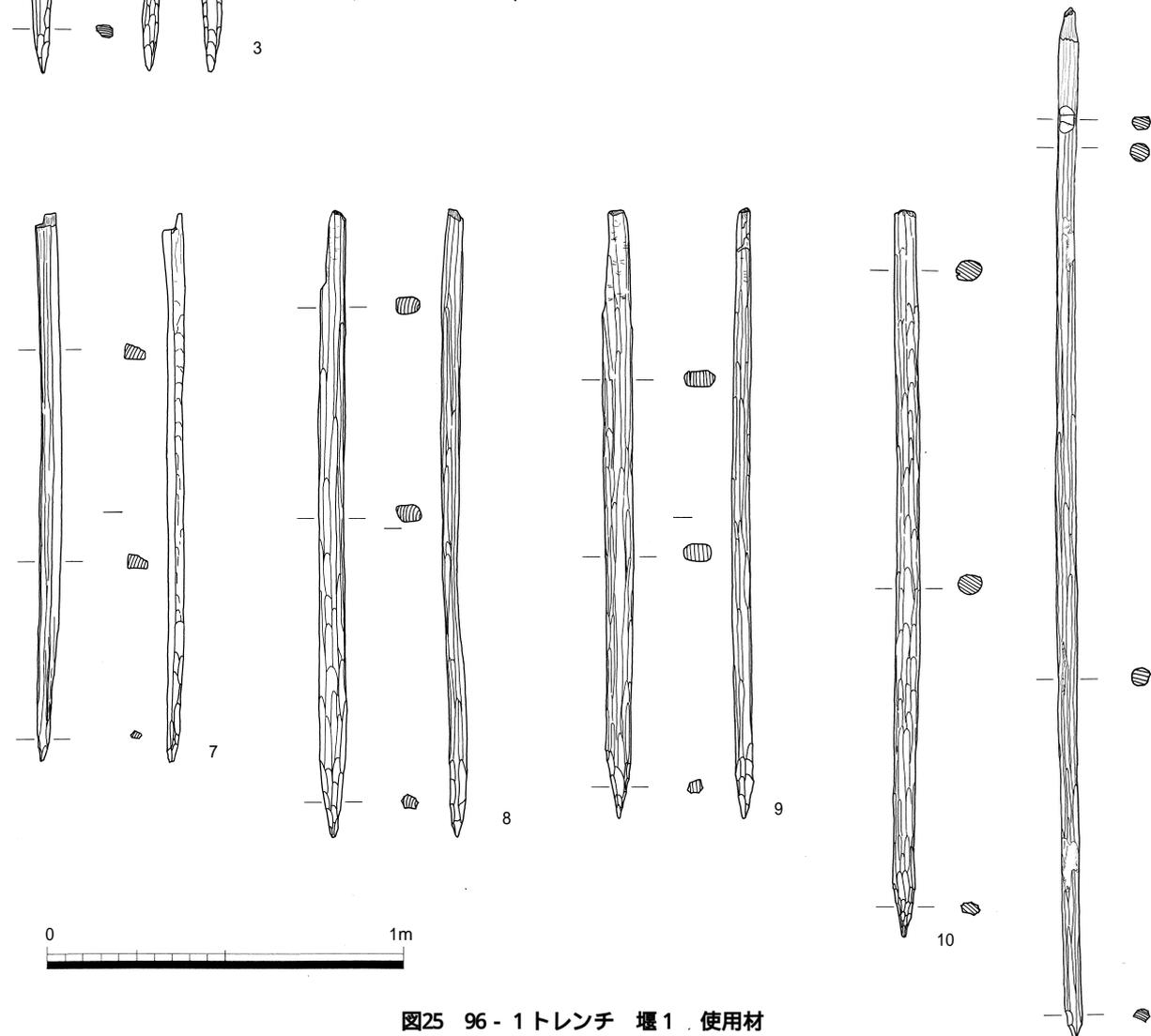
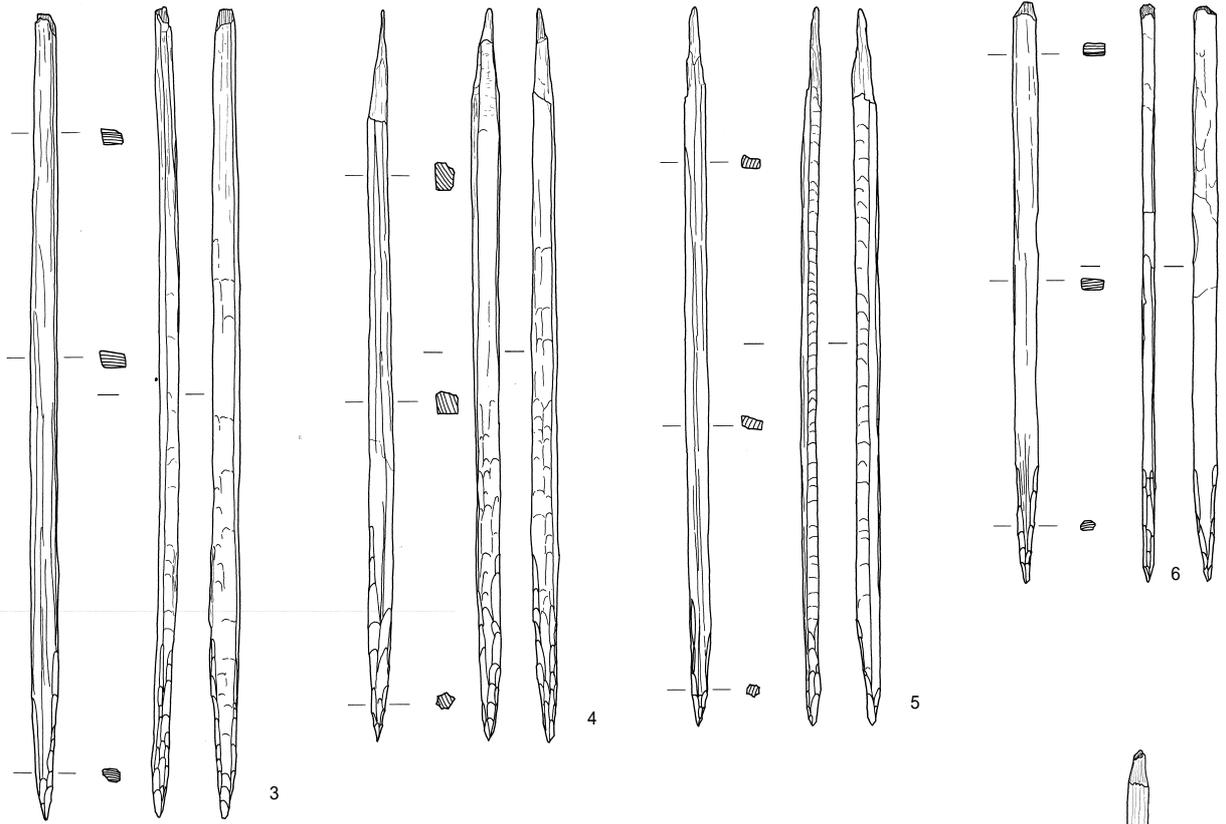
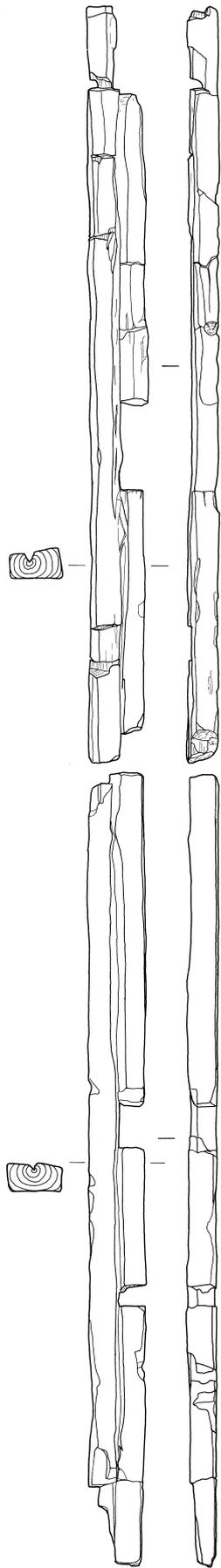
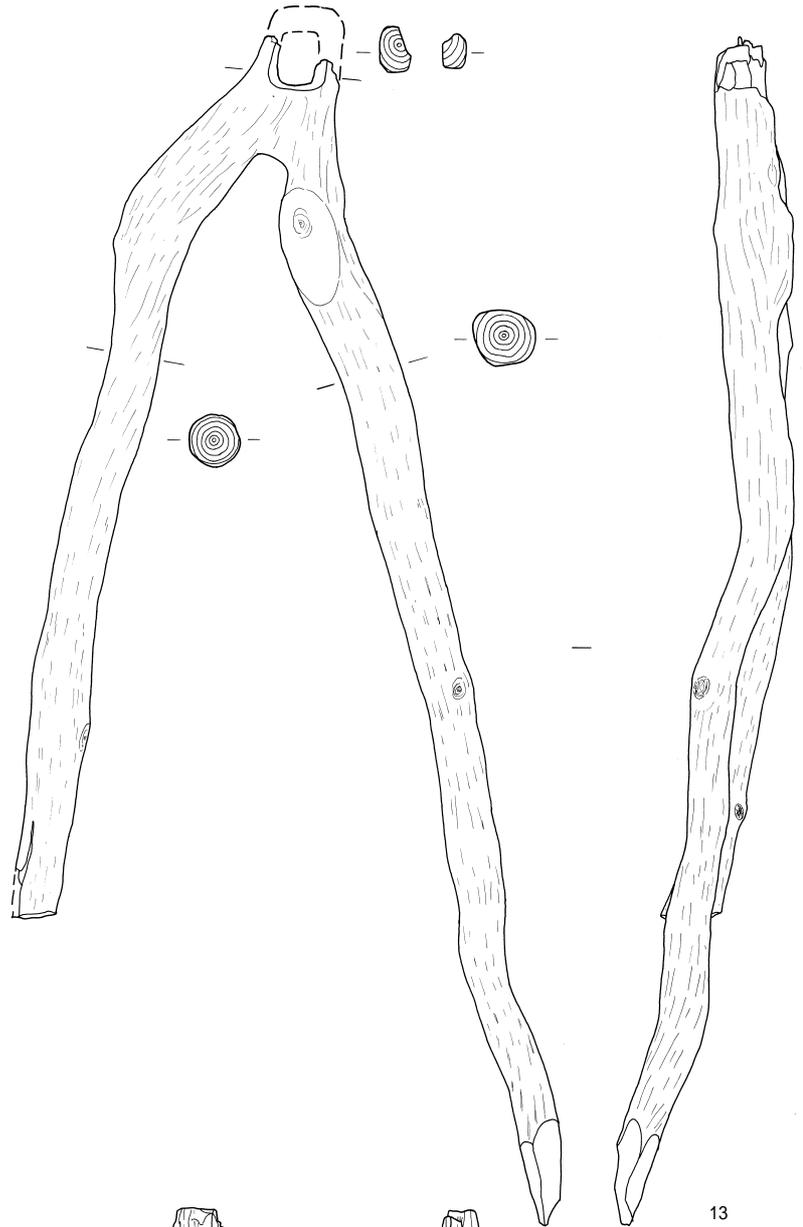


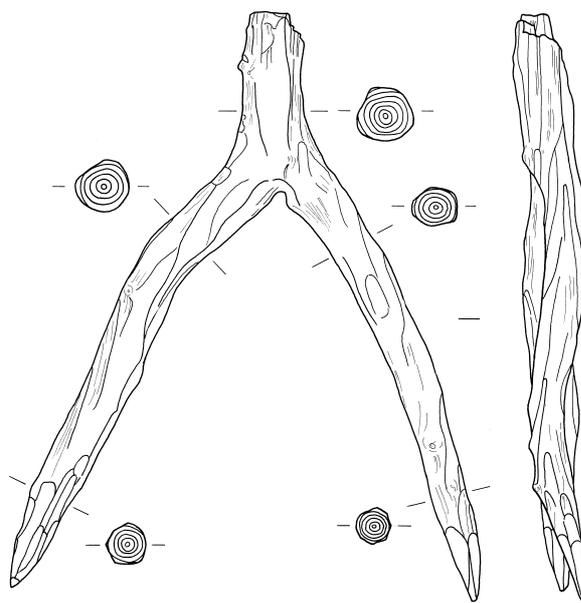
図25 96 - 1 トレンチ 堀 1 使用材



12



13



14

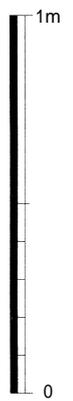


图26 96 - 1 トレンチ 堀 2 使用材

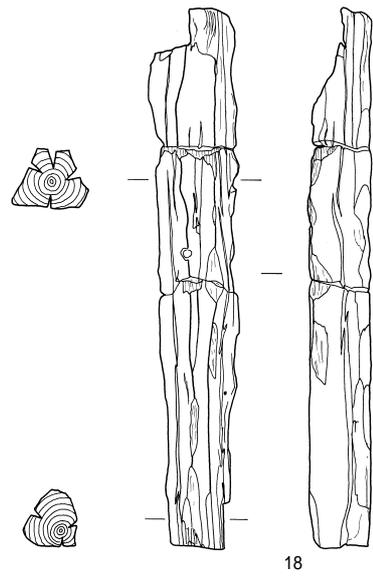
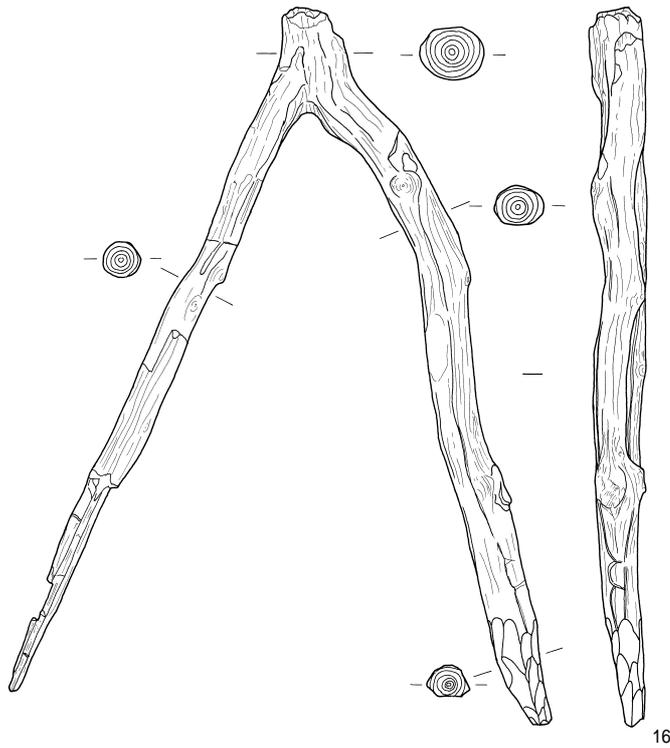
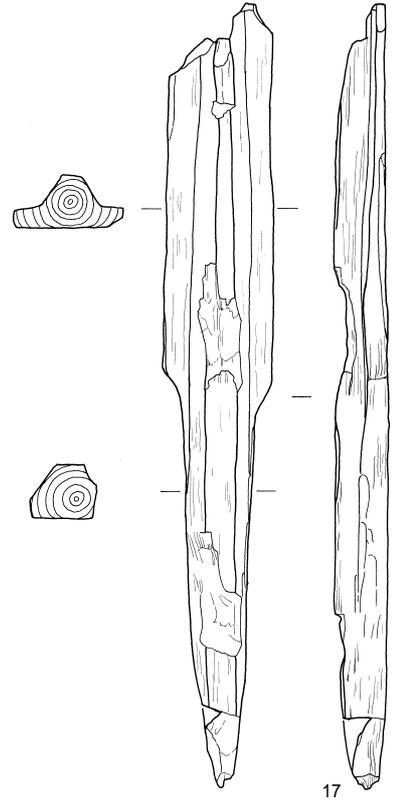
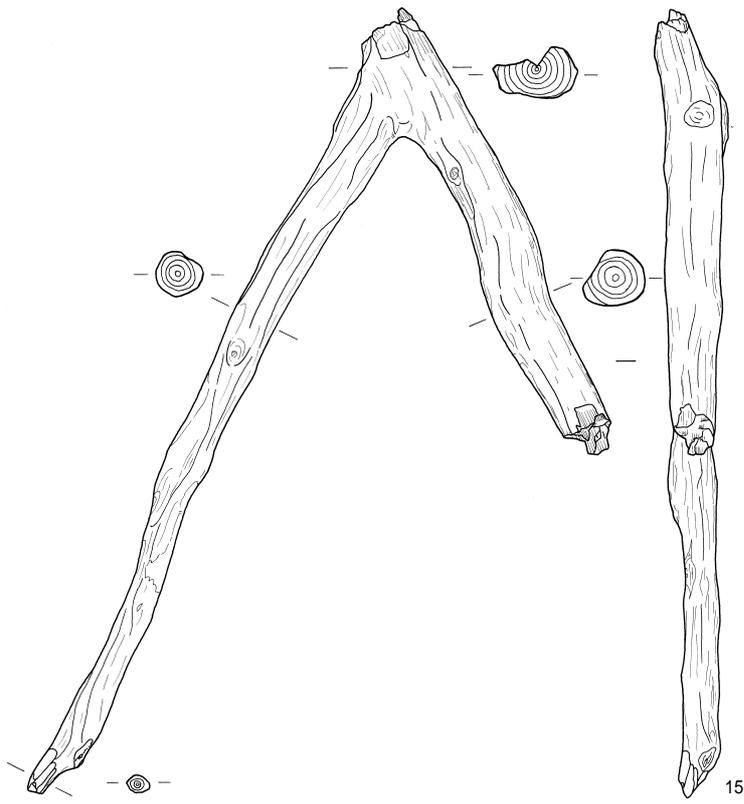


図27 96 - 1 トレンチ 塚2 使用材

築部材の転用と考えられる。3～11は補助杭である。柱材のような角材を縦割りにして、先端を尖らせて再利用している角杭型(3～7)、細い丸太材の先端を尖らせた丸杭型(8～11)の2種類に分けられる。角杭型は1方向だけ割ったままの状態でも未加工のもの、平行する2方向が未加工のものともみられる。このことから、建築部材として使用されていた角材を2分割、あるいはそれ以上に分割して杭に転用したことが分かる。一方、丸杭型のものには細く長いハツリ痕がみられることから鉋による加工が考えられる。

12～18は堰2で使用された材である。堰2には全体を加工した材は少なく、殆どのものが樹皮を残したまま使用されていたが、その中で全体を加工したもののみ記載した。12は横木に使用された材で、10×15cmの角材で、長さは約480cmを測る。残りが悪く調整は不明である。建築部材の転用であろう。13～16は基礎杭として使用された二股木である。二股木には大型と小型の2種類に分けられる。いずれも1と同じく樹木の二股に分かれた部分を利用しており、樹皮を取った後、頭部と先端に加工を施す。13は大型品で頭部にほぞ穴が開けられるが、小型品である14～16にはほぞ穴が穿たれていない。17と18は矢羽根のような形をした木製品で、二股木と同様の使われ方をしていた。この木製品は、板材に断面台形の突帯状の高まりをつくり出した建築部材の一部であったと思われる。非常に丁寧な加工を施す。この木製品を杭として転用する際に鱗状になった部分の下半部を削り落として先端を杭状に尖らせているが、この加工は粗い。これらの材の樹種については鑑定中であるが、コナラ、ヤブツバキが多くみられ一部、ケヤキ、サクラなどが混じる。

今回は調査区の全体が河川の河床部分にあたり、厚い洪水砂によって埋没していた。その中で堰2は北側に基礎杭を打設し、南に向けて二股木を設置し、その傾斜面に横木、縦木、草敷を配する。一方、堰1は傾斜面をより本流に近い西側に向けて構築されている。これらのことから2つの堰の作用は異なるものと考えられるが、河岸が未検出のため詳細は不明である。

第7面(図28) 黒色土壌化層上面である。畦畔など積極的に水田を肯定する資料は確認されなかったが、珪酸体分析によると多量にイネ科のプラントオパールが検出されたため、水田であった可能性が高い。堰2の下は堰2の影響を受けてやや窪む。遺物は検出されなかった。標高は4.8mを測る。

第8面(図29) 黒褐色土壌化層上面である。遺構・遺物は検出されなかった。標高は3.6mを測る。

第9面 黒褐色土壌化層上面である。遺構・遺物は検出されなかった。標高は3.4mを測る。

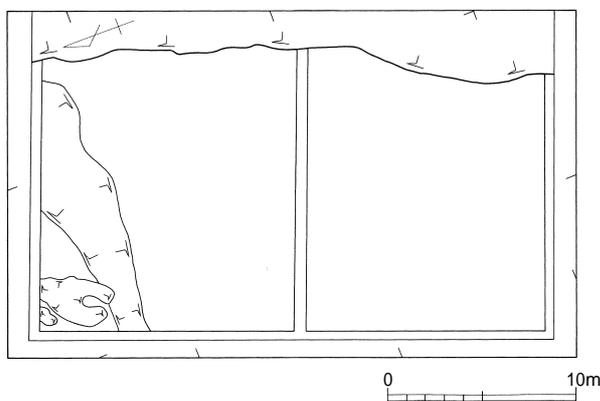


図28 96-1トレンチ第7面 遺構平面図

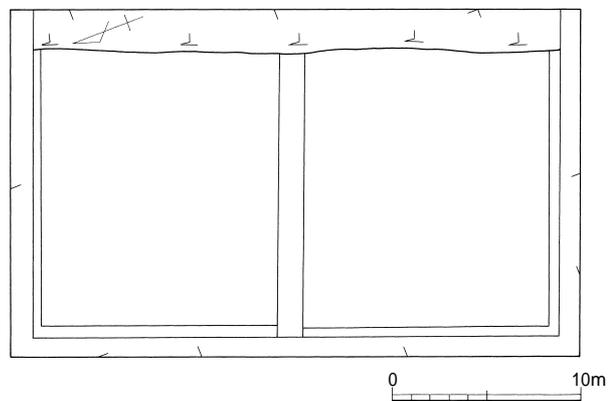
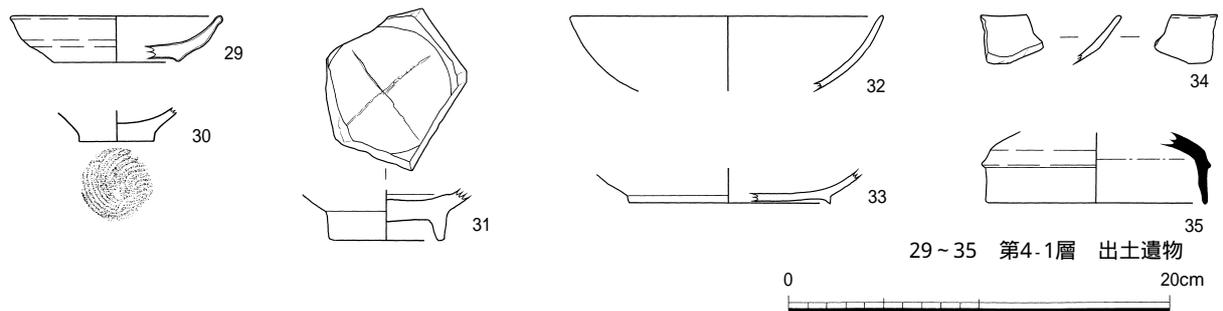
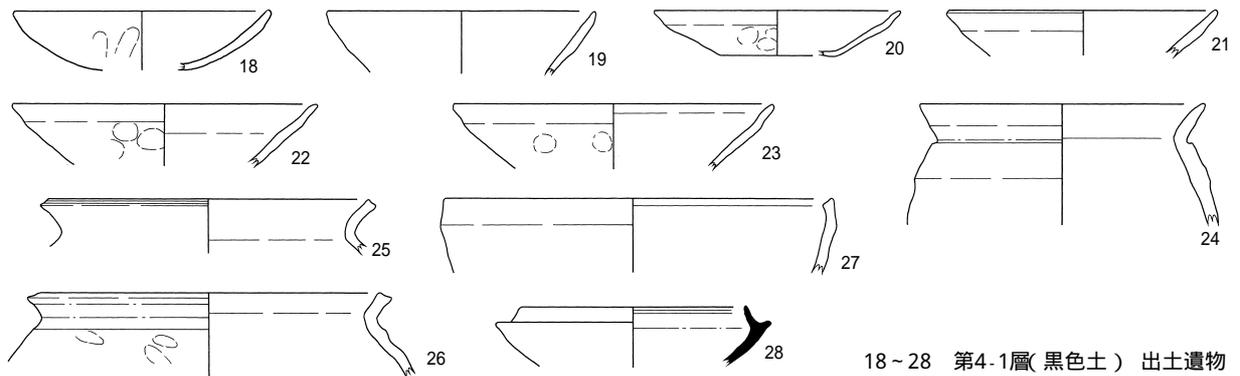
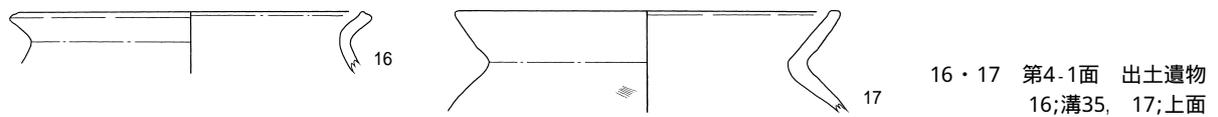
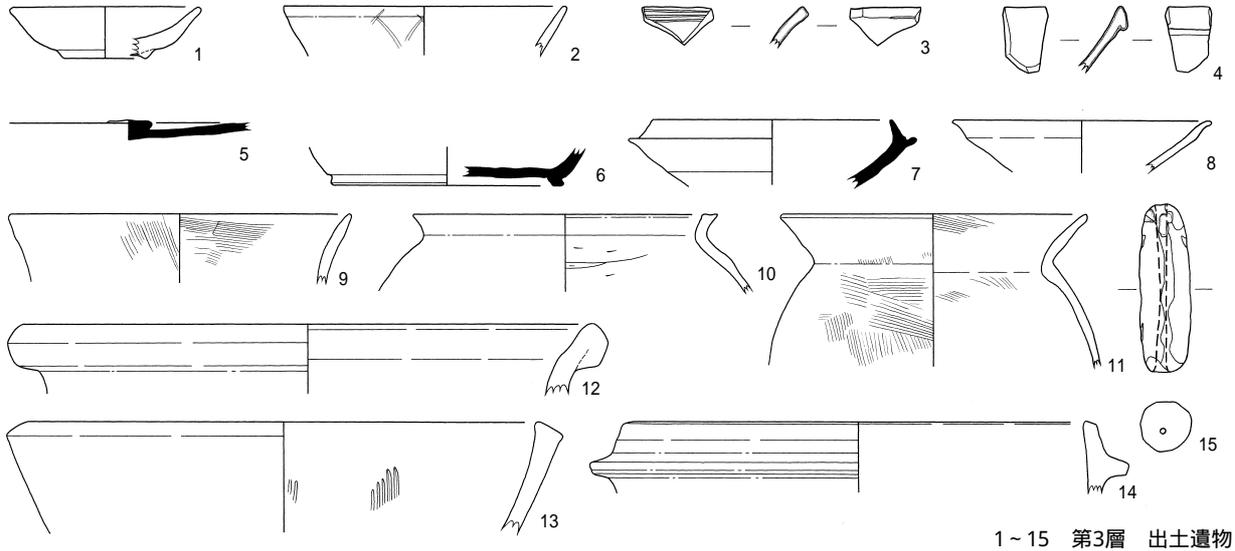


図29 96-1トレンチ第8面 遺構平面図

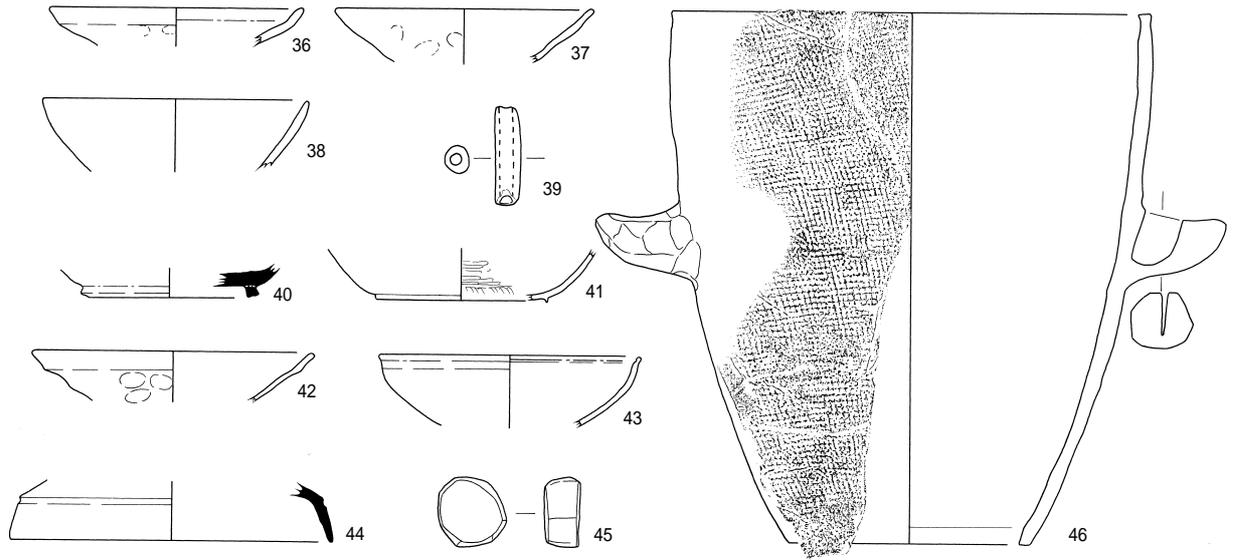
b. 遺物

第3層出土遺物(図30) 1~4は陶磁器である。1は施釉陶器小杯である。断面三角形の貼り付け高台をもつ。2は青磁椀である。口縁端部は丸く収め、外面には蓮華紋を施す。龍泉窯系である。3は青磁椀で、口縁端部は面取りを行って、輪花とする。4は白磁椀である。口縁端部は折り曲げて下方に肥厚させる。5~7は須恵器である。5は杯蓋で、偏平な宝珠形をつまみをもつ。天井部外面はヘラケズ

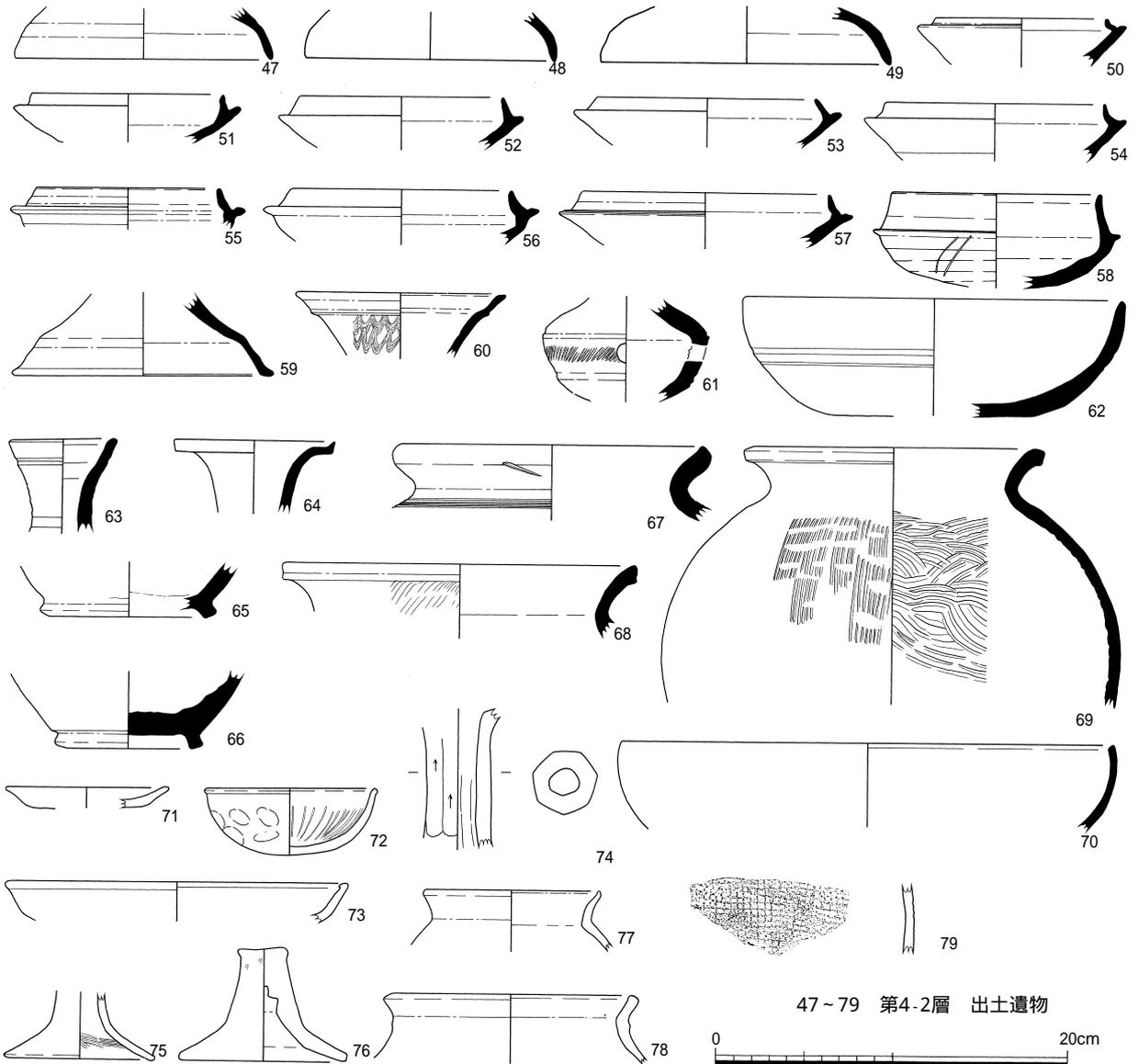


0 20cm

図30 96-1トレンチ第3層~第4-1層 出土遺物



36~46 第4-2面 出土遺物 36~39;溝2, 40;溝18, 41;ピット4, 42・43;ピット6 44~46;上面精査時



47~79 第4-2層 出土遺物

図31 96-1トレンチ第4-2面~第4-2層 出土遺物

り、内面は静止ナデを施す。6・7は杯身である。6は「八」字状に開いた高台が底部の端につく。7は口縁端部を丸く収める。8～11は土師器である。8は皿で、口縁部と内面はナデ、体部外面は指頭圧痕が残る。口縁部と体部の境に稜をもつ。9～11は甕である。9はやや外反しながら立ち上がる口縁をもつ。内面は横方向に、外面は縦方向にそれぞれ細かいハケメを施す。10は口縁部をつまみながらナデを行い、端部に面をつくる。体部内面はヘラケズリを施す。11は外反しながら立ち上がる口縁部をもち、内外面共にハケメが残る。12は備前窯甕である。口縁部は外側に折り曲げて肥厚させる。口縁内面は強いナデを施す。13は備前窯播鉢で、やや内彎しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚して面をもつ。卸し目の原体は5条を数える。14は瓦質土器の羽釜である。15は管状の土錘である。孔は両端から穿たれる。当該層の遺物は耕作により、下層から捲き上げられたものが多い。

第4 - 1面出土遺物 (図30) 16・17は土師器の甕である。16は口縁端部が僅かに肥厚させて面をつくる。内面はナデ、外面はハケメが施されるが、やや不明瞭である。17は口縁部は短く、端部は内側に僅かに肥厚させて水平に面を有する。

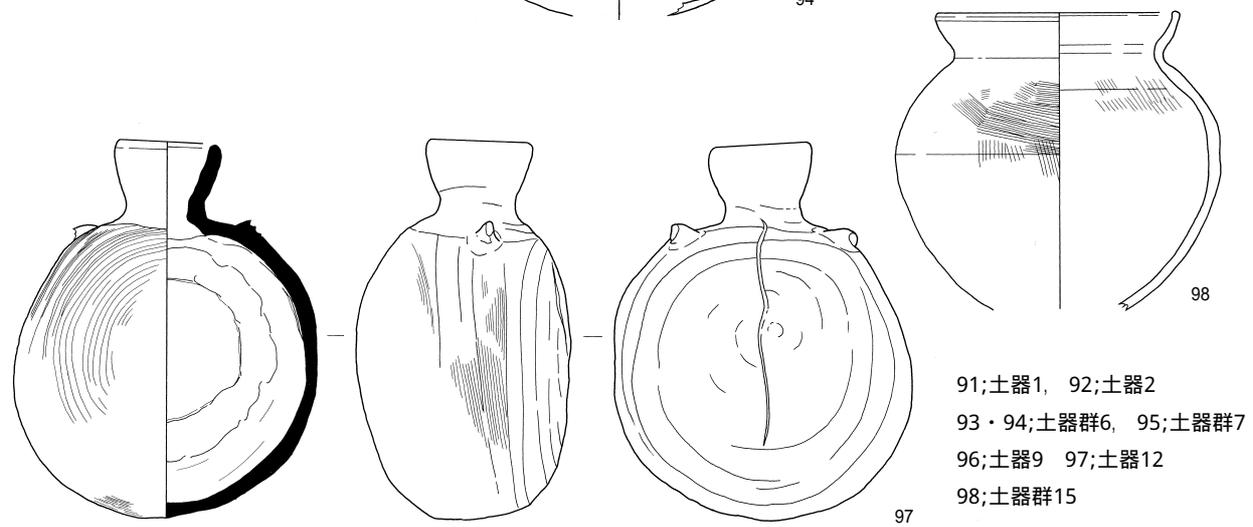
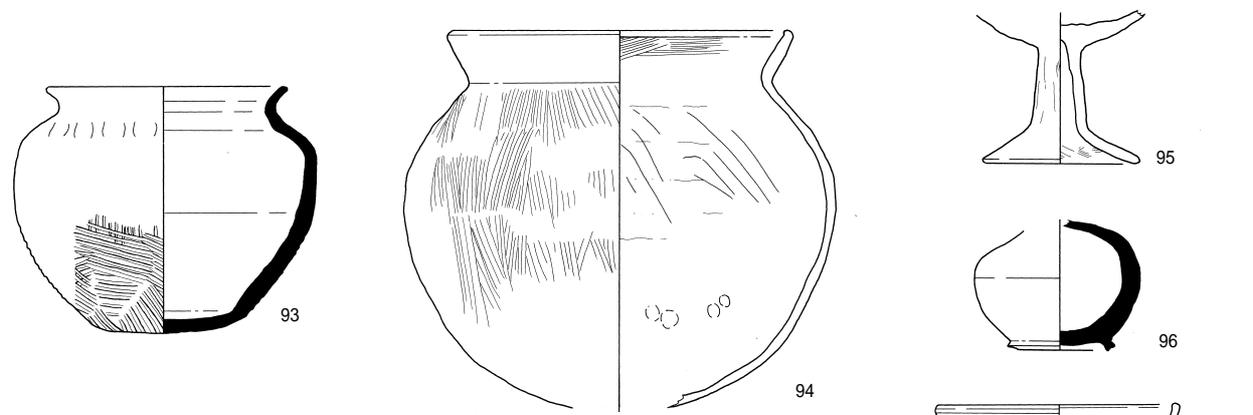
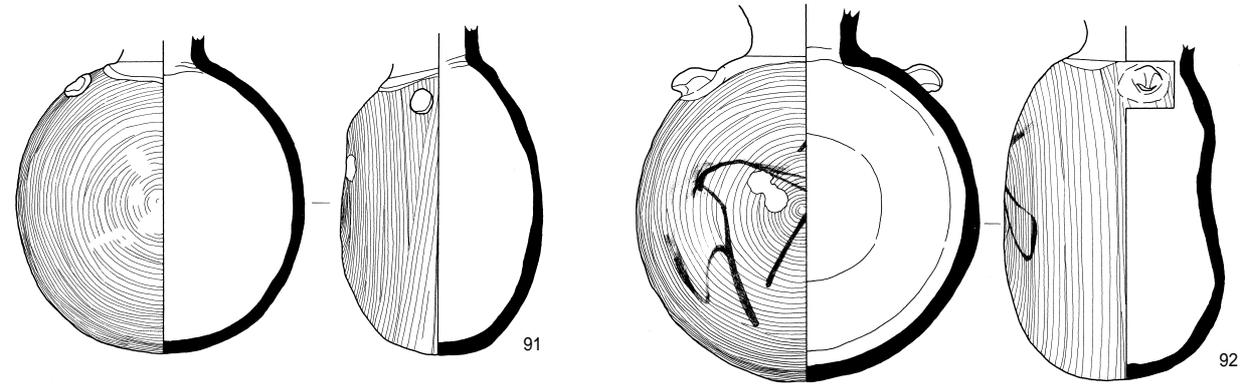
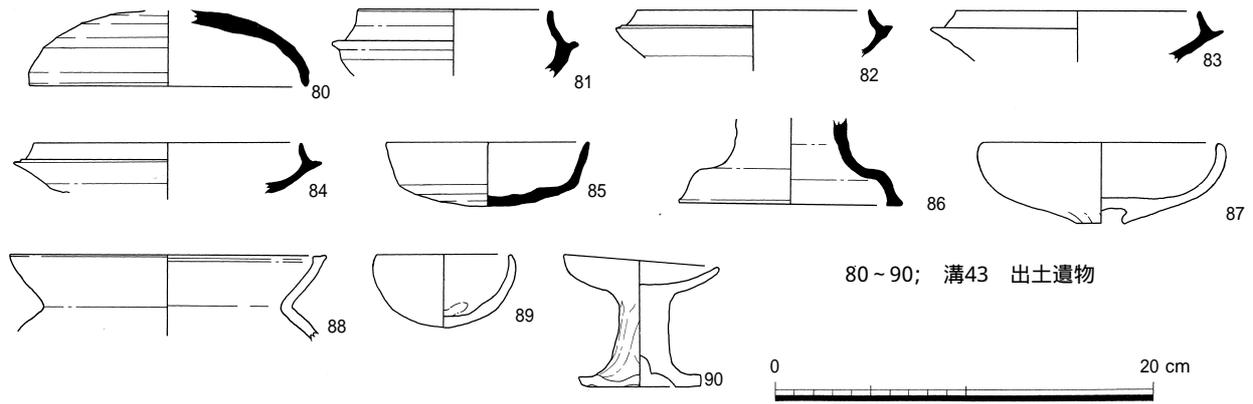
第4 - 1層出土遺物 (図30) 当該層は部分的に存在する黒色整地層と、全体に広がる鈍い黄褐色シルト層に分けて取り上げた。18～28は黒色整地層出土の遺物である。18～23は土師器皿である。口縁部と体部の境に稜をもつ。口縁部はナデ、体部外面には指頭圧痕が残る。21～23は胎土が細かく、赤褐色を呈す。24～26は土師器甕。24の口縁部は短く外反し、頸部が大きく屈曲する。体部外面には煤が付着する。25は口縁部を短く立ち上げて肥厚させ、端部に面をもつ。26は口縁部は短く、端部は外側につまみ出す。体部外面は指頭圧痕が残る。27は土師器鉢。口縁端面は内傾する面をもつ。口縁部に強いナデを施すため、体部との境は段をもつ。28は須恵器の杯身である。

29～34は鈍い黄褐色シルト層出土遺物である。29は瀬戸窯皿。30は緑釉陶器椀である。底部に回転系切り痕が残る。31は白磁椀である。底部内面に印刻をもつ。32・33は黒色土器A類の椀である。33は断面三角形の高台が残る。34は瓦器椀である。35は須恵器杯蓋である。

第4 - 2面出土遺物 (図31) 36・37は土師器皿である。36は口縁端部を丸く収める。37は体部外面に指頭圧痕を残す。38は黒色土器A類の椀である。39は管状土錘である。40は須恵器杯身で、高台が底部端に取りつく。41は黒色土器A類の椀である。42は土師器皿。口縁部外面および内面はナデ、体部外面は指頭圧痕が残る。43は土師器椀。44は須恵器杯蓋。45は瓦を転用した土製円板である。46は韓式系軟質土器の甗である。外面には格子タタキメを施し、把手には刻み目を入れる。

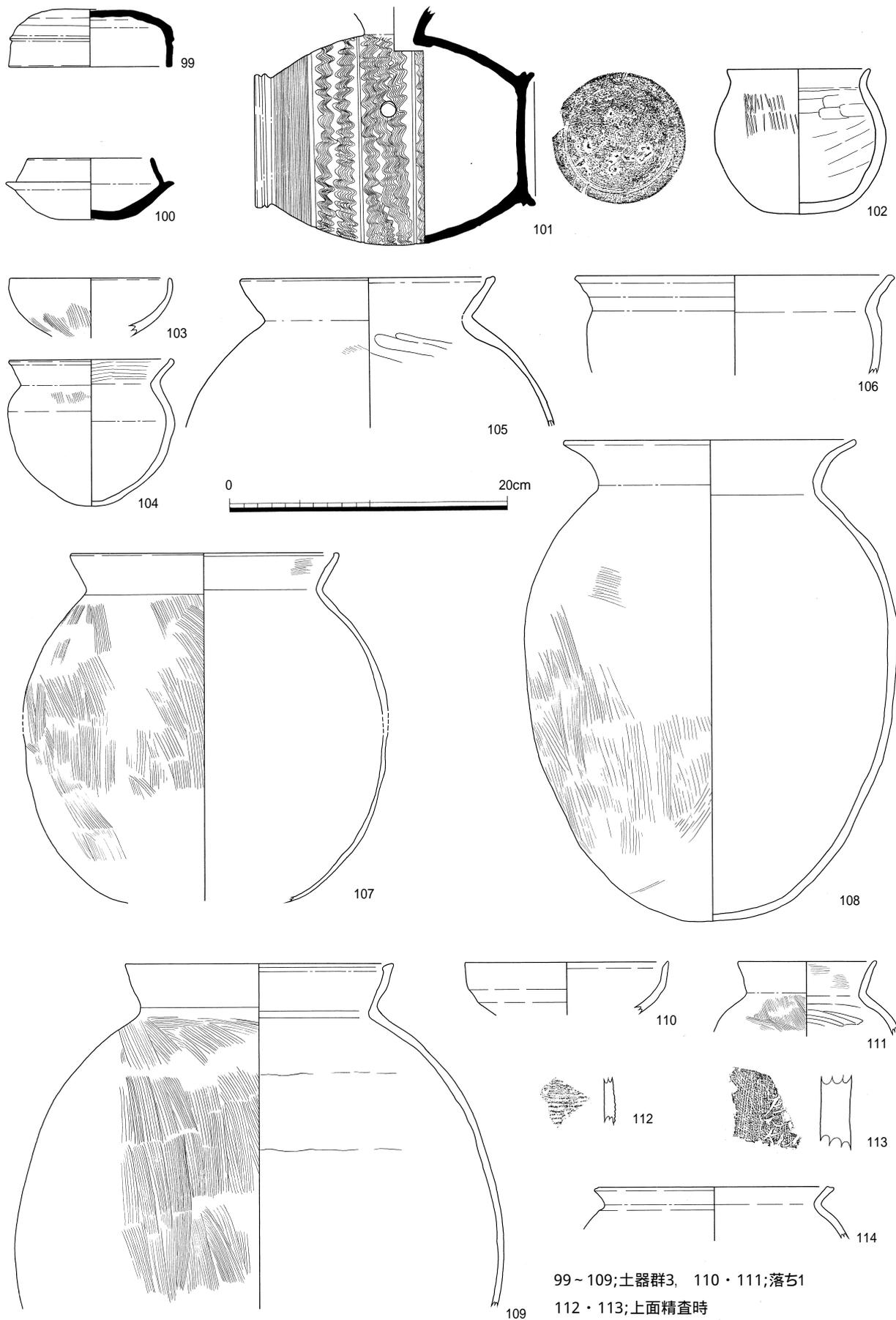
第4 - 2層出土遺物 (図31) 47～70は須恵器である。47～49は杯蓋、50～58は杯身である。58は底部外面の回転ヘラケズリをほぼ全体に施す。底部外面に篋記号をもつ。胎土は非常に精緻である。59は脚部である。60・61は甗である。60は口頸部で、口縁部と頸部の間に鈍い段をもち、頸部には波状紋を施す。61は体部で2条の沈線をもち、その間に列点紋を施す。62は鉢である。体部に沈線が2条巡る。底部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。63は瓶の口頸部で沈線を1条巡らす。64は壺の口縁部で、端部は受け口状を呈す。65・66は壺の底部。67～69は甕である。67は頸部外面に篋記号をもつ。68は頸部外面に平行タタキメが残る。69は口縁端部を肥厚させ面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、体部外面は平行タタキメの後ナデ消す。70は鉢で、口縁部は内彎して立ち上がり、端部は面をもつ。

71～78は土師器である。71は皿である。72は杯である。口縁端部を丸く収める。外面には指頭圧痕が残り、内面は非常に密な正放射状1段暗紋を施す。73は皿である。口縁端部は丸く収め、内側に沈線が巡る。74は高杯の筒部である。篋状工具で下から上へと面取りを行い、断面7角形に成形する。75・76



91; 土器1, 92; 土器2
93・94; 土器群6, 95; 土器群7
96; 土器9 97; 土器12
98; 土器群15

図32 96 - 1 トレンチ第5 - 1面 出土遺物



99~109;土器群3, 110・111;落ち1
 112・113;上面精査時

図33 96 - 1 トレンチ第5 - 1面 出土遺物

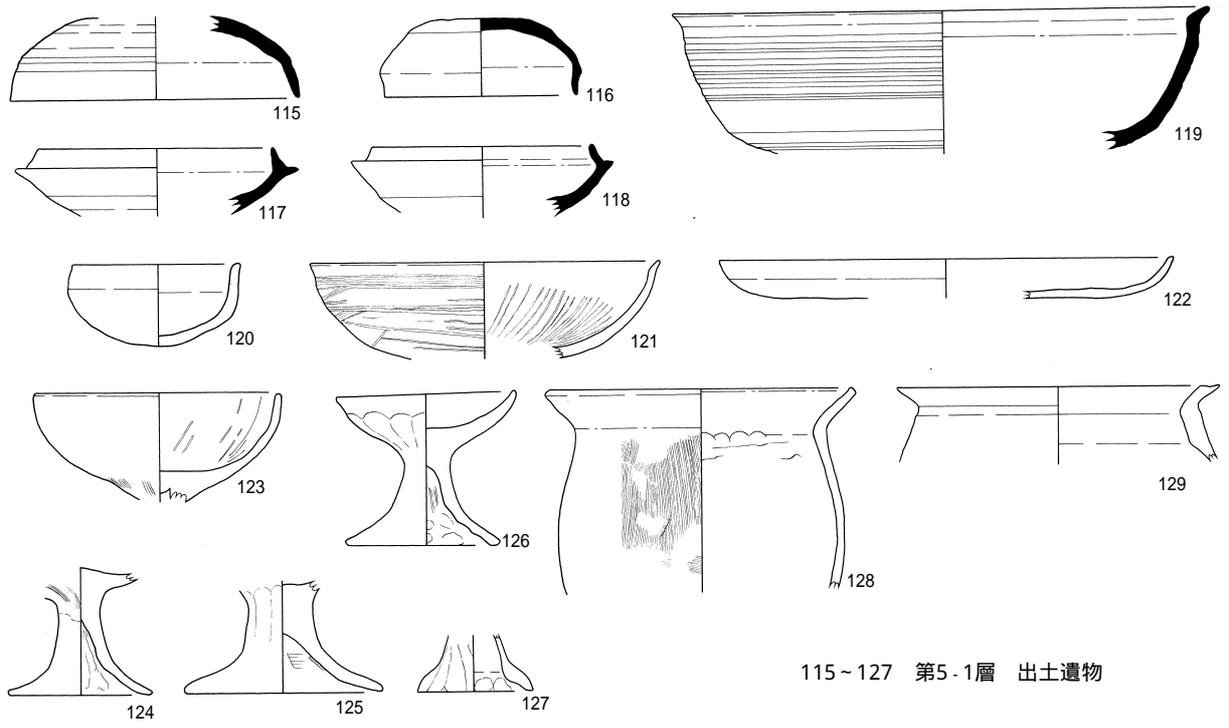
は高杯脚部である。75は裾部内面にハケメを施す。76は筒部内面にヘラケズリを行う。77・78は甕である。77は口縁部が短く外反し、端部をつまみ上げる。78は口縁部を短く立ち上げ、端部をやや肥厚させる。79は韓式系軟質土器の体部である。外面に格子タタキメを施す。

第5 - 1面出土遺物 (図32・33) 80~90は溝43出土遺物である。80~86は須恵器である。80は杯蓋で、天井部は幅の広い単位で回転ヘラケズリを施す。81~85は杯身である。81の口縁端部は面をもつ。体部のほぼ全体に回転ヘラケズリを施す。82~84は口縁部が短く、内傾しながら上方にのびる。85は底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデを施す。底部内面中央に仕上げナデが残る。胎土は緻密。86は高杯の脚部で、透かし孔を有する。87~90は土師器である。87は高杯杯部で、脚部の差し込み部が残る。88は甕の口頸部で口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部はつまみ出して僅かに内傾する面をもつ。89・90は手握土器である。89は杯で内面に指頭圧痕が残る。90は高杯で、筒部は粘土柱ナデによる成形・調整を行うのみで、底部には指による凹みが残る。以上の遺物から溝43は7世紀前半の遺構と考えられる。

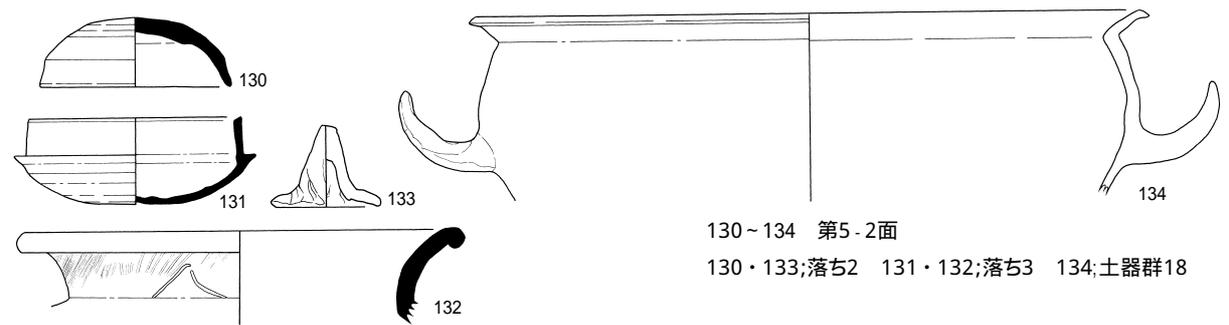
91~109は土器群を構成する遺物で、91・92・97は提瓶である。91・92は口縁部を欠損する。91は腹面・背面共にカキメを施す。耳は円形浮紋状の粘土板を貼り付ける。92は腹面・背面共にカキメを施す。背面は中凹みになる。耳は鉤状を呈する。腹面には火襷状の線条がみられる。97は腹面にはカキメ、背面は回転ヘラケズリを施す。背面中央に篋記号がみられる。耳は小さい鉤状を呈する。93は須恵器の壺で、平底で外面下半部から底部にかけて平行タタキメを施す。内面下半部は不定方向のナデを施す。94は土師器甕である。外面にハケメ、内面はナデを施す。95は土師器高杯で、裾部内面にハケメを施す。96は須恵器小型壺で、口頸部を欠く。調整はヨコナデを行うが、底部内面には棒状の圧痕がみられる。体部上面には自然釉が残る。98は土師器甕で、口縁部は内彎しながら上外方にのびる。内外面共にハケメを施すが、外面のそれは細かい。99は杯蓋で、口縁端部はほぼ水平な面を有する。天井部と体部の境に段をもつ。天井部は全面に回転ヘラケズリを行う。また、外面には自然釉が付着する。100は杯身で、底部外面は仕上げナデ、他はヨコナデを施す。101は樽型甕で口縁部を欠く。口頸部の接合は体部調整後に行う。界線は4条の沈線を巡らせ5つの紋様帯をつくる。両端の紋様帯にはカキメを、その他の紋様帯には波状紋をそれぞれ施す。また、両側面にもカキメを施す。体部中央やや上方に径1.3cmの円孔を穿つ。102は韓式系軟質土器の平底鉢である。底部はやや不明瞭である。調整は外面には粗い縦ハケ、内面はヘラケズリを施す。103は高杯の杯部である。口縁部は内彎しながら立ち上がる。104・105・107~109は甕である。108は長胴甕である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。外面は粗いハケメを施す。106は鉢である。土器群を構成する遺物の年代は5世紀後半が与えられる。

110・111は土師器である。110は椀である。体部下半にはヘラケズリを施す。111は甕である。口縁部は外反する。体部は丸く、外面には非常に細かいハケメを施す。112は韓式系土器である。格子タタキメを施す。113は平瓦である。厚さ約2.1cmを測る。凹面には布目と篋状工具で陰刻された文字が書かれる。文字は二字確認できるが、欠損部分が多いため上の一文字は不明である。下の一文字は「四」と確認できる。なお、凸面の下1/3には縄目タタキの痕跡が残る。114は土師器甕である。口縁部は短く外反し、端部は外側に肥厚させ外傾する面をもつ。内面は丁寧なナデを施す。

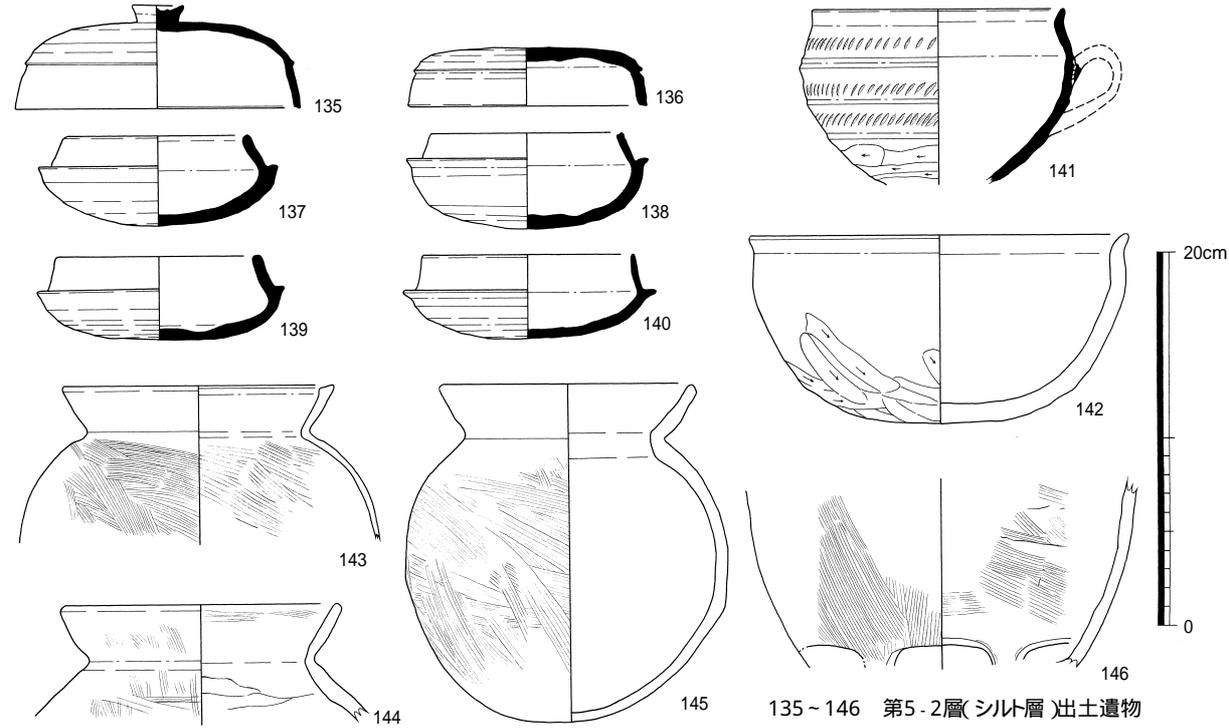
第5 - 1層出土遺物 (図34) 115~119は須恵器である。115・116は杯蓋である。115は天井部と口縁部の境に凹線をもつ。116は天井部は粗い回転ヘラケズリを施す。胎土は精緻である。117・118は杯身である。体部外面約1/3に回転ヘラケズリを施す。119は鉢である。口縁端部は外反させながらつまみ上げて面を有する。体部外面はカキメ、内面にはヨコナデを施す。120~129は土師器である。120・



115~127 第5-1層 出土遺物



130~134 第5-2面
130・133;落ち2 131・132;落ち3 134;土器群18



135~146 第5-2層(シルト層)出土遺物

図34 96-1トレンチ第5-1層~第5-2層 出土遺物

121は杯である。120の口縁部は内彎しながら立ち上がり、端部をやや外反させて丸く収める。底部はやや平底ぎみに仕上げる。体部内外面はナデ、底部外面は不調整である。121は内面は斜放射状1段暗紋、外面は横方向のヘラミガキ、底部付近はヘラケズリを施す。口縁部はやや外反する。122は皿で、底部外面には指頭圧痕が残る。123～126は高杯である。123は体部内面に暗紋状のヘラミガキ、外面にナデ調整を行うが、脚部との接続部はハケメがみられる。124は裾部はあまり開かず、内面にはしぼり痕が残る。125は太くて短い脚部に大きく広がる裾部をもつ。脚部内面は横方向にハケメを施す。脚部外面は篋状工具で断面8角形に面取りを行う。126は口縁部を横方向のナデの後、脚部との接合に下から上へナデを施す。脚部の裾部内面には指頭圧痕が残り、裾部端部の調整も粗い。127は手捏土器の高杯の脚部である。外面には強いナデが、内面には指頭圧痕が残る。128・129は甕である。128は口縁部はやや内彎してのび、端部は面をもつ。体部外面には非常に細かいハケメを施す。また、外面には煤の付着がみられる。129は口縁部を肥厚させて外側に出し、端部を僅かに凹ませ面をつくる。体部内面にヘラケズリを施す。

第5 - 2面出土遺物 (図34) 130～132は須恵器である。130は杯蓋である。天井部約1/3に回転ヘラケズリを施す。内面は仕上げナデを施す。131は杯身で、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、端部に面をもつ。受け部はまっすぐ外側につまみ出す。132は甕である。頸部は外反しながらのび、口縁端部を丸く肥厚させる。外面に縦方向の平行タタキメを施す。頸部には篋記号がみられる。また、口縁部内側には自然釉が付着する。133は手捏土器の高杯脚部で、内外面共に絞った痕跡が明瞭に残る。134は土師器の鍋である。口縁部はまっすぐ外方にのび、端部を下方に折り曲げるようにしてつまみ出す。

第5 - 2層出土遺物 (図34・35) 第5 - 2層は、洪水砂層と洪水の最終堆積によるシルト層に分けることができる。135～146はシルト層からの出土遺物である。135～141は須恵器である。135・136は杯蓋である。135は天井部中央に中凹みのつまみがつく。口縁部は外方にのびるものの、端部はやや内傾する。天井部外面に自然釉が付着しているため調整の痕跡は明瞭ではないが、天井部全面に回転ヘラケズリがみられる。136は天井部が平たく器高が低い。回転ヘラケズリは天井部全体におよぶ。口縁端部は僅かに凹面をなし内傾する。天井部には自然釉が付着する。137～140は杯身である。138以外の底部外面の広い範囲に回転ヘラケズリがみられる。137～139は受け部は水平にのび、口縁部は内傾して立ち上がる。器壁は厚い。141は把手付椀であるが、把手は欠損する。外面は3段にわたって列点紋と沈線を施す。口縁部は上外方につまみ上げる。体部外面下半部は静止ヘラケズリを施す。142～146は土師器である。142は鉢で口縁部は短く外へ屈曲し、体部はやや丸みを帯びる。また、底部は平底を呈する。体部外面下半はヘラケズリを施す。内面および体部外面上半はナデを施す。143～145は甕である。143は口縁端部は内側に肥厚し、内傾する面をもつ。口縁部は内外面とも横方向のナデを施す。体部内外面はハケメを施す。内面のハケメは外面のそれより粗い。144は口縁端部は丸く収める。外面はハケメ、体部内面はヘラケズリを施す。外面は煤が付着する。145は球形の体部にやや内彎した口縁がのび、端部は丸く仕上げる。体部外面はハケメを施す。内面はハケメの後ナデを施す。体部上半および口縁外面には煤が付着する。146は甗の体部である。内外面に丁寧なハケメを施す。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。底部の孔は楕円形である。

147～177は砂層中からの出土遺物である。147～149は須恵器である。147・148は杯蓋である。147の口縁端部は面をもつ。天井部は丸みを帯び、天井部と体部の境は明瞭な段をもつ。外面は丁寧な回転ヘラケズリを施し、底部内面は仕上げナデを行う。148は天井部はやや丸みを持ち、全面に丁寧に回転ヘ

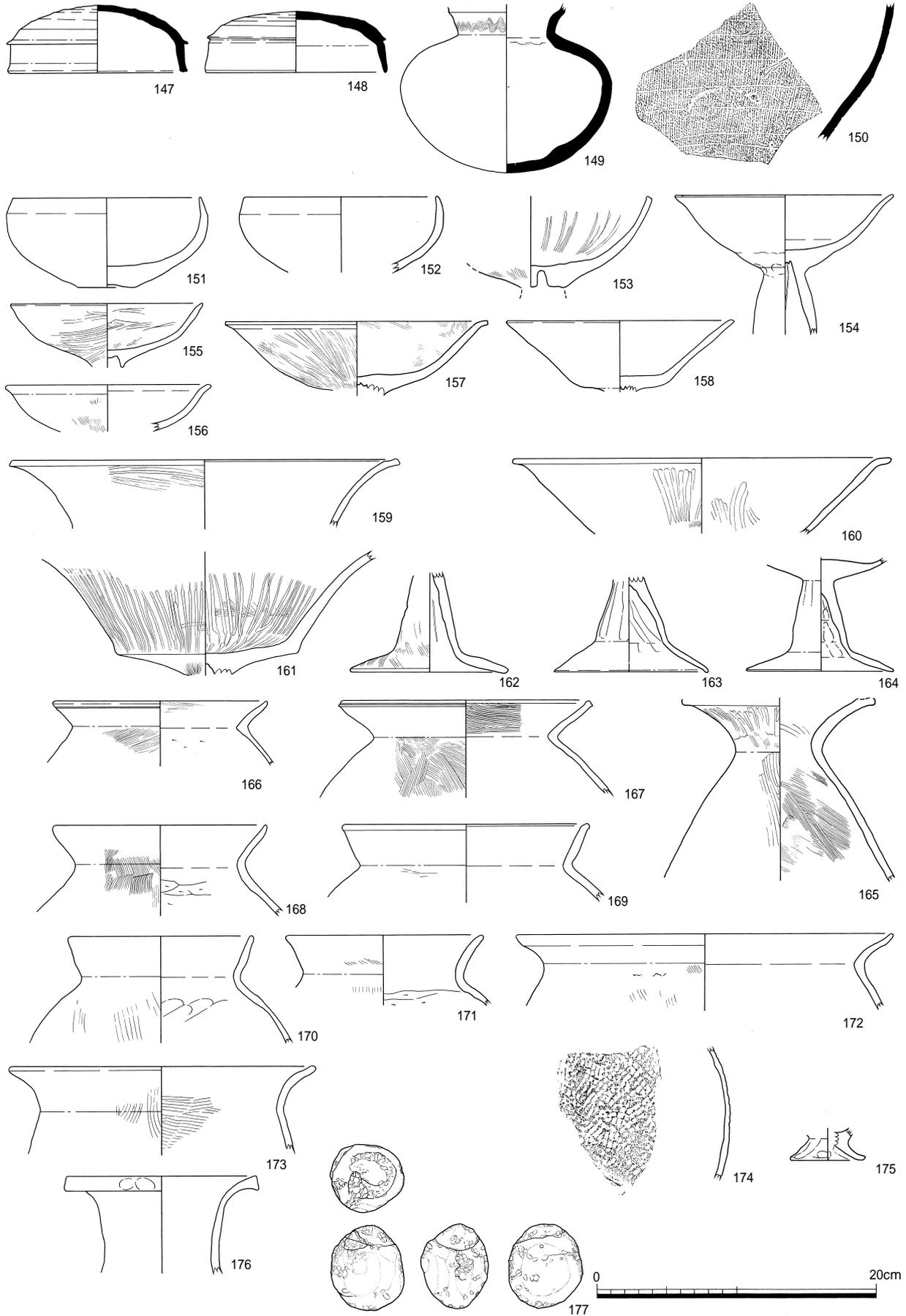


図35 96 - 1 トレンチ第 5 - 2 層 出土遺物

ラケズリを行う。内面は仕上げナデを施す。149は壺で、口縁部は欠損のため不明。頸部に波状紋を施す。頸部内面と体部外面上半部には自然釉が付着する。150は韓式系土器の甕体部の下半である。縄蓆紋を施す。151～173は土師器で、151・152は鉢である。151の口縁部は大きく内彎する。調整は不明瞭である。152の杯部は内彎する。153～164は高杯である。153は内面に暗紋状のヘラミガキを施す。154の調整は不明瞭である。杯部と脚部は粘土を補填しナデによる接合を行う。155は外面にヘラミガキを施す。脚部との接合面は凹状を呈する。156は体部外面はハケメ、その他は丁寧なナデ調整を施す。胎土は非常に密であり赤褐色を呈する。157はやや内彎気味にのび、端部は外に開く。内面はハケメ、その後ナデを施す。外面は放射状にハケメを施す。底部外面には指頭圧痕が残る。158は杯部は上外方に大きく開く。159～161は大型のものである。159の体部は外反しながら上方にのびる。口縁部は外反し、端部は面をもつ。161は杯部底部と体部の境には明瞭な稜がみられる。体部外面にヘラミガキを施す。内面はハケメを施した後、暗紋を施す。162は裾部は筒部から屈曲して大きく広がる。165は器台である。口縁は二重口縁と考えられるが、欠損する。粘土の継ぎ目が明瞭である。内面はハケメ、外面はヘラミガキを施す。胎土は精緻である。166～173は甕で、166は大きく「く」字状に屈曲する。体部外面にはハケメを施す。167は内彎気味に大きく開いた口縁部がのびる。体部外面には細かいハケメ、内面にはナデを施す。また、口縁部内面はハケメを施す。口縁端部は折り返して、丸く肥厚する。169は、口縁部外面の片方に煤の付着がみられる。体部内面はヘラケズリを施す。172の口縁端部はやや内傾して押さえる。外面には僅かにハケメが残る。173は口縁部と体部の境はなだらかであり、口縁は外反してのびる。体部外面は縦方向に体部内面は横方向にハケメを施す。

174は韓式系軟質土器の体部である。175は製塩土器の脚部である。176は弥生土器の壺でローリングを受けている。177は叩き石である。径5.0～6.1cmを測る楕円形で、何か所かに使用痕が残る。

堰1 出土遺物 (図36) 178～182は土師器である。178は小型丸底壺で扁球形の体部をもち、口縁部は斜め上方にのびる。外面の上半部は縦方向(上から下)に粗いハケメを、下半部には斜め方向の細かいハケメを施す。内面はヘラケズリを行う。口縁部は内外面ともにナデ調整を行う。179は直口壺である。口縁部はやや外反しながらのび、肩部は大きく張り出す。口縁部外面はヘラミガキ、内面はハケメ、肩部内面はヘラケズリを施す。180～182は高杯である。180は裾部を欠損する。杯部はラッパ状に広がる。ローリングを受けており調整は不明である。181は口縁部が大きく上外方に広がる。内面の調整は磨滅が著しいが、外面はハケメの後ナデを施す。脚部との接合部分に杯部内面まで貫通する小さな孔が開く。182は杯部で内彎しながら立ち上がる。内面はハケメの後ナデを施す。183は弥生土器の無頸壺の蓋で、外側から内側に向かって開けられた孔が2個ある。

堰2 出土遺物 (図36・37) 184～188は須恵器である。184～186は杯蓋である。184は口縁部がほぼまっすぐ外方に開き、端部はほぼ水平な面をもつ。天井部の回転ヘラケズリは2/3におよぶ。185の口縁部はやや内彎しながら立ち上がり、端部は内傾して面を成す。186の口縁部はやや内彎ぎみにまっすぐ上方に立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。187・188は甕である。187は口頸部で、やや外反しながらまっすぐ立ち上がる。口縁部は大きく広がり、端部をつまみ上げる。188は甕底部で内面にしぼり目が、外面には窯着が認められる。189～211は土師器である。189～194は小型丸底壺である。189は磨滅が著しいが、体部外面にハケメが残る。口縁部内外面および体部内面はナデを施す。190は扁球形の体部をもち口縁部は直線的に上外方にのびる。体部の調整は外面は下半部をヘラケズリし、上半部は斜め方向にハケメを施した後、中央部に横方向のハケメを施す。内面は上半部にナデを、下半部にはヘラ

ケズリを行う。口縁部は内外面共にナデを施す。191は球形の体部をもち、外反する口縁をもつ。外面の調整は縦方向の細かいハケメを施す。内面体部にヘラケズリを施し、口縁部は斜め方向にハケメを施す。外面には煤が付着する。192は複合口縁で、平底ぎみの底部をもつ。外面は縦方向のハケメを内面は体部にヘラケズリを施し、口縁部はナデを行う。粘土紐の痕跡が残り、外面には煤が付着する。193の内面は粗いナデを施す。体部下半に煤が付着する。194は外面に非常に細かいハケメを施す。195～201

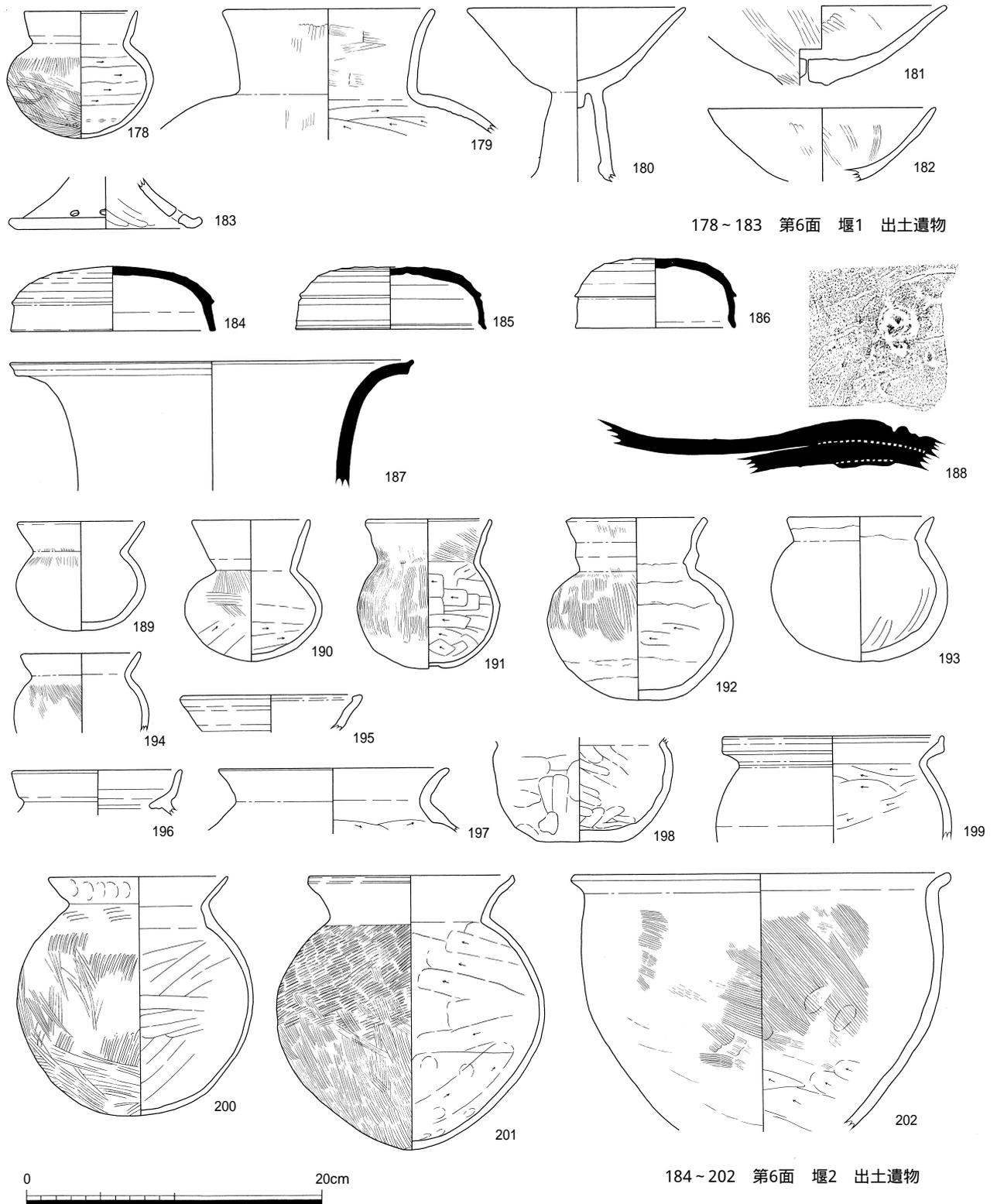


図36 96 - 1 トレンチ第6面 壺1・2 出土遺物

は甕である。195は口縁部で端部を折り返して面を成す。196は短い口縁がやや内彎してのびる。体部外面はハケメを施し、内面、口縁部内外面はナデを施す。197の口縁は外反しながら立ち上がる。体部内面はヘラケズリによって非常に薄く仕上げる。胎土は非常に精緻で、外面には煤が付着する。198は口縁部が欠損する。平底で、内外面共板ナデを施す。199は複合口縁をもつ。200の体部は球形を呈し、口縁がやや内彎して上方に開く。外面はタタキの後、粗いハケメを施す。内面はヘラケズリを施す。口縁部には指頭圧痕が残る。201はいわゆる庄内甕で、体部外面にタタキを施した後、下半部にハケメを施す。内面はヘラケズリを行うが、下半部には指頭圧痕が残る。口縁部はナデによる調整を行い、端部はつまみ上げる。202は鉢で、内面下部に粗いヘラケズリを施した後、内外面共にハケメ調整を行い、口縁部はナデを施す。203～211は高杯である。203は杯部が直線的にのび、底部との境に弱い稜をもつ。脚部は裾で「八」字状に開く。外面は縦方向に、内面は横方向にハケメを施す。脚の筒部内面は粘土紐の痕跡と、しぼり痕が残る。裾部はナデを施す。204は底部と体部の境に明瞭な稜をもつ。口縁端部は外反する。205は内外面共にヘラミガキを施す。体部と底部の境には明瞭な段をもつ。206～208は杯部が底部から彎曲してのびる。内面にハケメを施すものもあるが、外面は磨滅が著しく調整は不明である。209は脚部が非常に短く、大きく広がる裾部をもつ。透かし孔は3個残存する。筒部外面はヘラミガキが施され、裾部内面はハケメが僅かに残る。非常に精製された胎土をもつ。210は透かし孔を3個もつ。裾部内面にハケメを施し、筒部内面は横方向にヘラケズリを施す。外面は裾部はナデを、筒部は板ナデを施す。211の外面はナデ、内面はヘラケズリを施す。212～216は弥生土器であるが、いずれも著しくローリングを受ける。212～214は壺で、212の口縁を外側に折り曲げ、端部に刻み目を施す。213は口縁をラップ状に広げ、端部は面をもつ。214はあまり広がらない口頸部をもち、端部を肥大させて面をつくる。215は甕で4条の沈線をもつ。216は台付き鉢の脚部である。

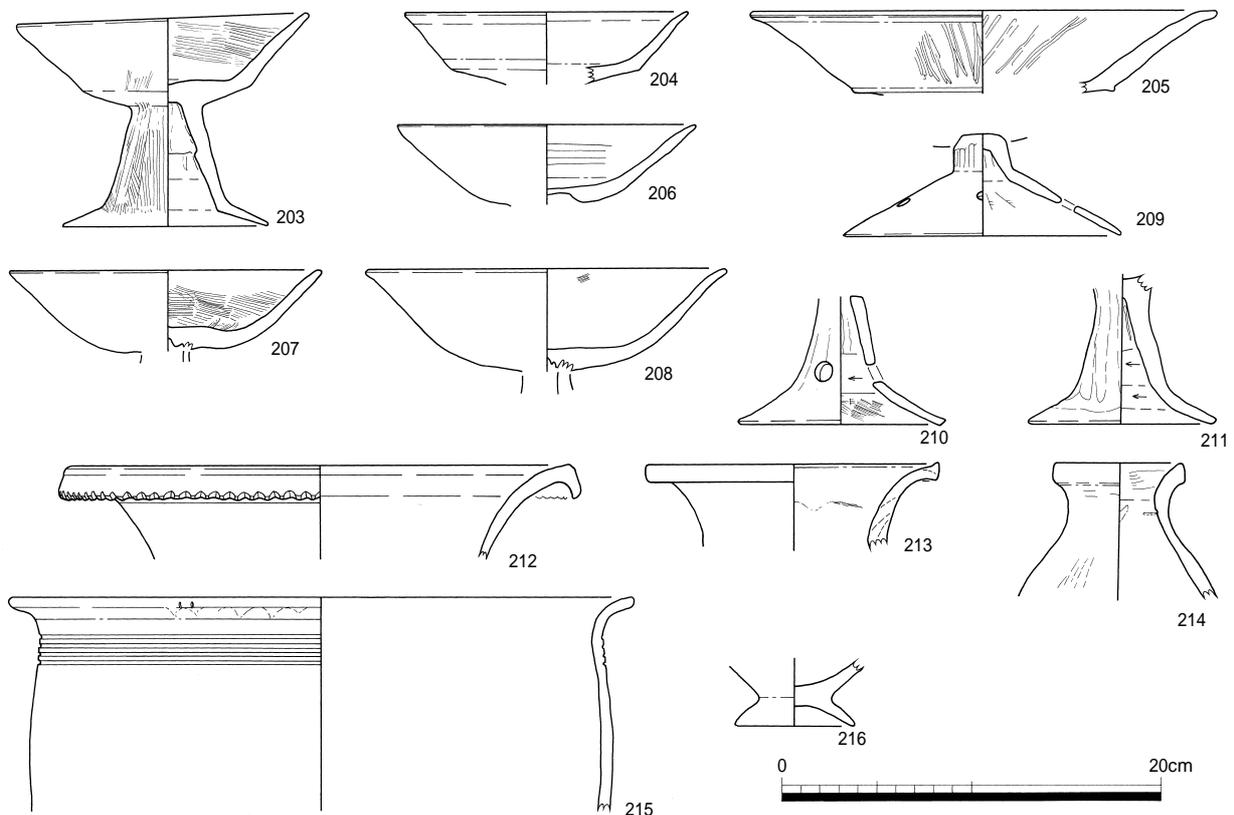


図37 96 - 1 トレンチ第6面 堰2 出土遺物

第6層出土遺物(図38) 217は鉄鏃である。柳葉形を呈し、基部には樹皮が遺存する。第6層以下からは他に遺物の出土はみられなかった。

その他の出土遺物(図39) 側溝から出土した。218~224は須恵器である。218・219は杯蓋で、回転ヘラケズリを施す。219は天井部1/3に幅の広い回転ヘラケズリを施す。220・221は杯身である。220は底部内面には仕上げナデを施し、外面に篋記号をもつ。また、外面には自然釉が付着する。222・223は高台付杯である。223の口縁部はまっすぐ外に開き、端部を丸く収める。224は台付壺である。225は甗で、頸部は細く、やや平底を呈す。体部に2条の沈線を巡らせ、間に列点紋をもつ。226は瓦質土器の

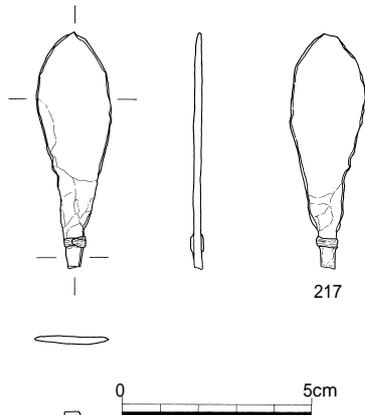


図38 96-1トレンチ
第6層 出土遺物

把手である。器種は不明であるが、段をもつ。227~232、234・235は土師器である。227~229は高杯で、227は緩やかに上外方に開く。内側には煤が付着する。228は体部下半に稜をもつ。内面に暗紋状のヘラミガキを施す。229は脚部である。内面にはしぼり痕が明瞭に残る。230・231は杯である。231は口縁端部が丸く肥厚する。体部外面にナデを施す。また、底部外面に指頭圧痕が残る。体部内面には斜放射状1段暗紋を施す。232は皿である。口縁端部は丸く肥厚する。233は須恵器甕である。口縁端部は肥厚して面を成す。234・235は土師器甕である。234は頸部と体部に段をもつ。235は内外面共にハケメ調整を行う。また、底部内面には指頭圧痕が残る。

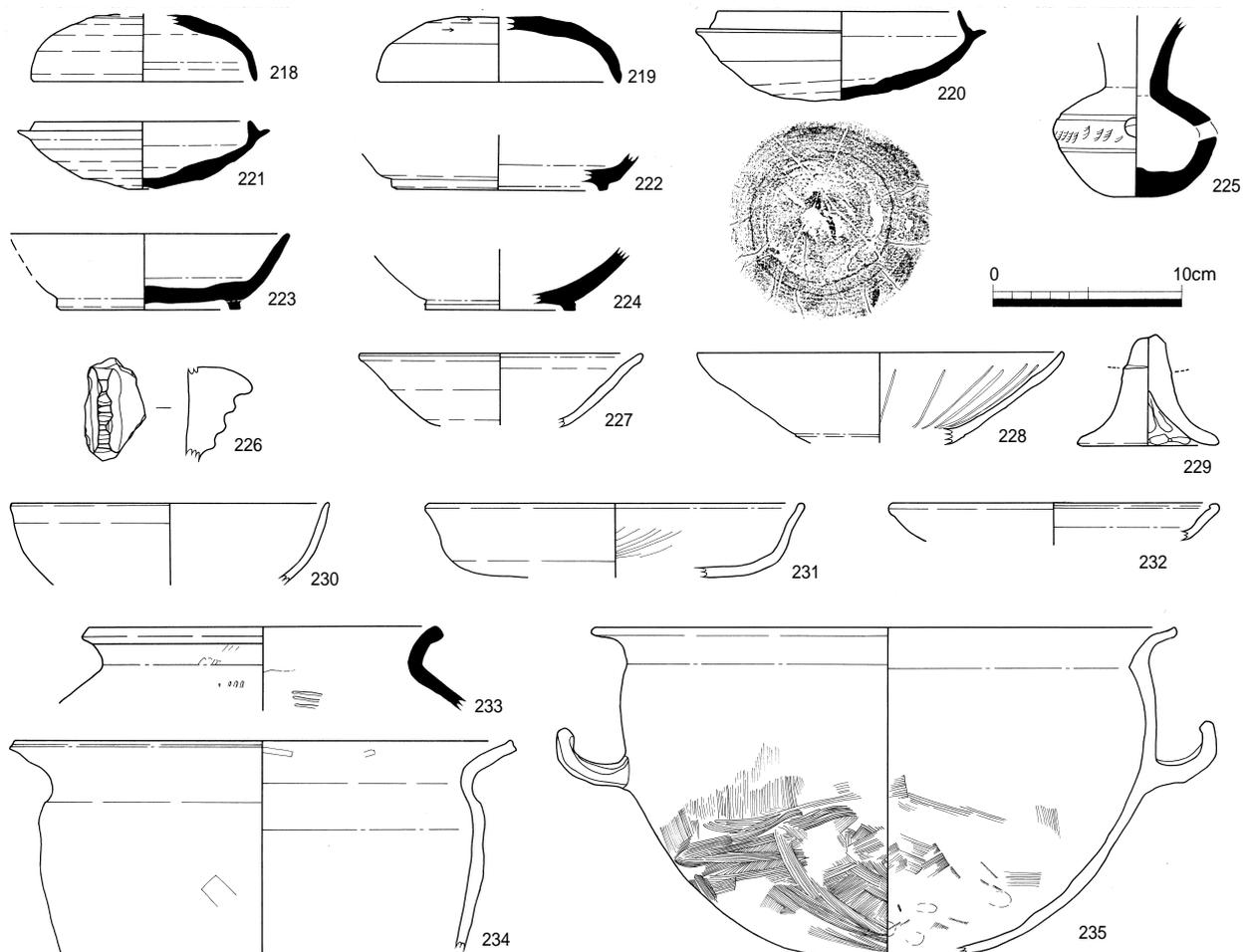


図39 96-1トレンチその他 出土遺物

2 97 - 1 トレンチ

a. 遺構

現代整地層 竜華操車場造成時の整地土および、地下道用コンクリートボックス埋設時の裏込め土で、鋼矢板の安全深度まで重機で除去し、その後は人力で掘削を行った。整地土の層厚は約1.1mを測る。地下道用コンクリートボックス埋設時の掘方は、調査区東側の幅約3mにわたって存在し、深さは掘削限界にまで達する。

第1面 (図40) 当該面は、操車場造成時の整地土を除去して検出した。また、調査区の東辺部を幅約3mに渡って地下道用コンクリートボックス埋設時の掘方が、調査区の北辺を幅約2.3mに渡ってコン

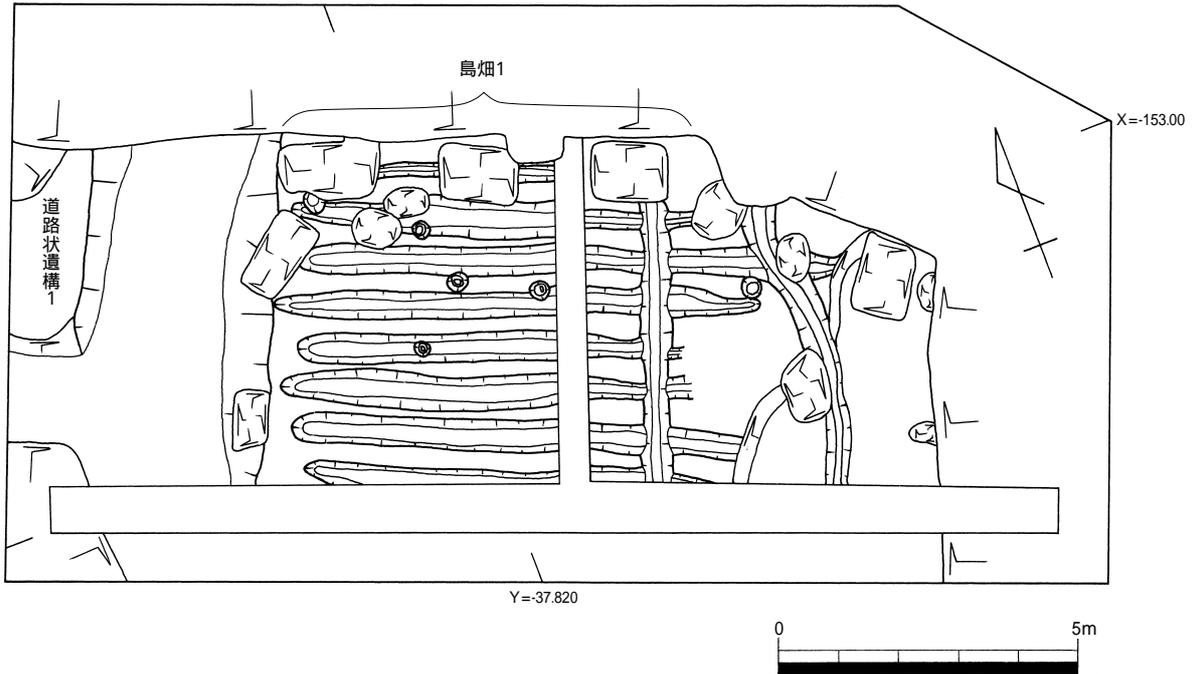


図40 97 - 1 トレンチ第1面 遺構平面図

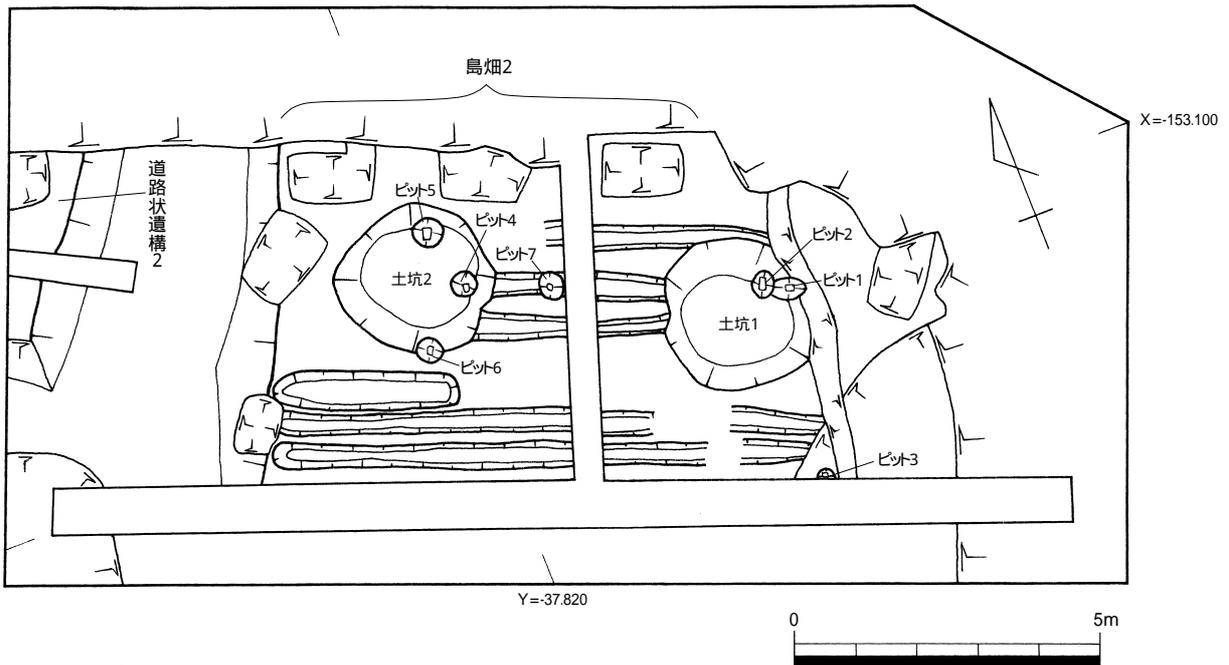


図41 97 - 1 トレンチ第2面 遺構平面図

クリート水路の掘方がそれぞれはしり、遺構面の削平が認められた。当該面で検出された遺構は、道路1条・島畑1基・ピット数基などである。なお、島畑の上面には耕作に伴う溝（犁溝）が縦横にはしる。

道路1は調査区の西辺で検出されたが、攪乱による削平が著しい。道路1は北東-南西方向にはしっており、これは95-8・95-9トレンチで検出された道路状遺構に続くものと考えられる。道路1の構築方法は既存の道路に径1cm大のバラスを敷き、その上に厚さ5cmの細砂層を貼って撞き固めたものである。幅などの規模は不明であるが、高さは30cmを測る。なお、この道路1は第3面に初現が認められる。

島畑1は南に隣接する96-1トレンチから続くもので、北東-南西方向に主軸をもつ。この軸は西側で検出した道路と並行するものである。規模は、東辺および北辺が攪乱による削平を受けているため不明である。さらに島畑は南の調査区外へのびる。現存規模は上幅11.0m、下幅11.8m、長さ7.3m、高さ0.3mを測る。上面で検出された溝は島畑の主軸に平行にはしるものが1条、直交するものが8条ある。溝の規模はいずれも幅40~50cm、深さ5~10cmを測る。また、島畑の主軸に直交する溝の間隔は10~30cmを測る。ピットはいずれも島畑の上面のみで検出されるが、犁溝より後から掘り込まれる。ピットには柱痕が残っていた。標高は島畑の上面で8.2mを測る。

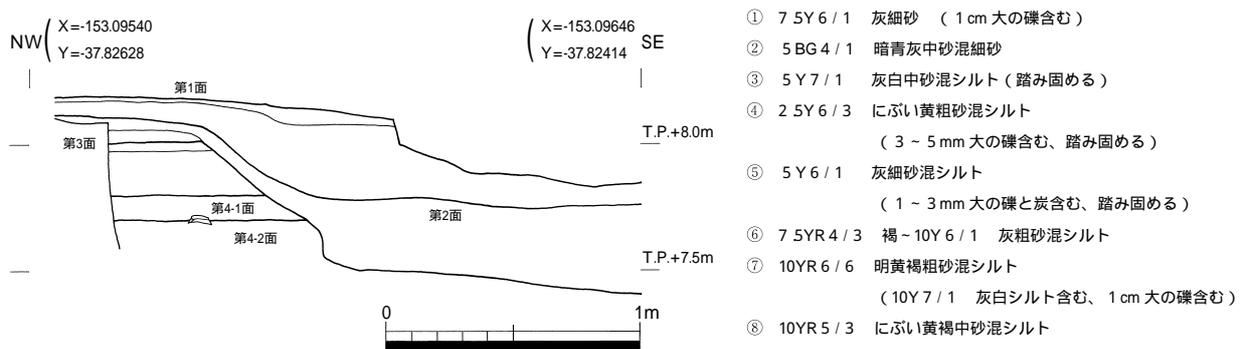


図42 97-1トレンチ 道路状遺構 土層断面図

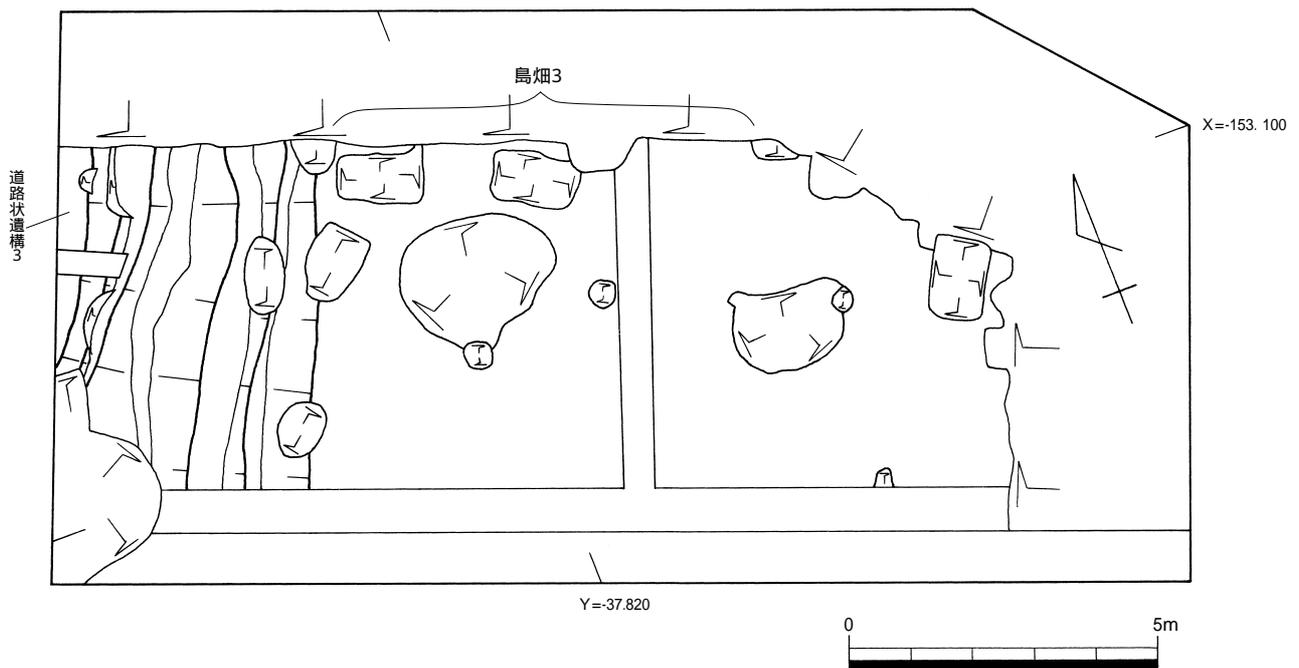


図43 97-1トレンチ第3面 遺構平面図

第2面 (図41) 当該面は第1層耕作土を除去して検出した。検出された遺構は島畑および道路で、島畑の上面で土坑・溝などを検出した。道路2は上面および南半部は攪乱による削平を受けていたが、比高は約25cmを測る。道路2は第3面で検出された道路3の上面にバラスを敷いて撞き固め、さらにその上に灰白中砂混シルトを敷く。

島畑2は第1面と同じく攪乱による削平を受けていたため、本来の規模は不明であるが、現存規模は上幅11.3m、下幅12.1m、長さ7.2m、水田面との比高は0.3mである。島畑2の上面には土坑2基と溝6条が検出された。

土坑は1・2共に径2.5m、深さ0.2mを測る不整形の円形を呈する。土坑1・2は島畑の長軸に対し

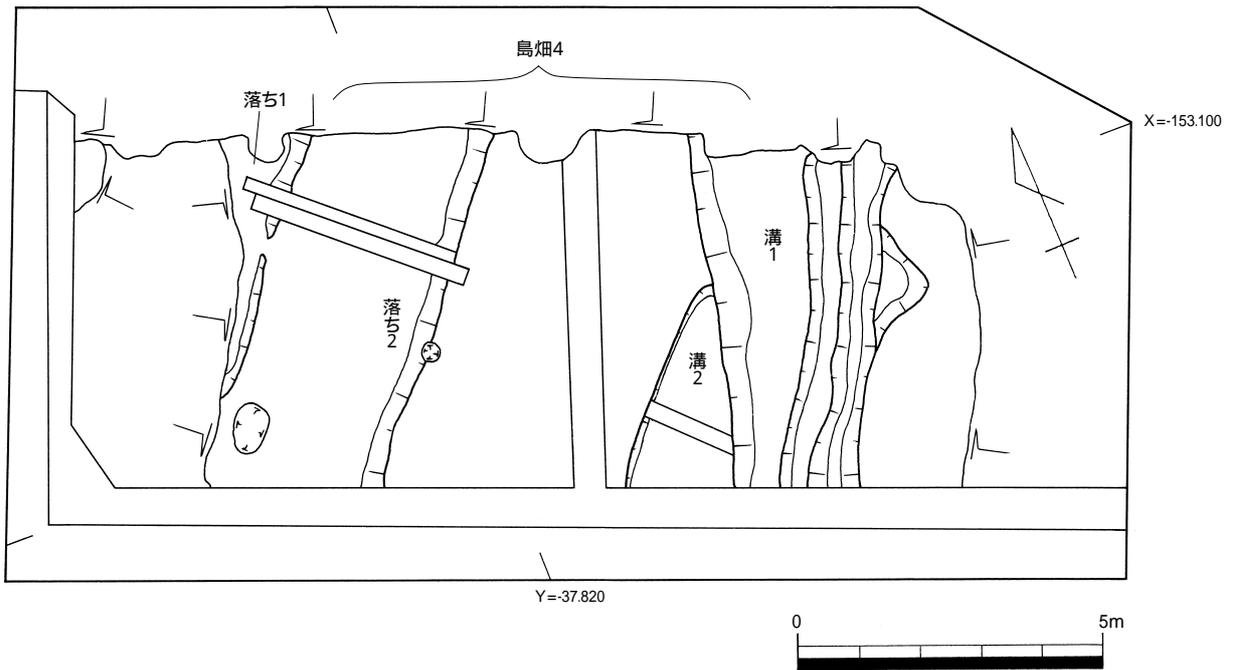


図44 97-1トレンチ第4-1面 遺構平面図

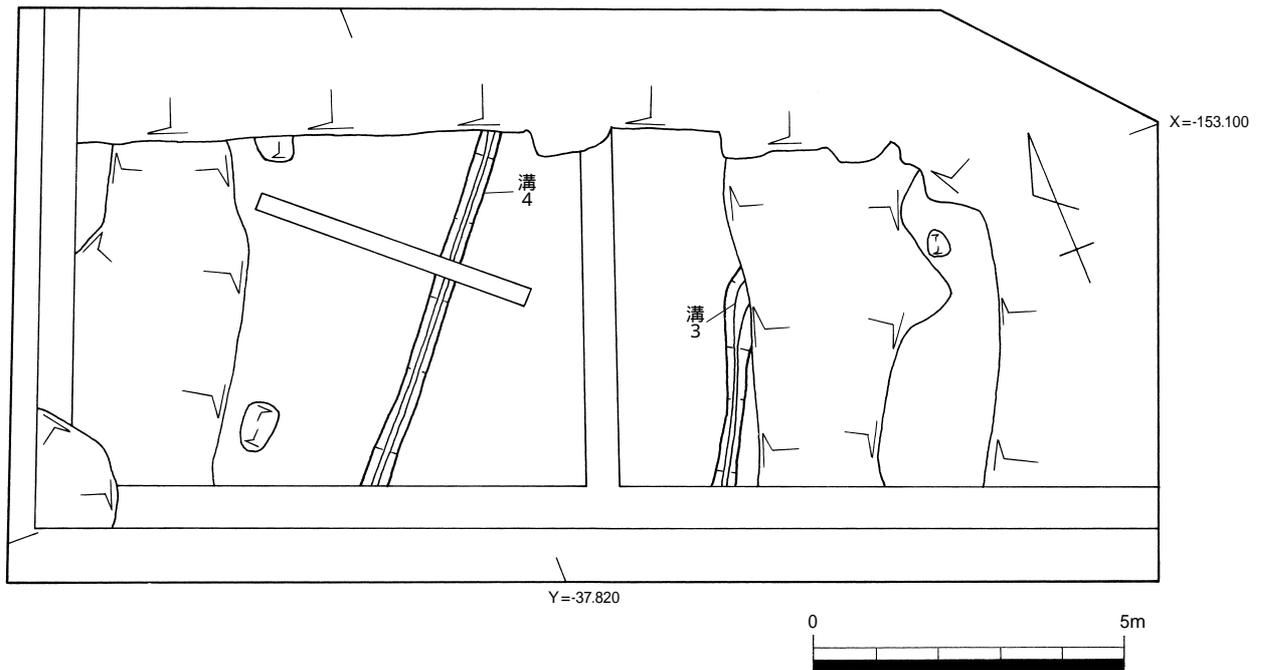


図45 97-1トレンチ第4-2面 遺構平面図

て直交する形で並んでおり、土坑間の距離は5.5mを測る。

溝は全て島畑の長軸に対して直交してはしり、幅30~60cm、深さ2~5cmを測る。埋土は第1層の灰礫混中砂層であることから、耕作に伴うものと考えられる。

道路と島畑間には第3面で検出された溝状の落ちの埋土である暗青灰中砂混細砂層が層厚約45cm堆積して平坦面をつくる。標高は島畑上面で8.1mを測る。

第3面(図43) 第2層の暗緑灰細砂混シルトを除去して検出した。検出された遺構は島畑・道路・溝などである。島畑3の現存規模は上幅11.3m、長さ7.5m、比高約0.4mを測る。島畑上面は後世の耕作のため、遺構は検出されなかった。

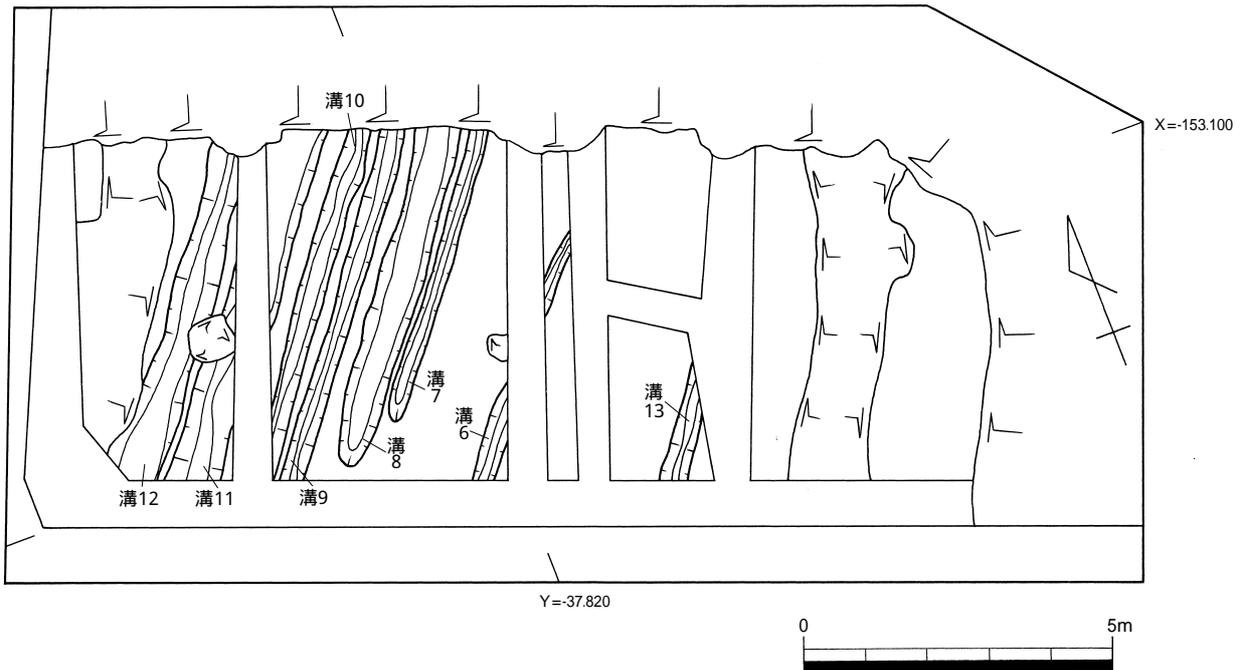


図46 97-1トレンチ第5-1面 遺構平面図

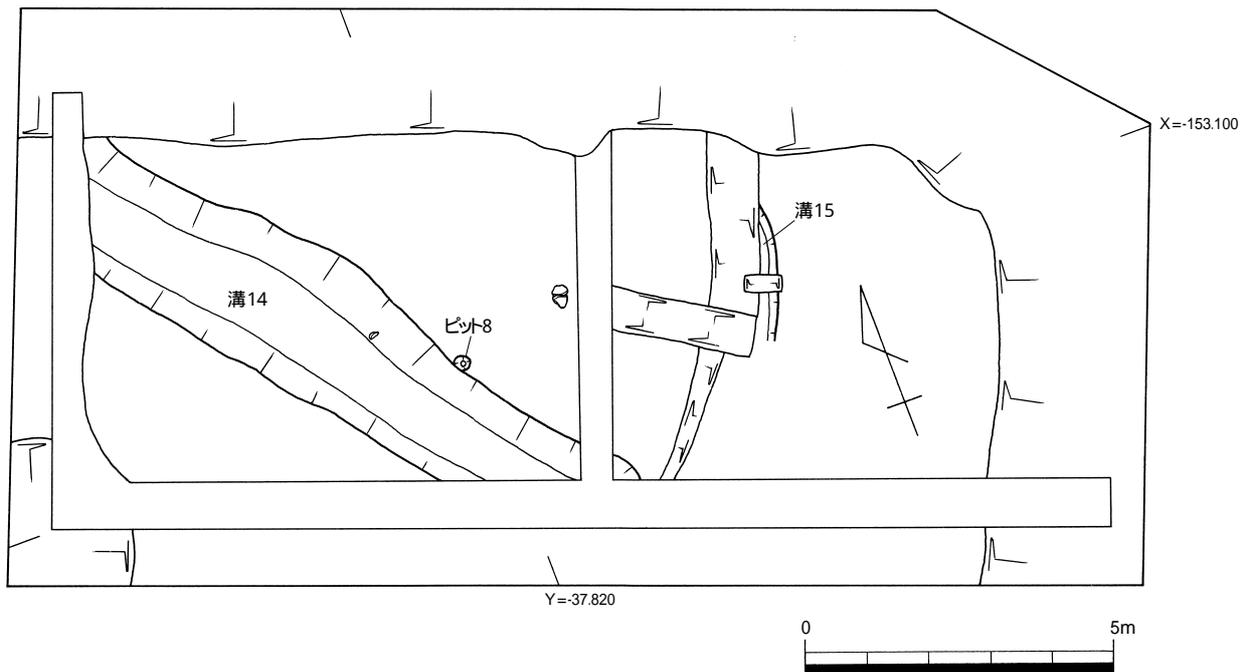


図47 97-1トレンチ第5-2a面 遺構平面図

道路3の南半部は攪乱による削平を受ける。道路3は第4 - 1面の上面に層厚約0.2mの盛土を行った後、約5cmの黄褐粗砂混シルト層を叩き締める。比高は約0.5mを測る。また、道路と島畑間には落ちがはしり、幅1.1~1.7m、深さ約0.1~0.3mを測る。標高は島畑上面で8.0mを測る。

第4 - 1面 (図44) 第3層を除去して検出した。検出された遺構は島畑と溝などで、2回の拡幅が確認できた。島畑4は当トレンチで見られる初現のもので、上幅6.8~7.9mを測る。これは既往の調査成果とも一致する。島畑4の上面には2条の溝が検出された。溝1は島畑4の東側を北東 - 南西方向にはしるもので、96 - 1トレンチで検出した溝35の続きである。少なくとも2回の掘り直しが確認できた。溝2は溝1に切られていたため規模は不明であるが、現存規模は幅2.5m、深さ0.3mで、埋土は黄褐粗砂混シルト層である。標高は島畑上面部分で7.8mを測る。

第4 - 2面 (図45) 当該面は第4 - 1層を除去して検出した耕作面である。検出された遺構は溝2条である。溝はどちらも北東 - 南西方向にはしる。溝3は調査区の中央やや東側をはしり、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。出土遺物は須恵器・土師器・黒色土器の細片などである。溝4は調査区の中央付近をはしり、幅約0.4m、深さ約5cmを測る。溝埋土中より緑釉陶器椀・須恵器・土師器・瓦器などの細片が出土した。これらの溝は96 - 1トレンチから続くもので、耕作に伴って掘削されたものである。標高は7.6mを測る。

第5 - 1面 (図46) 第4 - 2層を除去して検出した。検出された遺構は北東 - 南西方向にはしる溝8条である。溝は主として調査区の西側から検出された。埋土は第4 - 2層が入っていることや、第4 - 2面の耕作に伴う溝と方向が一致することなどから、これらの溝群は第4 - 2面段階での耕作に伴って掘削された溝と考えられる。標高は7.5mを測る。

第5 - 2a面 (図47) 当該面は第5 - 1層を除去して検出したが、既往の調査では検出されなかった面で、薄い土壌層の上面である。検出された遺構は溝・ピットなどである。溝14は96 - 1トレンチの第5 - 1面で検出された溝43に続くもので、北西 - 南東方向にはしる。このことから、96 - 1トレンチの第5 - 1面は97 - 1トレンチで2層に細分できた。標高は7.3mを測る。

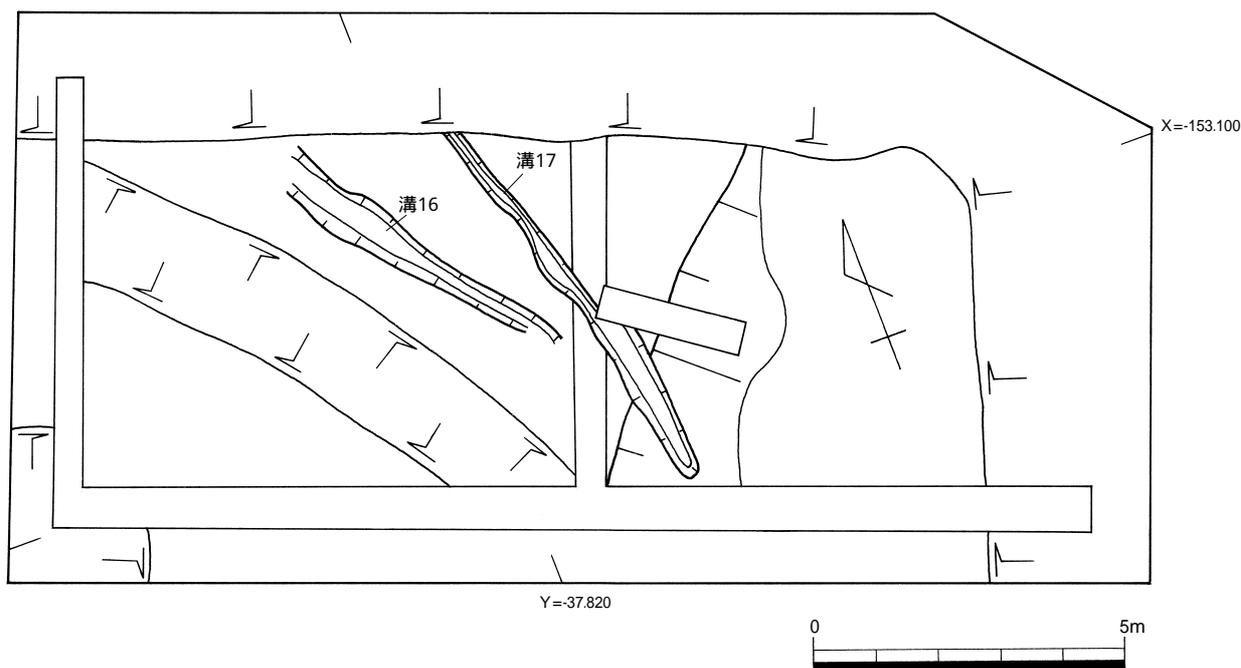


図48 97 - 1トレンチ第5 - 2b面 遺構平面図

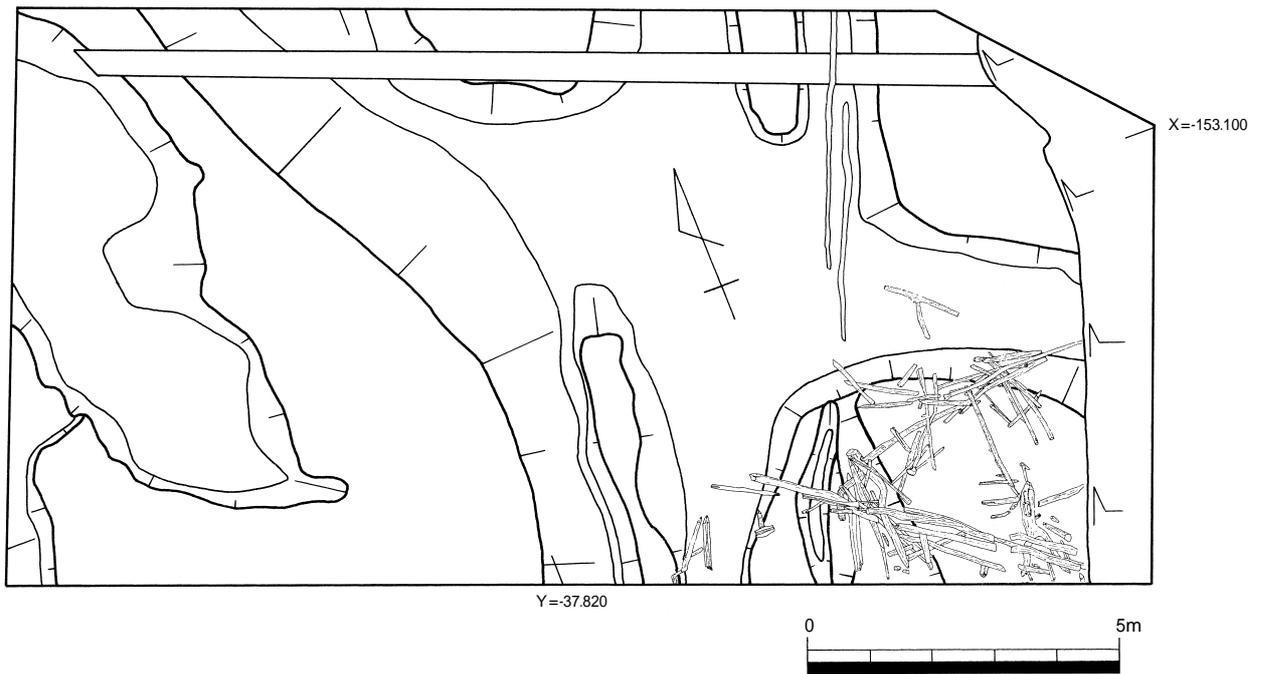


図49 97 - 1 トレンチ第6面 遺構平面図

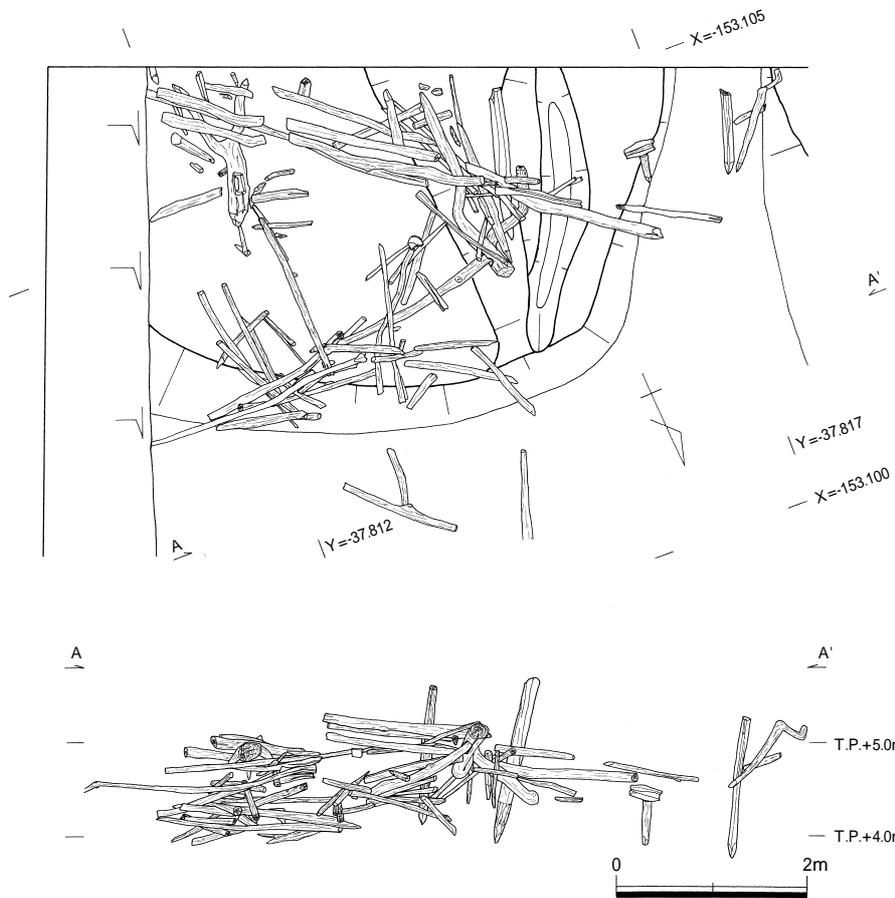


図50 97 - 1 トレンチ第6面 堰 平・立面図

第5 - 2b面 (図48) 第5 - 2a層を除去して検出した。当該面は洪水砂の上面で、調査区の東半部は大きく傾斜するが、これは洪水砂の堆積状況を投影するものである。検出した遺構は溝2条である。溝はほぼ南北方向にはしる。溝16は幅約0.3~0.8m、深さ約6cmを測る。溝17は幅約0.2~0.6m、深さ約5cmを測る。標高は7.1mを測る。

第5 - 2b層 旧河川中に堆積した洪水砂で層厚約2.4mを測る。洪水砂は何度かの堆積に細分することができる。出土した遺物は土師器・須恵器・弥生土器・縄紋土器・サヌカイトなどであるが、弥生土器・縄紋土器・サヌカイトなどはローリングを受けている。

第6面 (図49・50) 旧河川の河床であるため、水の流れによる浸食で凹凸が著しい。遺構は合掌型の堰であるが、洪水によって破壊された状態で検出された。この堰は96 - 1トレンチで検出された堰2の続きで、屈曲部の後方に築かれた補強部分であると考えられる。堰の構造は従来のもと同じで、ほぞを繰った縦杭を打ち込んだ後にほぞ穴を穿った二股木を組み合わせたものを基礎とする。次に二股木の傾斜に沿って横木を並べ、その横木を「X」字形に打ち込んだ縦杭で支える。

堰に使用された二股木について述べる(図51)。二股木1は長さ210cm、幅96cm、頭部径18cm、先端部径18cm、ほぞ穴部15×13cmを測る。頭部は真っ直ぐ切断されている。脚部は、一方が頭部から真っ直ぐ伸びて、先端を鋭角に削り出して杭状にするが、他方は大きく彎曲する。そして、その先端は欠損しているため不明である。二股木2は逆「Y」字状をしており、長さ170cm、幅98cm、頭部径17cm、先端部径18cm、ほぞ穴部27×12cmを測る。頭部は山形に切断されている。先端は一方は削り出して杭状にするが、その角度は鈍角である。なお、他方の先端は欠損しているため不明である。

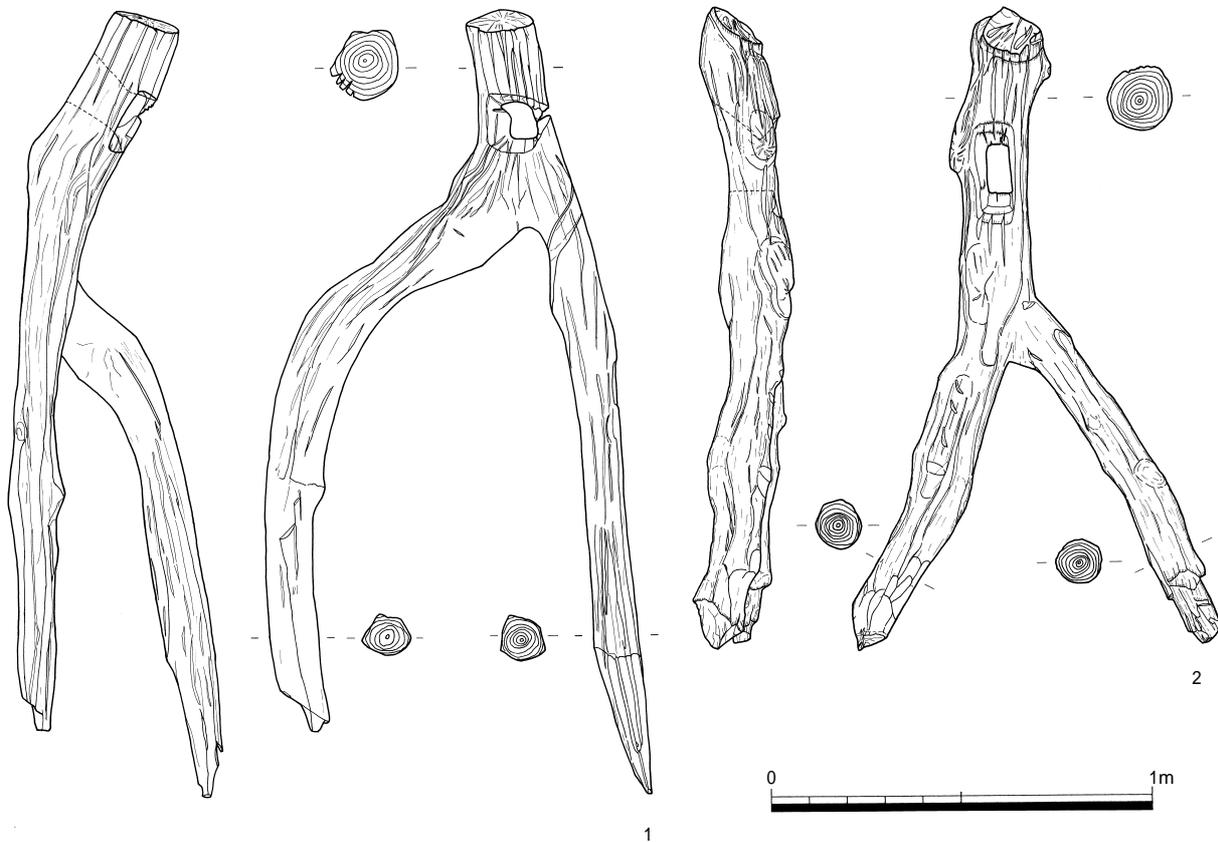


図51 97 - 1トレンチ第6面 堰 使用材

第7面 (図52) 第6層の自然堆積層を除去して検出した黒色土壌層の上面である。遺構面は、第6面の旧河川の浸食により削平を受ける。しかし、プラントオパール分析の結果、イネ科のプラントオパールが多量に検出されたことから、水田であった可能性は高い。なお、7b面で土坑3を検出した。

第8面 (図53) 当該面は既往の調査の際、弱い土壌化を確認していたが精査を行っていなかった。今回精査を行ったが、遺構・遺物共に検出されなかった。このことから、当該面は土壌化が確認できるものの、この調査区付近はあまり積極的に利用されなかったと考えられる。

第8層 当該層は土壌化層と自然堆積層に分けられる。土壌化層はオリブ黒シルトで層厚約25cm、自然堆積層は層厚約30cmを測り、掘削限界を越えて堆積する。

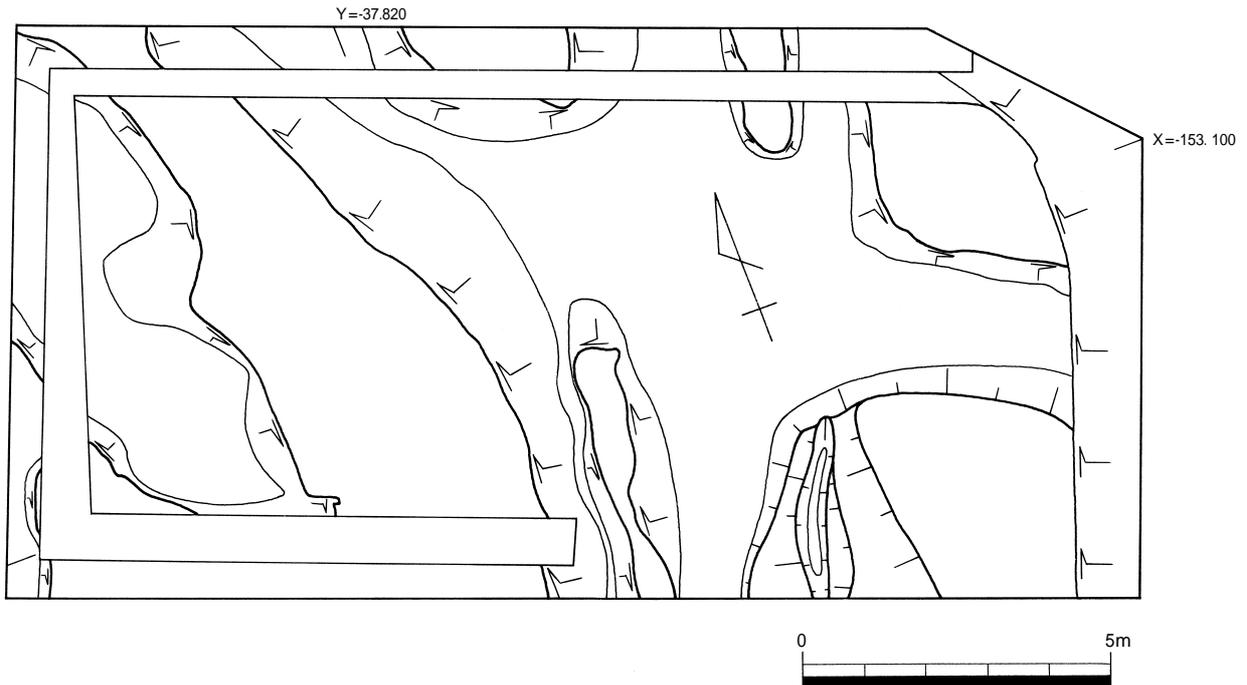


図52 97 - 1 トレンチ第7面 遺構平面図

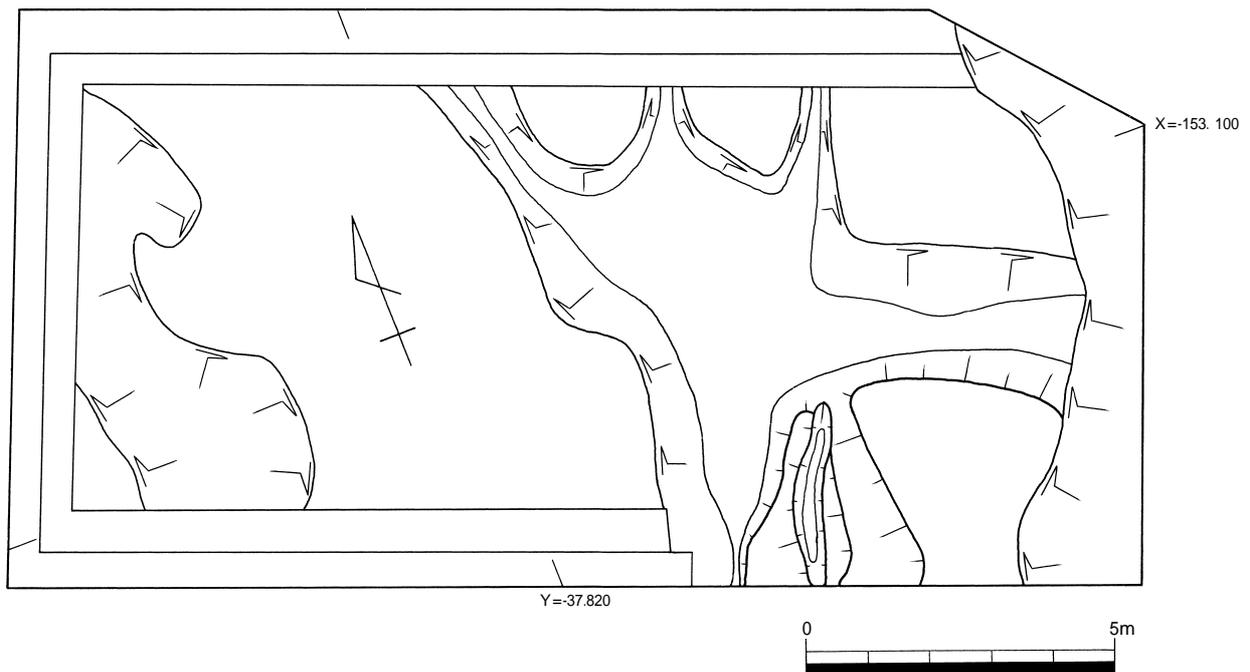


図53 97 - 1 トレンチ第8面 遺構平面図

b. 遺物

第1層出土遺物 (図54) 1は須恵器の杯身である。2は島畑1の耕作土内出土の須恵器の壺で、高台をもち、端部は面を有する。いずれも下層からの巻き上げである。

第2面出土遺物 (図54) 3はピット1より出土した灰釉陶器で、外反する口縁部をもち、端部は丸く収める。全体に施釉し、口縁部外面には自然釉が付着する。4はピット6より出土した土師皿で立ち上がりは直線的に開き、色調は灰白系である。

第2層出土遺物 (図54) 5は染付磁器の碗の口縁部で五三の桐が描かれている。6は染付磁器の猪口と考えられる。7は陶器の仏具の蓋で外面はヘラケズリの後、棒状の工具で沈線を施す。つまみ部の先端は欠損する。8は唐津窯の高台付碗で内面には砂目積み痕が残る。胴部外面および内面を施釉する。

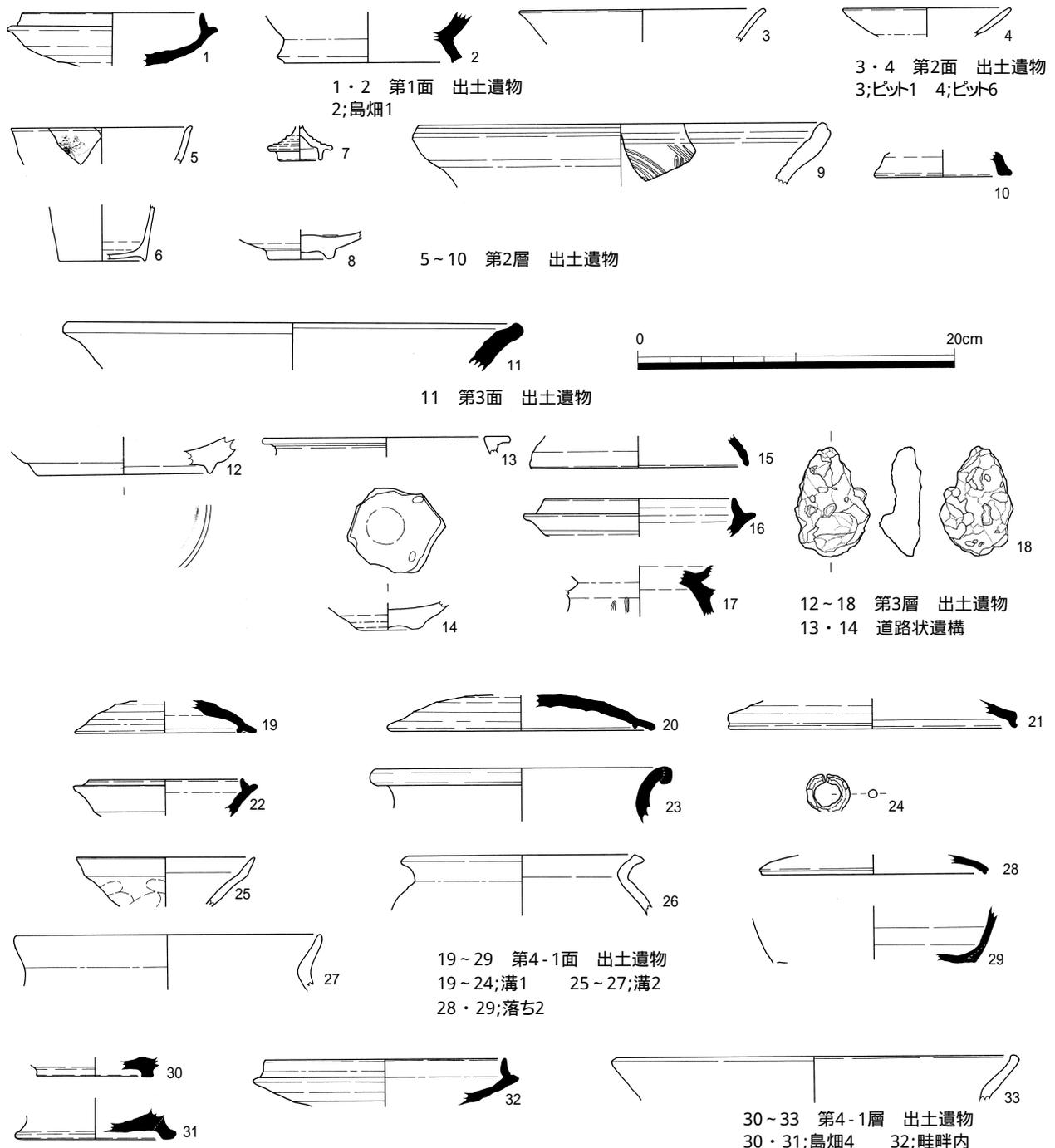


図54 97-1トレンチ第1面~第4-1層 出土遺物

9は丹波窯の挿鉢の口縁部で挿目の原体は4条以上ある。10は須恵器で高杯の脚部である。

第3面出土遺物 (図54) 11は須恵器の甕で、端部は面をもつ。

第3層出土遺物 (図54) 12は染付磁器の伊万里窯の碗。13・14は道路状遺構より出土した。13は陶器の皿で端部は面を有し、内外面共に施釉する。14は唐津窯の皿で内面を施釉し、底部に砂目積み痕が残る。15~17は須恵器で、15は杯蓋、16は杯身、17は円面硯で脚部の外面に縦位沈線を施す。18は鉄滓。

第4 - 1面出土遺物 (図54) 19~24は溝1より出土した。19~23は須恵器である。19・20はかえりをもつ杯蓋である。21は口縁端部を下方に短くつまみ出す。22は杯身である。23は甕の口縁部で内面には自然釉が付着する。24は銀製の耳環である。25~27は溝2より出土した。25は土師器碗の口縁部で胴部外面に指頭圧痕を施し、口縁部は屈曲部に明瞭な段をもつ。また、内面には化粧土を施す。26・27は土師器甕の口縁部である。26は口縁部の凹部は強いヨコナデを施す。27は磨耗が著しいため不明である。28・29は落ち2より出土した須恵器である。28は杯蓋で口縁端部に沈線を施す。29は台付杯の杯部で脚部は剥離する。

第4 - 1層出土遺物 (図54) 30~32は須恵器である。30・31は島畑4より出土した壺高台である。31は内面には粘土紐の痕跡が残る。32は畦畔内より出土した杯身である。33は土師器の甕の口縁部で内彎して立ち上がり、端部は面を有する。

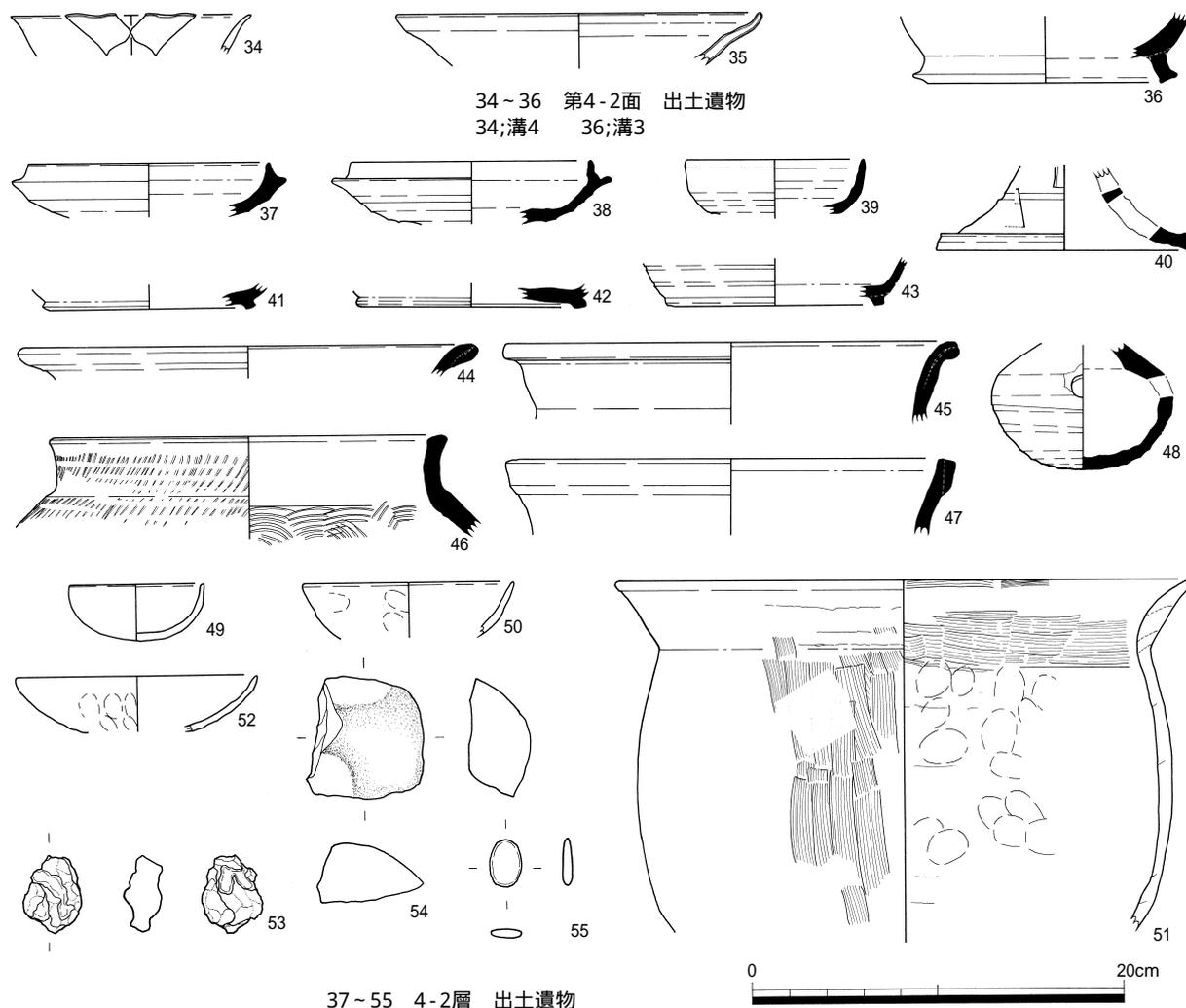


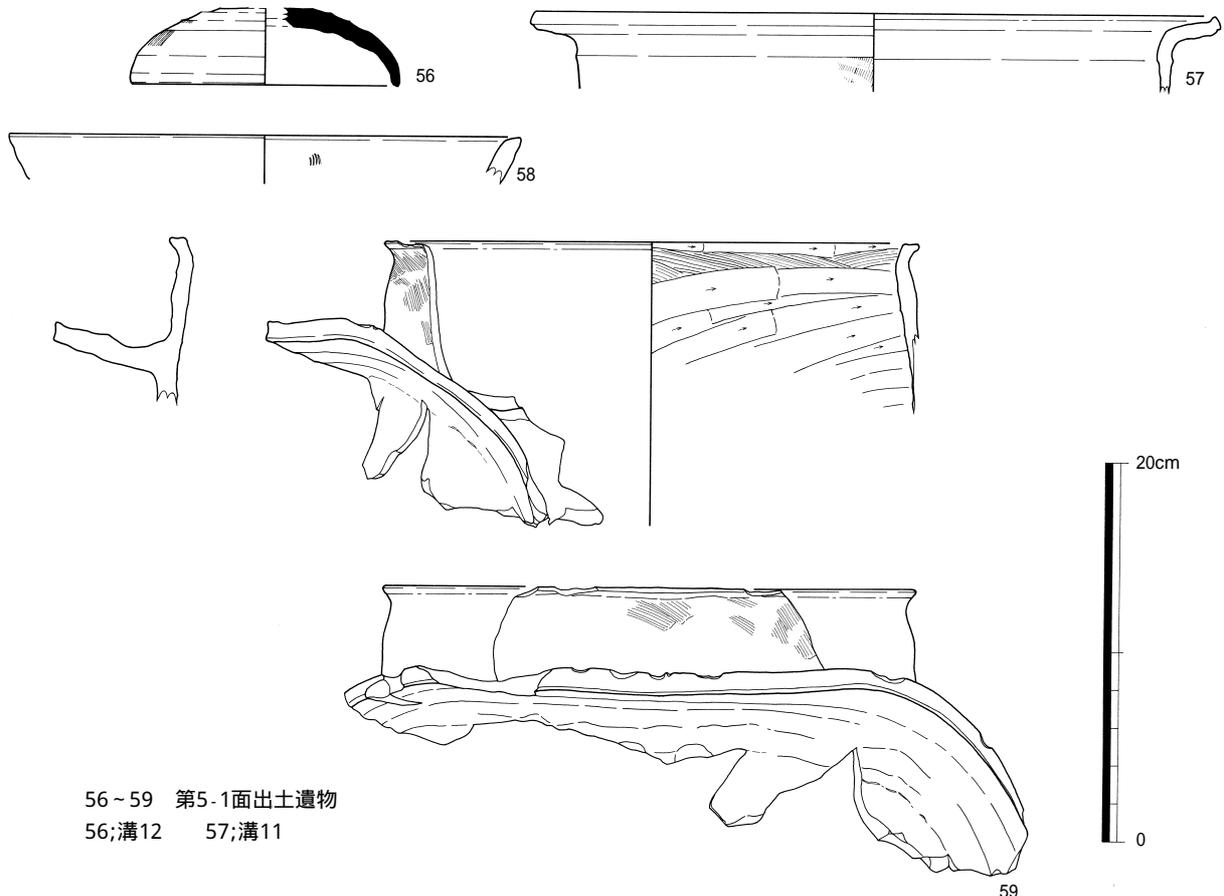
図55 97 - 1 トレンチ第4 - 2面 ~ 第4 - 2層 出土遺物

第4 - 2面出土遺物 (図55) 34は溝4より出土した緑釉陶器の椀で、口縁端部に輪花がある。35は青磁椀で口縁部は内彎して立ち上がり、端部は丸く収める。36は須恵器壺の高台で端部は面をもつ。

第4 - 2層出土遺物 (図55) 37~47は須恵器である。37~39は杯身である。39は小振りの杯身である。40は高杯の脚部で透かし孔を上下2か所にもち、脚部端部は面を有す。41・42は杯の高台部分である。42は内面および外面の脚部はヨコナデを施すが、底部は未調整である。43は壺の高台部分で外面には沈線が巡る。44~47は甕の口縁部である。44は口縁端部が肥厚し、口縁部に凸線が巡る。45は口縁端部が肥厚して面を有する。46は外面の頸部にはナデ、肩部はタタキメの後ナデ、内面の口縁部はヨコナデ、胴部は同心円紋を施す。47は口縁端部は肥厚して面を有す。48は甕で内面の肩部に稜線をもつ。49~51は土師器である。49は小型椀である。50は椀でわずかに外面に指頭圧痕が残る。内面には化粧土を施す。51は長胴甕で胴部外面に縦方向のハケメ、内面は口縁部に横方向のハケメ、胴部には指頭圧痕とナデを施す。52は和泉型の瓦器椀で口縁端部と内面はナデ、外面体部面には指頭圧痕が残る。53は鉄滓である。54は砂岩製の石皿であり、2か所に使用痕がみられる。55是那智黒の基石である。

第5 - 1面出土遺物 (図56) 56は溝12より出土の須恵器の杯蓋で外面の一部に縦方向のハケメが残る。57は溝11より出土の土師器甕で口縁部は横方向に大きく開き、口縁端部はつまみ上げる。58は瓦質土器の播鉢で口縁端部は面をもつ。59は土師質の移動式竈である。外面は釜穴部にハケメを施す。内面は釜穴部にハケメと横方向のヘラケズリを施す。口縁端部は外反する。

第5 - 1層出土遺物 (図57) 60~77は須恵器である。60・61は杯蓋である。62~70は杯身である。62・67・68は外面の底部に篋記号をもつ。71は高杯の脚部で2か所に方形の透かし孔をもつ。72は甕の胴



56~59 第5-1面出土遺物
56;溝12 57;溝11

図56 97 - 1トレンチ第5 - 1面 出土遺物

部である。73は平瓶で外面に横方向のカキメを施す。74・75は壺である。74は壺の口縁部で全体に自然釉が付着する。75は壺で胴部外面下半に黒斑が残る。76は長頸壺の頸筒部で口縁部はラッパ状に開いており、内面に縦方向のヘラミガキを施す。筒部外面には自然釉が付着する。77は溝13より出土した甕の頸部である。78は土師器の壺で内面に縦方向のヘラミガキを施す。79は土師器の椀で内面・外面に横方向のヘラミガキを施す。80は和泉型の瓦器椀で外面にはヘラミガキと指頭圧痕が、内面にはヘラミガキを施す。81は備前窯の鉢で外面の胴部と内面の底部に自然釉が付着する。

第5 - 2a 面出土遺物 (図58) 82~93は溝14より出土した。82~90は須恵器である。82は杯蓋である。83・84は杯身で、84には篋記号をもつ。85は台付椀の杯部である。86・87は高杯である。86は脚部で口縁端部は面を有する。87は脚部の2か所に透かし孔をもち、杯底部は仕上げナデの後、指押さえ調整を施す。88は甕の口縁部で外面はカキメ、内面はタタキメが残る。外面の口縁端部から胴部にかけて所々

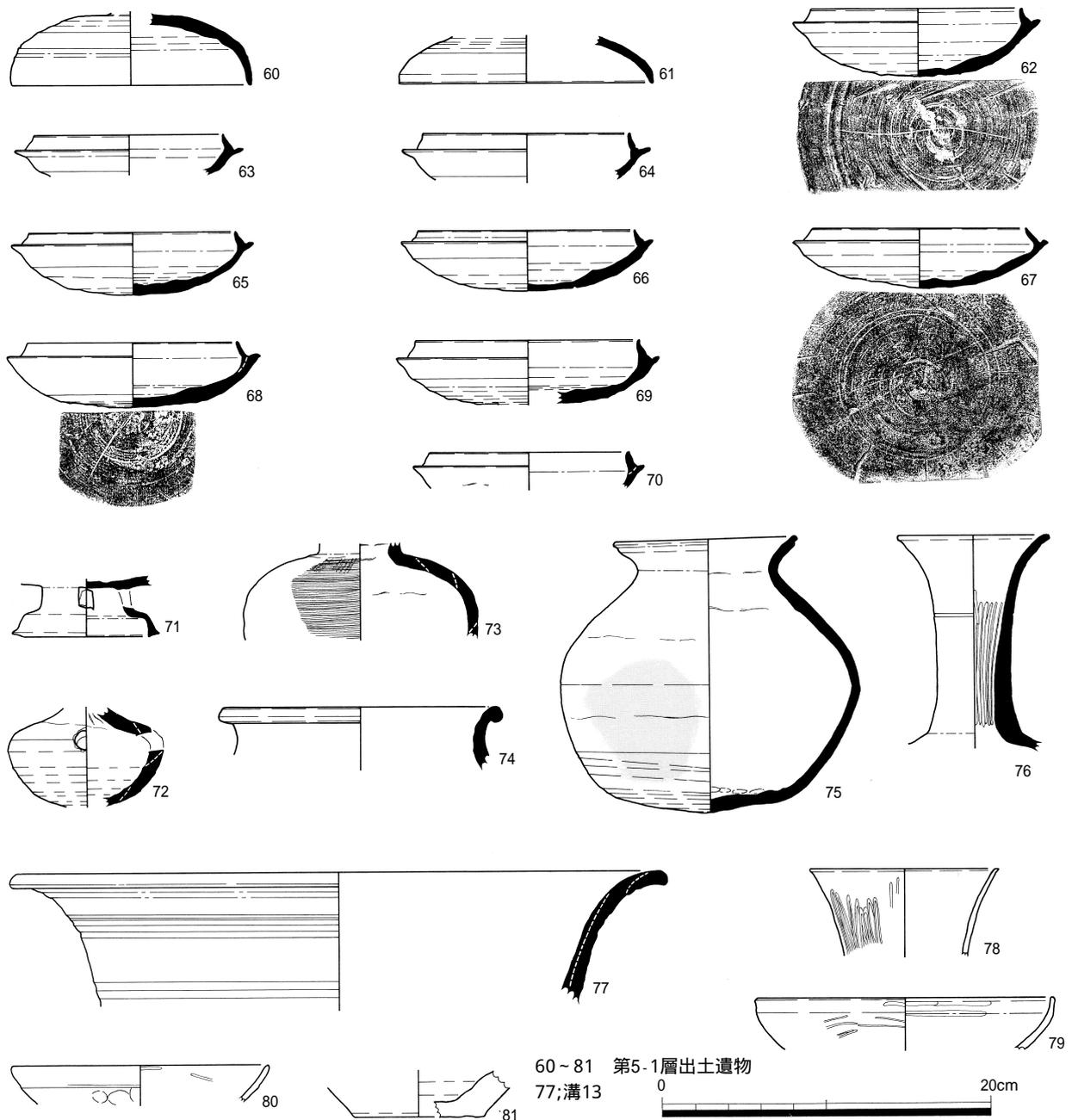
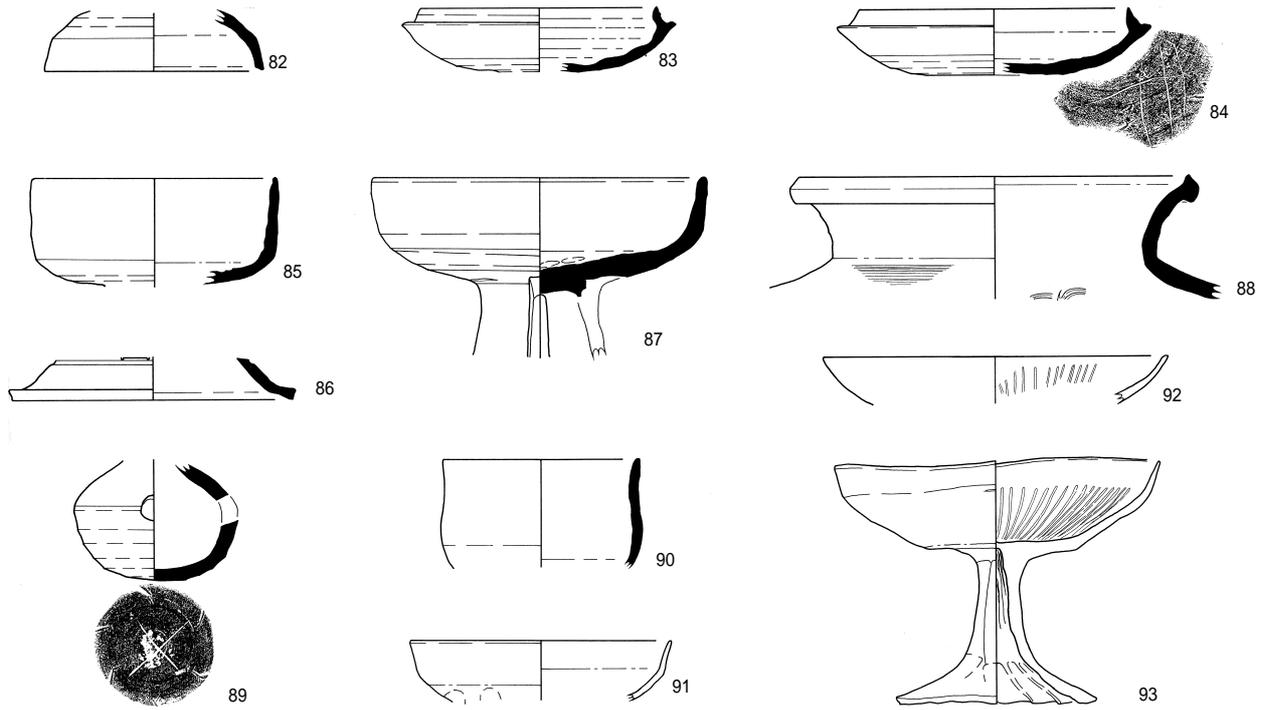
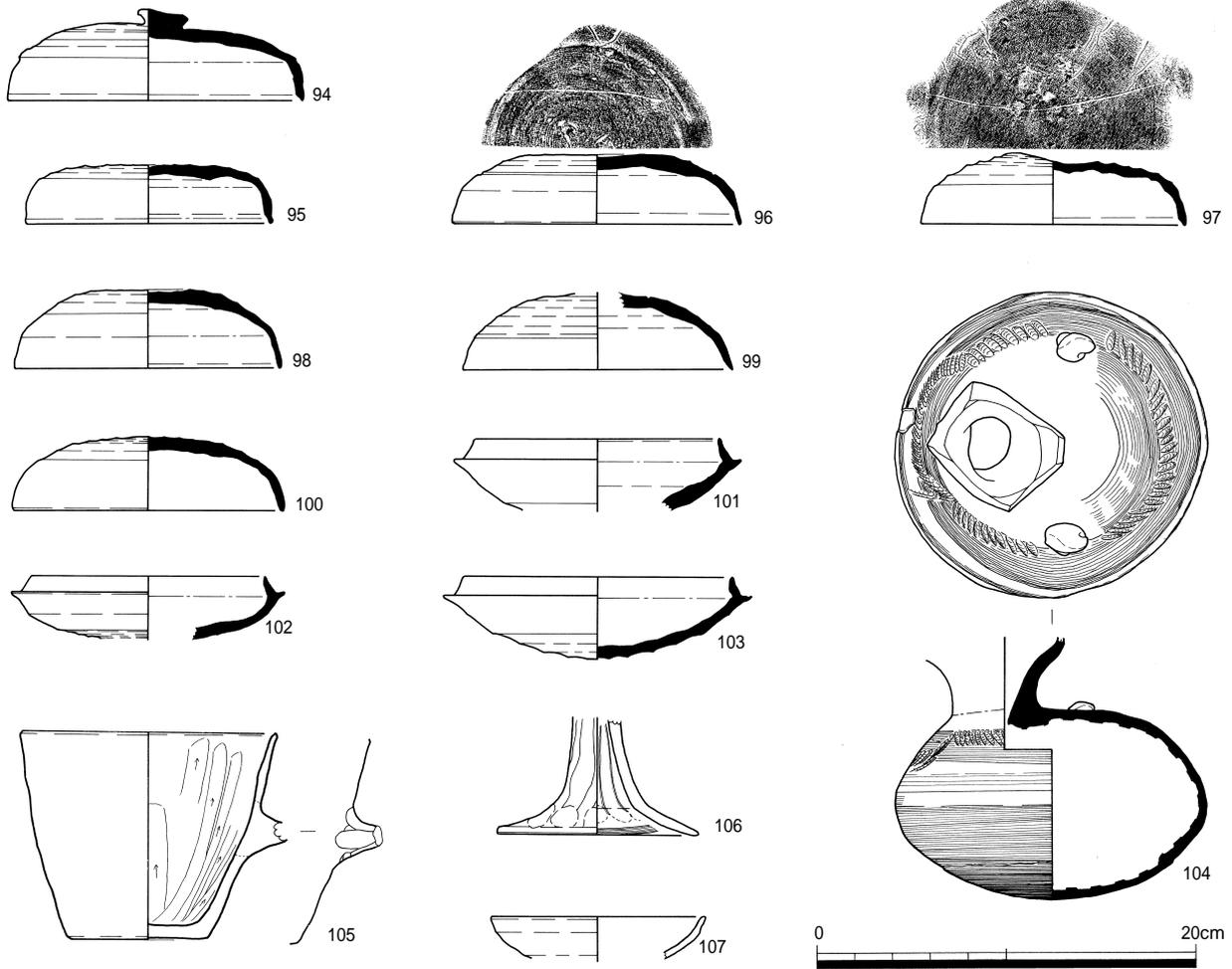


図57 97 - 1 トレンチ第5 - 1層 出土遺物



82-93 第5-2a面 溝14 出土遺物



94-107 第5-2a層 出土遺物

図58 97-1 トレンチ第5-2a面~第5-2a層 出土遺物

自然釉が付着する。89は甗で、外面の底部に篋記号を施す。90は提瓶で内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。91～93は土師器である。91は椀で外面の下部に指頭圧痕が残る。92は杯で内面に正放射1段の暗紋をもつ。93は高杯で外面の脚部は横方向のハケメ、内面の杯部は正放射状1段の暗紋をもち、

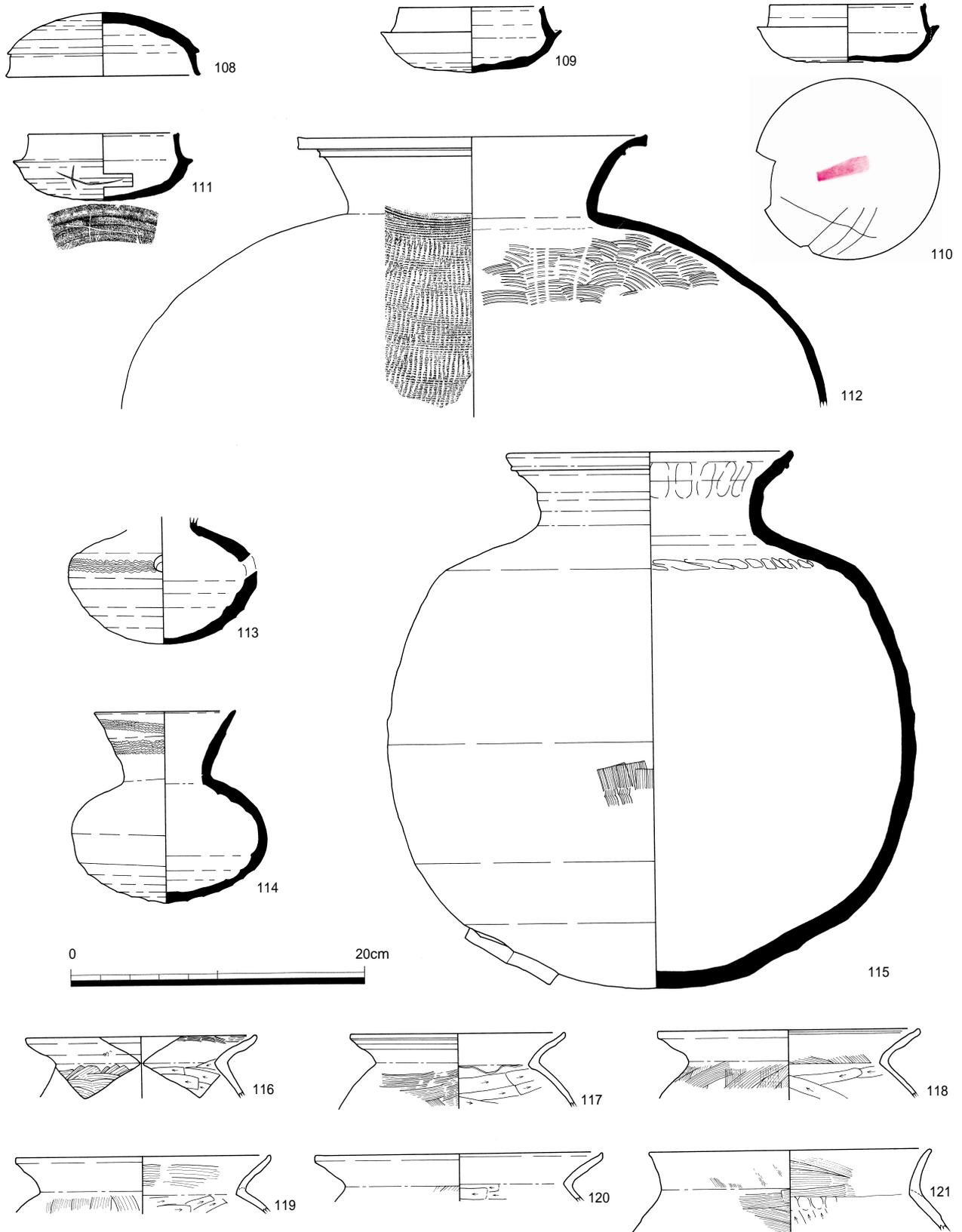


図59 97 - 1トレンチ第5 - 2b層 出土遺物(1)

筒部はしぼり痕がみられ、脚部には縦方向の強いナデを施す。

第5 - 2a 層出土遺物 (図58) 94~104は須恵器である。94は高杯の蓋で上端面がやや窪む円柱状のつまみを有する。95~100は杯蓋で、96・97は外面の底部に篋記号をもつ。101~103は杯身である。104は平瓶であるが、つくりは極めて提瓶と似ている。体部の成形後、底部を円形の粘土板で塞ぎ、外面にカキメを施す。次に頸部および、鉤型の把手を2か所体部上方に取り付けた後、肩部に列点紋を施す。列点紋は反時計回りに巡らすが、頸部の取り付く箇所は時計回りに施紋する。105・106は土師器である。105は把手付鉢である。内面は横方向のナデの後、下から上方向のヘラケズリを施す。106は高杯の脚部で外面は筒部をヘラケズリした後、脚裾部を指頭圧痕で仕上げる。107は和泉型の瓦器椀である。

第5 - 2b 層出土遺物 (図59~61) 108~115は須恵器である。108は杯蓋である。109~111は杯身で、110は底部外面に篋記号と1条の朱がみられる。111は篋記号をもつ。112は甕で外面にタタキメ、内面に同心円紋の当て具痕を残す。113は甕の胴部で、1条の波状紋が巡る。114は中型の直口壺で、頸部に2条の波状紋が巡り、肩部には自然釉が付着する。115は甕で内面の肩部に煤溜まりがある。外面は自然釉がみられる。116~120はいわゆる庄内甕である。116は外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整である。117は胴部外面にハケメ、内面はヘラケズリで調整し口縁部と胴部の境には接合痕が残る。118は外面の頸部にハケメ、胴部にヘラケズリを施す。119は外面の胴部にハケメ、内面の頸部にハケメ、胴部にヘラケズリを施す。120は外面の胴部に少しハケメが残り、内面の胴部はヘラケズリを施す。121は外面はハケメ、内面は頸部をハケメ、胴部をヘラケズリで調整し、頸部と胴部のジョイント部分に指頭圧痕が残る。122・123は布留甕である。122は不明瞭ではあるが外面の胴部に縦方向のハケメが、内面は横方向のハケメを残す。123は二重口縁の甕で口縁端部は面をもち、外面は全体に縦方向のハケメで肩部分は縦方向の後、横方向のハケメを施し、内面は肩部に指頭圧痕が、胴部は中央部に横方向のヘラケズリが、下部は下から上への縦方向のヘラケズリを施す。124~143は土師器である。124は椀で火を受けて外面がはぜている。口縁部は外に屈曲して立ち上がり、丸く収める。125~128は高杯である。125は外面の筒部はナデ、内面の脚部には横方向のハケメを施す。126は外面に縦方向のハケメ、内面の杯部には横方向のハケメ、脚部は縦方向のヘラケズリを施す。内外面共に朱が残る。127は脚部で、外面はナデ、内面の筒部にはしぼり痕、脚部には指押さえが残る。128は脚部三方向の透かし孔をもち、内面の筒部にはしぼり痕、口縁端部には黒斑がみられる。129は土師器の壺で口縁端部は欠損する。外面の口縁部には縦方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラミガキがあり、黒斑が残る。内部は接合痕が残り、底部には工具痕が認められる。130は甕で、胴部外面はハケメ、頸部はヨコナデを施す。底部は欠損する。131は小型の丸底壺で外面は横方向のナデで下部は指頭圧痕が残り、底部には靱痕が残る。内面は頸部から体部上半部にかけて横方向のハケメ、下半部はヘラケズリを施す。132は土師器の小型の丸底壺の口縁部で内彎して立ち上がり丸く収める。133は壺の口縁部でやや内彎して立ち上がり、内面は下から上方向のヘラケズリを施す。134は土師器の壺で外反する口縁部をもち、端部は面を有する。135は土師器の壺で外反する口縁部をもつ。136は土師器の壺で外反する口縁部をもち外面はハケメ、内面は指押さえの後、横方向のハケメを施す。137は壺で胴部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリを施す。138は甕で口縁部は内外面共、横方向のナデ、胴部は外面をハケメ、内面はヘラケズリ調整を行う。139は平底の甕で外面は縦方向のハケメ、内面は頸部に横方向のハケメ、胴部はヘラケズリを施す。140は甕で外反する口縁部をもち、外面はハケメ、内面は横方向のハケメ、胴部内面は縦方向のハケメを施す。141は甕で外反する口縁部をもち、端部をつまみ上げる。142は甕で外反して立ち

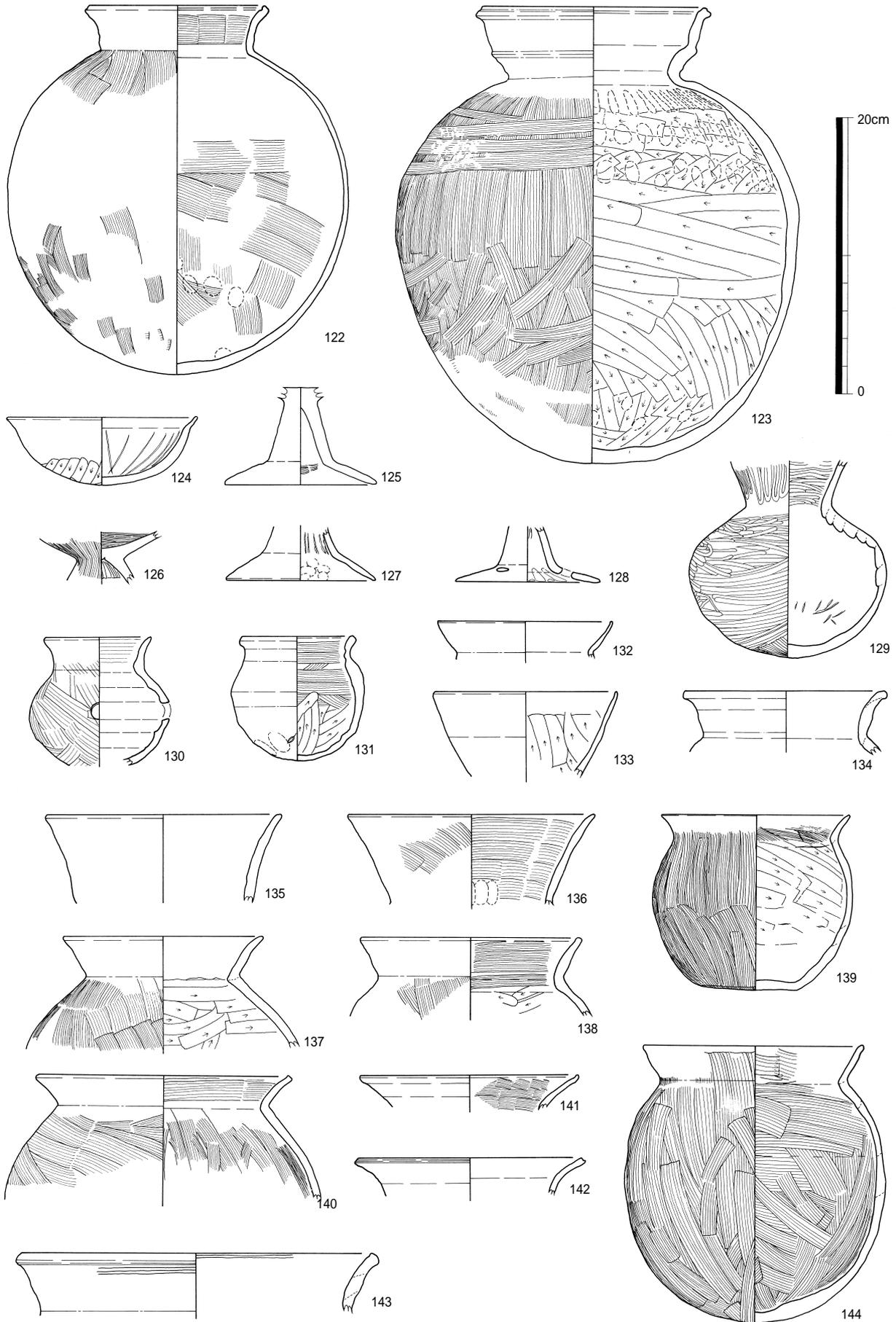


図60 97-1トレンチ第5-2b層 出土遺物(2)

上がり、端部は面をもち、沈線状のヘラミガキを施す。143は甕口縁部で、端部に面をもち。144は甕で内彎する口縁部をもち、端部以外はハケメによる調整を行う。145～149は堰から出土したものである。145～147は土師器の高杯である。145は外面は摩滅により調整不明、内面は横方向のハケメを施す。杯部と脚部の上に接合痕が残る。146は立ち上がりは直線的で、端部はやや外反し丸く収める。杯部外面はハケメの後横方向のナデ、口縁端部と内面は横方向のナデを施す。147は内彎しながら立ち上がり、大きく外反する端部をもち。杯部と筒部とのジョイント部に指おさえ、見込み部にヘラミガキを施す。148は無頸壺である。149は布留甕で外面は肩部に横方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリで底部から胴部にかけて指頭圧痕が残る。150～165は弥生土器である。150～154は高杯である。150は椀形の杯

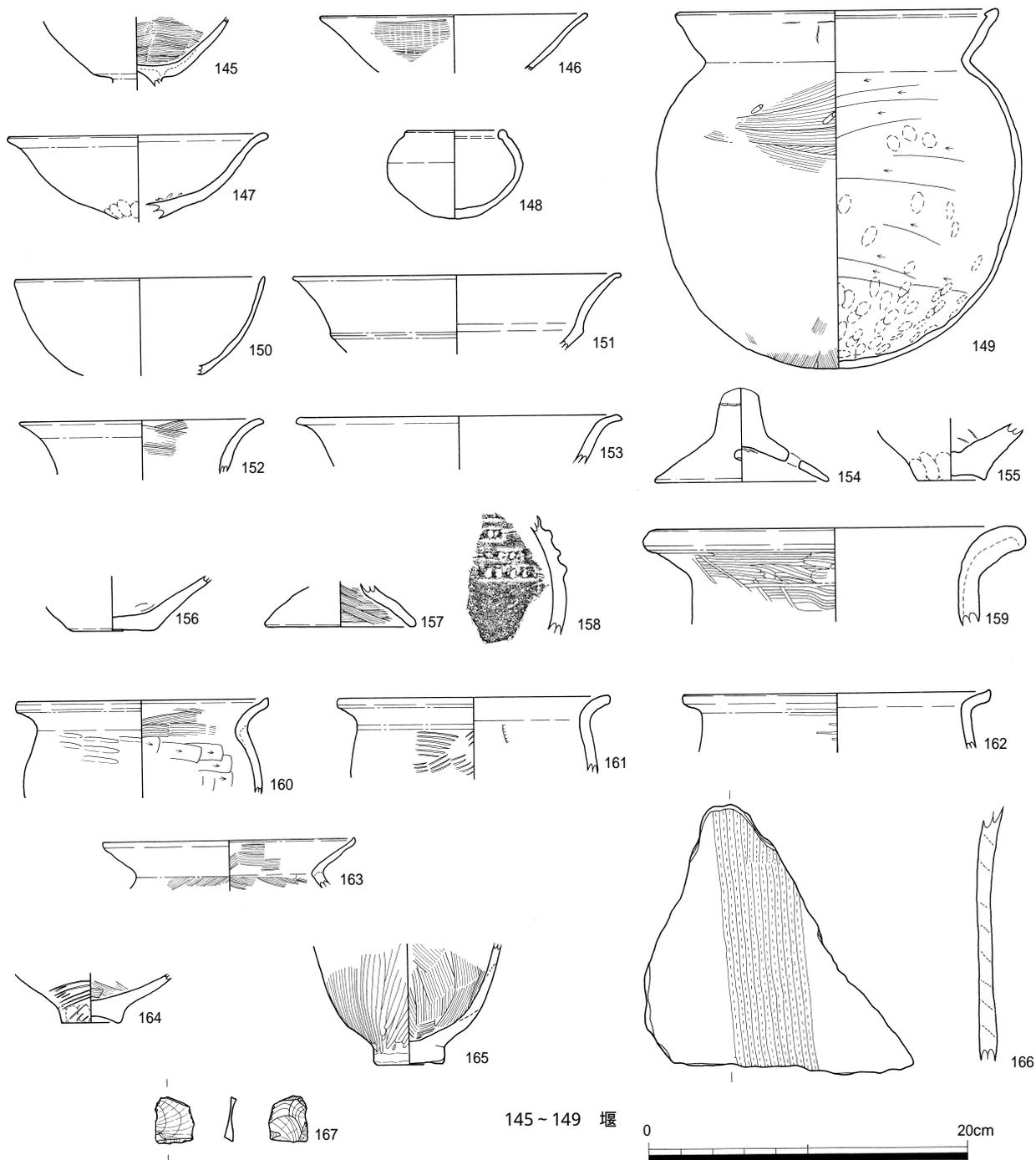


図61 97-1トレンチ第5-2b層 出土遺物(3)

部をもち、下部外面には煤が付着する。151は杯部と口縁部との境に稜をもち、立ち上がりは外反する。生駒西麓産の土器である。152は大きく外反し、外面はハケメの後ナデ、内面はハケメを施す。生駒西麓産の土器である。153は上外方に立ち上がり、端部は大きく外反する。154は筒部に粘土を残すタイプで、脚部に4か所の穿孔がみられる。155・156は壺の底部で、155は外面に指頭圧痕が残り、内面にハケメを施す。生駒西麓産の土器である。157は台付壺の脚部で、内面にハケメを施す。生駒西麓産の土器である。158は壺で刻み目のある断面三角形の突帯をもち。159は壺で、立ち上がりは直線的で口縁端部は外反し肥厚する。外面は密にヘラミガキを施す。160は甕で口縁端部は上方につまみ上げる。胴部外面にはタタキメ、口縁部は内面ハケメの後、ナデで仕上げる。横方向のヘラケズリを施す。肩部は横方向のヘラケズリを施す。161は甕で外面にタタキが残る。生駒西麓産の土器である。162は甕でやや内傾する胴部をもち、口縁部は外反して上につまみ上げ、面を有する。外面にはヘラミガキを施す。163は甕で口縁部は大きく開く。内外面共にハケメ調整を施す。164は壺で外面はタタキメ、高台部には指頭圧痕、底部はナデを施し、内面はハケメを施す。165は壺で外面はヘラミガキ、内面は縦方向のハケメを施し、下部に黒斑が残る。166は縄紋土器で縦方向の貝殻条痕紋を施す。167はサヌカイト剥片で、断面長方形を呈する。

その他の出土遺物 (図62) 168は西辺側溝の1～5-2b層より出土した染付磁器の碗の蓋である。169は西辺側溝の1～5-2層より出土した染付磁器の丸碗で全体に施釉される。170は道路状遺構の1～3層より出土した染付磁器の碗で内面に砂目積み痕が残る。171は西辺側溝の1～5-2層より出土した染付磁器の皿である。172は1～5-2層より出土した染付磁器の蕎麦猪口である。173は南辺側溝の1～3層より出土した唐津窯の碗の底部である。174は南辺側溝の1～4-2層より出土した須恵器杯蓋である。175は中央側溝の4-2～5-2層より出土した須恵器の無蓋高杯の杯部である。176は中央側溝の4-2～5-2層から出土した須恵器の平瓶の口縁部で自然釉が付着する。177は南辺側溝の1～4-2層より出土した須恵器の盤で全体に自然釉が残る。178は西辺側溝の1～5-2層より出土した須恵器の甕で口縁端部は下方に肥厚する。179は南辺側溝の1～4-2層より出土した土師器の壺である。180は南辺側溝より出土の土師器の甕で頸部外面にヘラミガキを施す。181は南辺側溝の1～4-2層より出土した土師器の碗の底部で高台が付く。

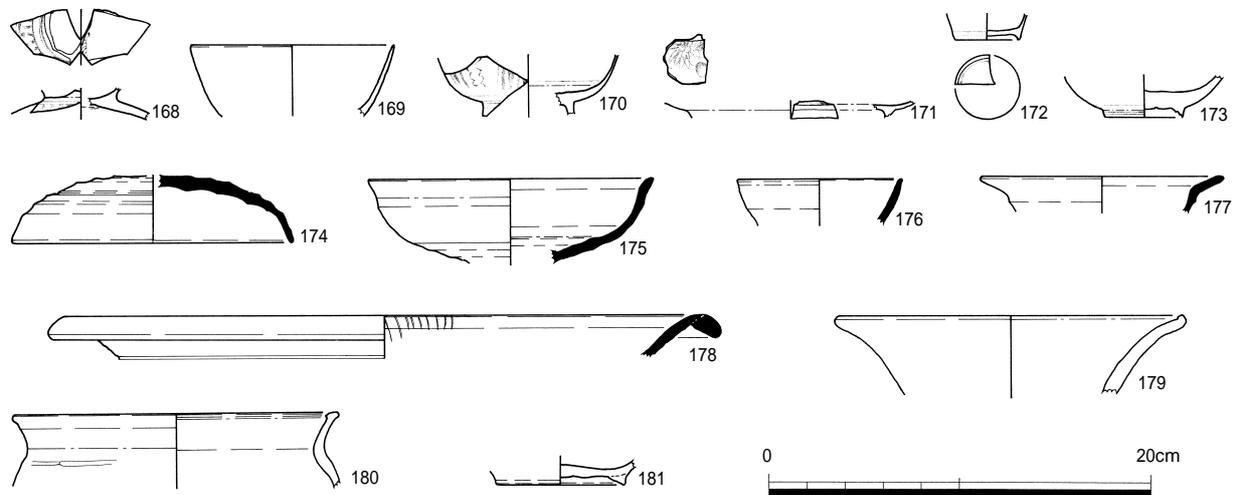


図62 97-1トレンチその他 出土遺物

V. まとめ

今回の調査成果を時代を追って述べる。掘削限界から第9面までは、何枚かの土壌化層とその間に堆積する細砂やシルト層の自然堆積層が交互に堆積する。若干の凹凸が認められるものの、ほぼ水平に堆積する。これは河内潟の陸化が進む過程での沖積作用が盛んに行われた結果である。

これらの土壌化層の上面は、花粉分析やプラントオパール分析などの結果から、やや乾燥した状態であったと考えられる。但し、数度にわたる自然堆積層が示すように、地表面として安定した状態であった反面、洪水の影響を受けて堆積作用を繰り返すような環境にあった。次に第8面までは自然堆積層が厚く堆積しており、明確な土壌化層の堆積は確認できなかった。また、炭酸カルシウム結核の集積層が幾層も認められる。一方、第8面上面には乾痕状の凹凸が認められることから、湿地状堆積した第8層（シルト層）が環境の変化によって一時期地表面となって乾燥したものと考えられる。第8層から第7層までは細砂とシルト層の堆積がみられることから、再び湿地状になったところへ洪水砂が堆積して土壌化層を形成する。第7層の土壌化層は炭化物を多く含んだ層で、比較的安定した地表面であったことが窺われる。そして、プラントオパール分析の結果、イネ科植物のプラントオパールが大量に検出されたことから、水田として利用された可能性が高い。しかし、畦畔や水路など、水田遺構であったことを確定できる遺構が検出されなかったことなど疑問は残る。さらに、第9層からこの第7面下層までは明確な遺構の検出も一点の遺物の出土もなかった。以上のように、本調査区内では第9層から第7面にいたるまでは積極的に利用されていなかった可能性が高い。第7面から第6面まではシルト層の堆積がみられるが、土壌化層は確認できなかった。これは次の段階で本調査区を旧河川の河道となったため、削平を受けたものと考えられる。

第6面は古墳時代中期に埋没する旧河川の河床となり、環境が一変する。95年度の調査でも検出された堰の続きを確認した。今回検出された堰は2基である。いずれも砂洲状に堆積した砂の上に構築されており、その平面形は「T」字状を呈し、堰1は堰2の補助的な機能を持つと考えられる。いずれの堰も構造上、合掌型の堰と呼ばれるものである。堰2の長さは約20mを測るが、調査区外に延びる。そして、堰2の方向や構造などから、95-8・95-9トレンチで検出された堰の続きと考えられ、その全長は40mを越える。

旧河川は洪水砂の堆積状況から南から北へと流れていたと考えられ、堰2は南側に攻撃面をもち、西から東に向かって直線的に延び、調査区の中央付近で南に屈曲して弧を描く。その屈曲する部分の後ろ側には補強のためにもう一列堰を築くが、97-1トレンチで検出された部分は洪水による破壊を受ける。

堰の構造は、約1m間隔に基礎杭を打ち込み、その頭部にほぞ穴を穿った二股木を差し込み斜面を形成する。その斜面上に3～4段の横木を通して補助杭で固定した後、縦杭を斜面に0.3～0.5m間隔に並べ、最後に草敷を行って仕上げる。高さは約0.8mを測る。この堰の築造年代だが、堰に引っ掛けて出土した遺物から、5世紀中葉に充てることができる。このような合掌型の堰は弥生時代からその工法がみられるが、二股木を使用したものや、その構造が良好に残っているものについては例が少なく、今回の調査成果は古墳時代における土木技術を探るうえで重要な資料といえる。しかし、今回の調査でも旧河川の川岸の検出に至らなかったため、堰そのものの規模やその性格などについて解明することができなかった。ただ、立地や形態から後世にみられる彎曲斜め堰に類似する。

旧河川は厚さ約2.1～3.4mの洪水砂によって埋没する。この洪水砂の堆積は3時期に大別すること

ができる。まず、第6面のシルト層上面に砂洲状に堆積する。先述したように、この砂洲状の洪水砂の堆積を利用して堰が構築される。次に、この堰の機能を失わせるとともに、河川そのものの機能も失わせてしまう洪水砂の堆積が認められる。ただ、この洪水砂は一気に堆積したものではなく、何度かの洪水によって河道を移動させながら河川を埋没させていったものである。最後に、洪水砂の堆積によって旧河川は機能を失ってしまい、堆積した洪水砂の鞍部をはしる小さな流れや凹地に堆積したシルト層が認められる。このシルト層の中からは6世紀前半代の遺物が出土したが、明確な遺構は検出されなかった。そして、この厚い洪水砂の堆積によって、本調査区内は安定した微高地となり、その上面である5-1面では方形の掘方をもつ2×2間の掘立柱建物を1棟検出した。

第4-2面から上層から検出された遺構は道路状遺構と島畑である。つまり、中世になると耕作地となる。島畑は道路状遺構に並行して軸を有するものである。これは、現在の地図などにもみられるように、道路の東側の東西約900m、南北約350mの範囲は条里水田の軸を北東-南西方向にとっており、それに準じている。即ち、この一帯における条里の軸が道路状遺構に規制されていることから、今回検出された道路状遺構が重要なルートとして認識されていたと考えられる。そして、本調査区の北西隅をはしる道路状遺構は北東-南西方向にはしる。この道路状遺構は95-8・95-9トレンチで検出された道路状遺構の続きで、久宝寺村と竜華村を繋ぐものであるが、竜華操車場の造成により現在の府道に付け替えられた。出土遺物などからこの道路状遺構の初現は鎌倉時代までは遡る。

このように、本調査区における歴史的な土地利用は、河内平野にもたらされた沖積作用による環境変化に大きく左右されるものであることが分かる。

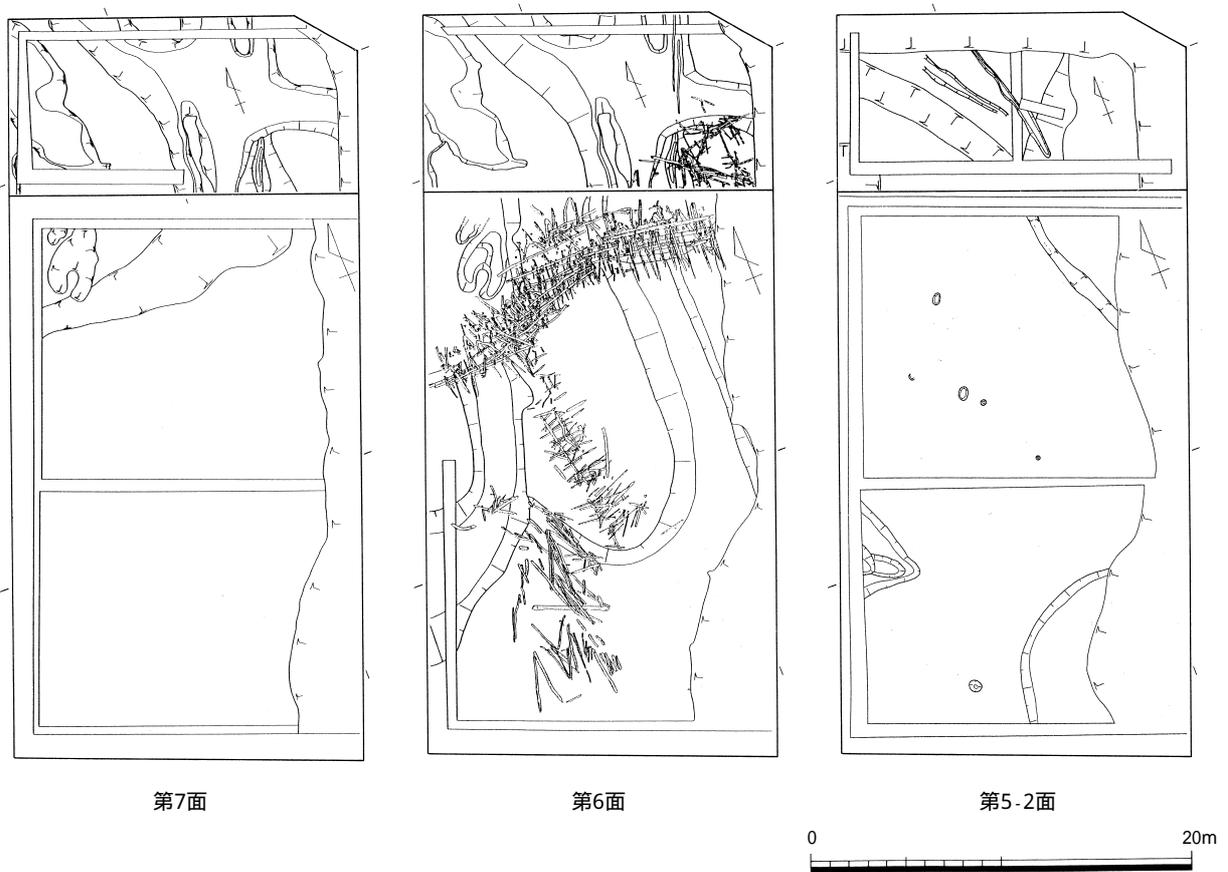
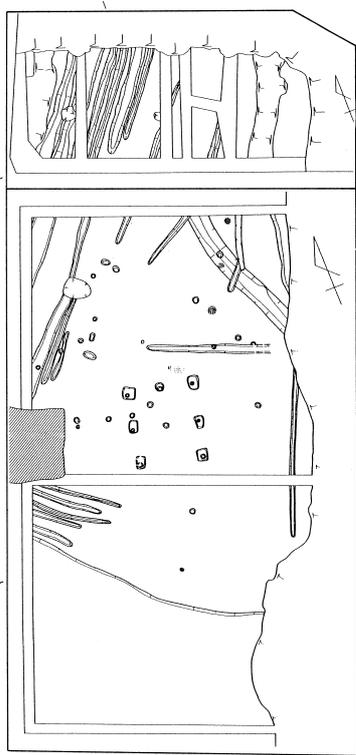
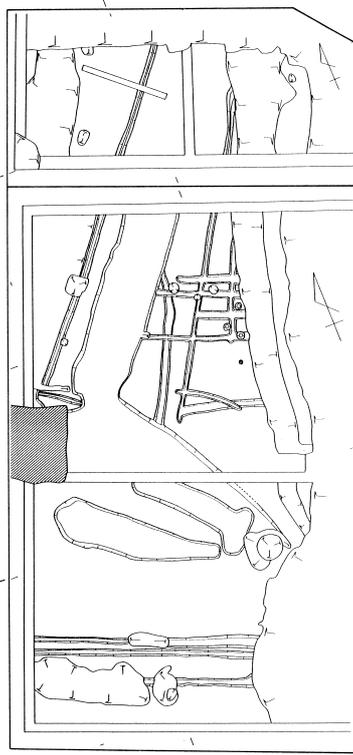


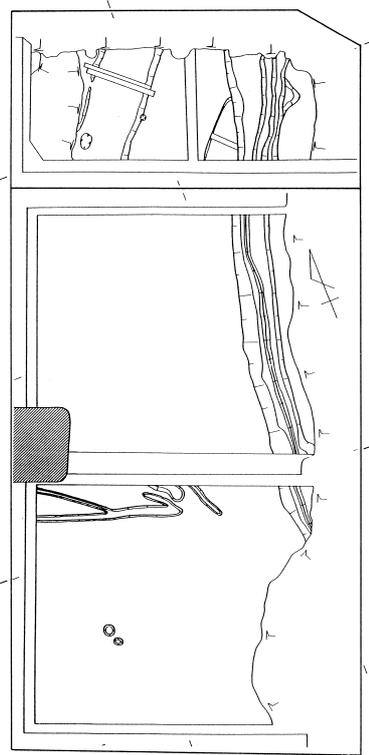
図63 96-1・97-1トレンチ 合成遺構変遷図(1)



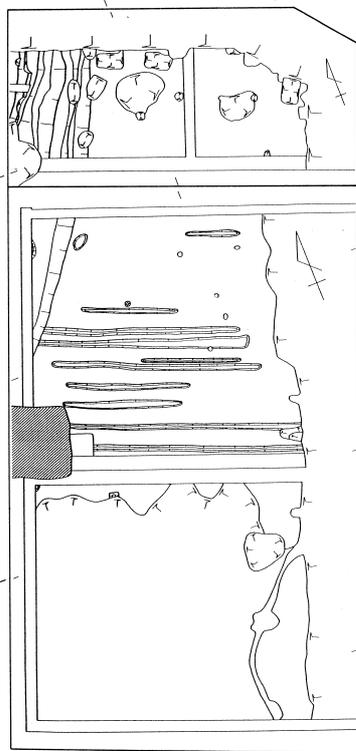
第5-1面



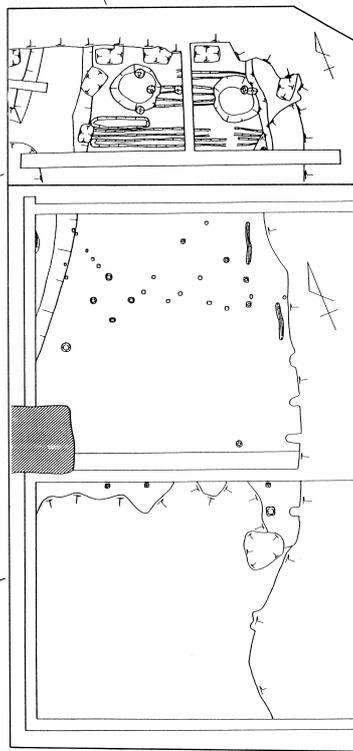
第4-2面



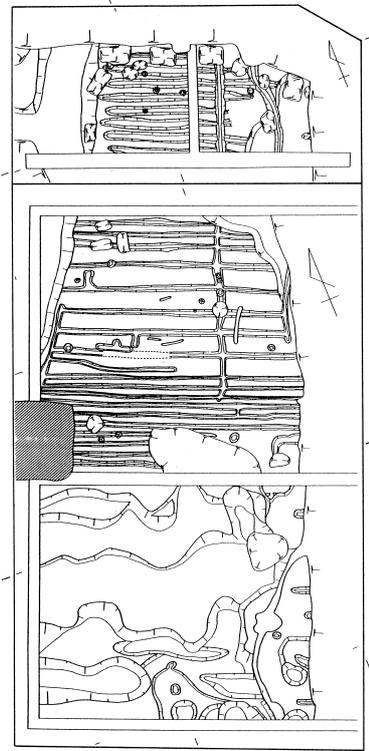
第4-1面



第3面



第2面



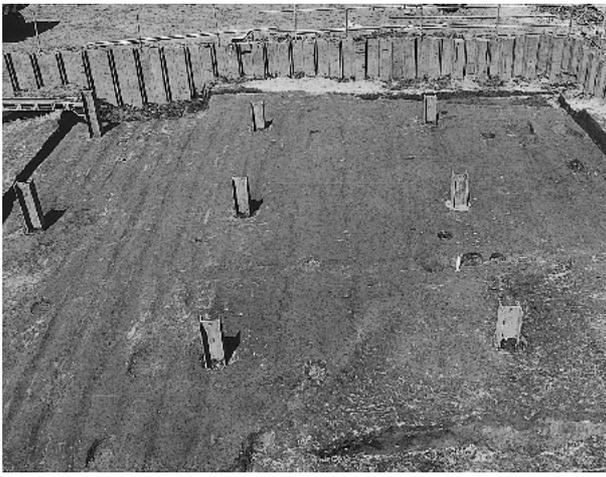
第1面



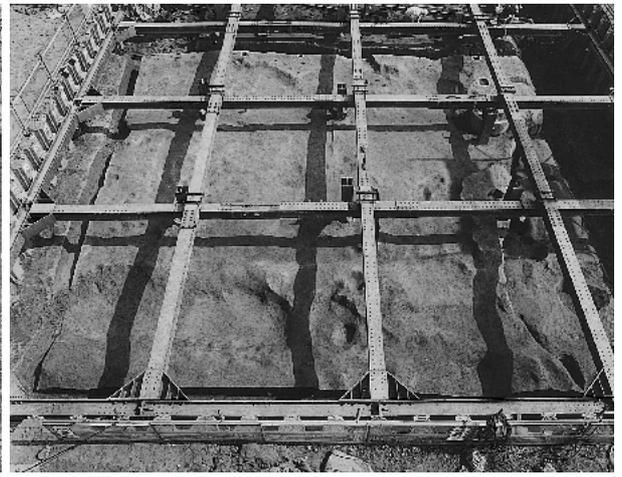
図64 96 - 1・97 - 1 トレンチ 合成遺構変遷図(2)



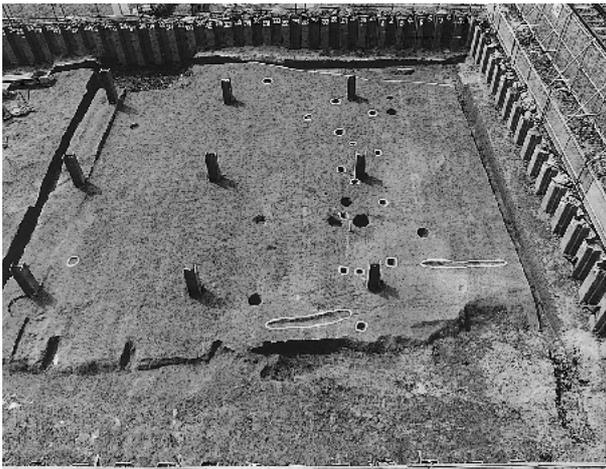
版



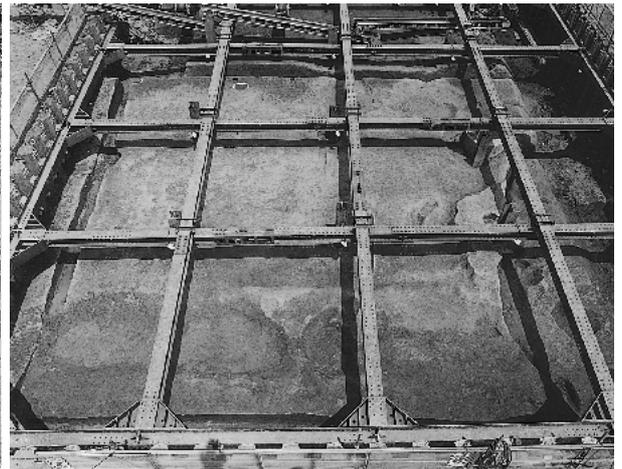
左上 第1面 北半部



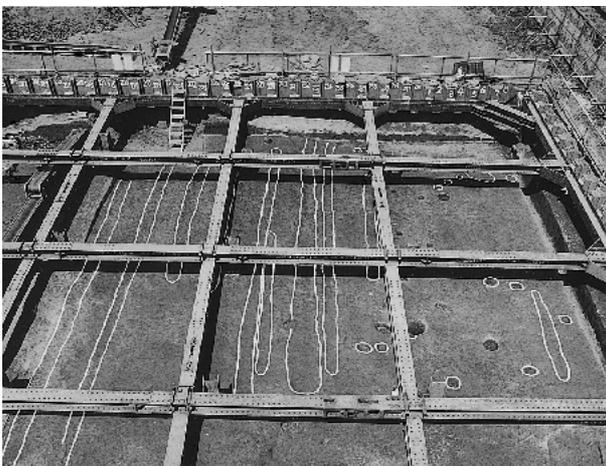
右上 第2面 南半部



左下 第2面 北半部



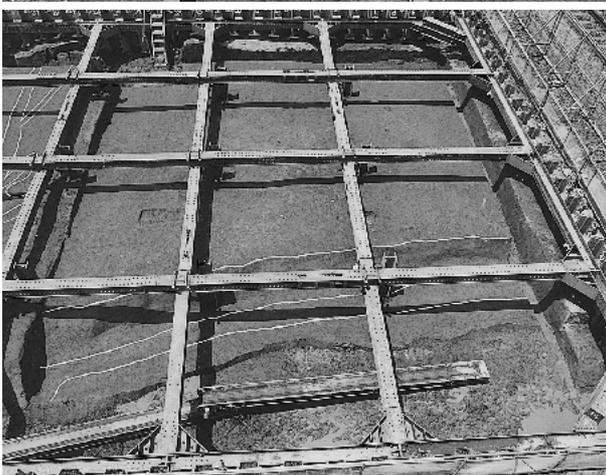
右下 第3面 南半部



左上 第3面 北半部



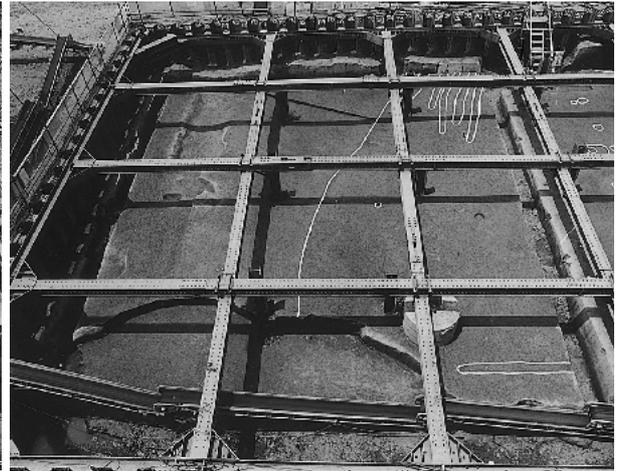
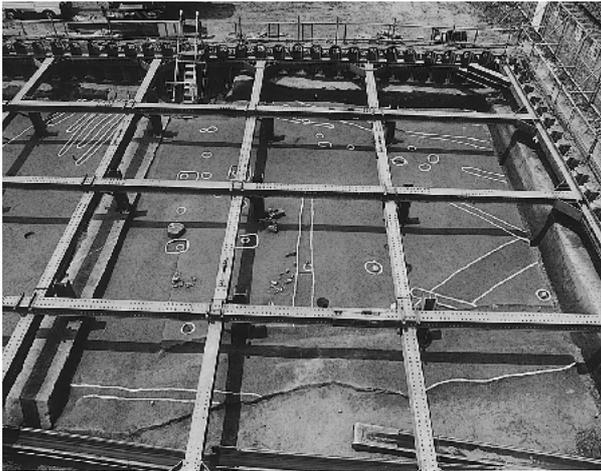
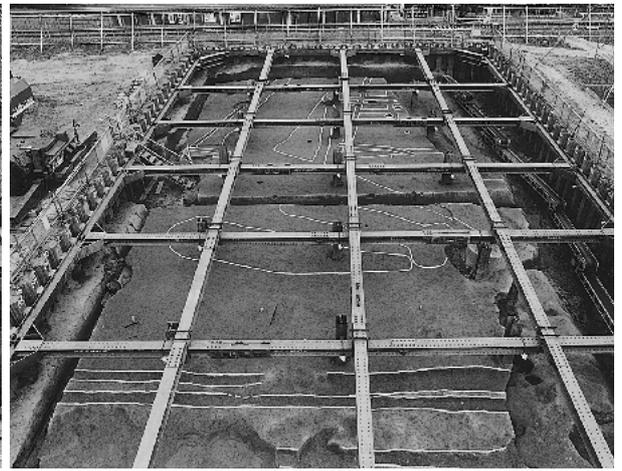
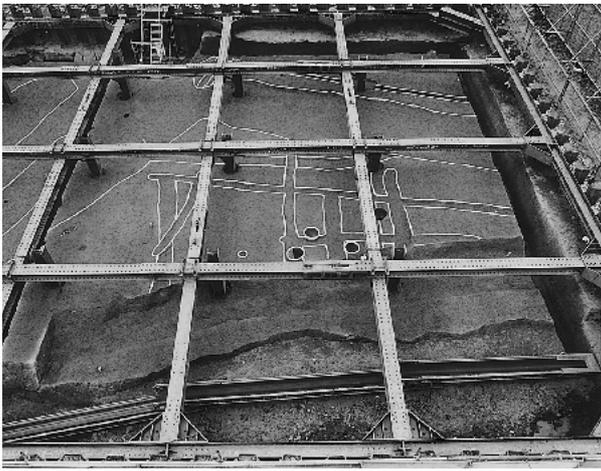
右上 第4-1面 全景



左下 第4-1面 北半部



右下 第4-2面 出土甃

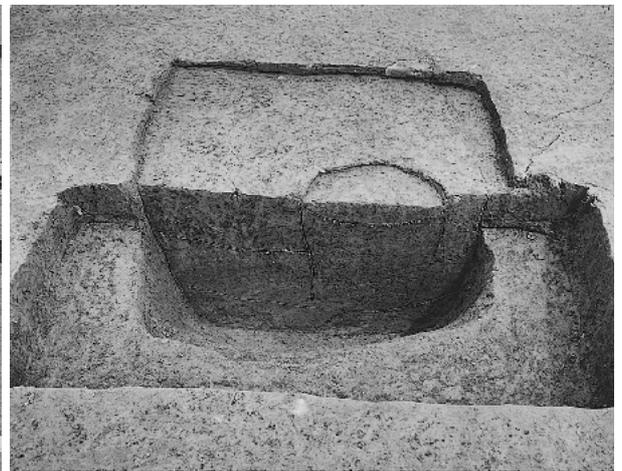
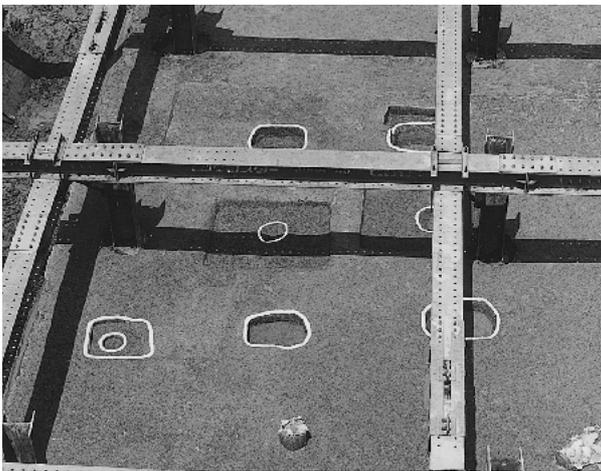
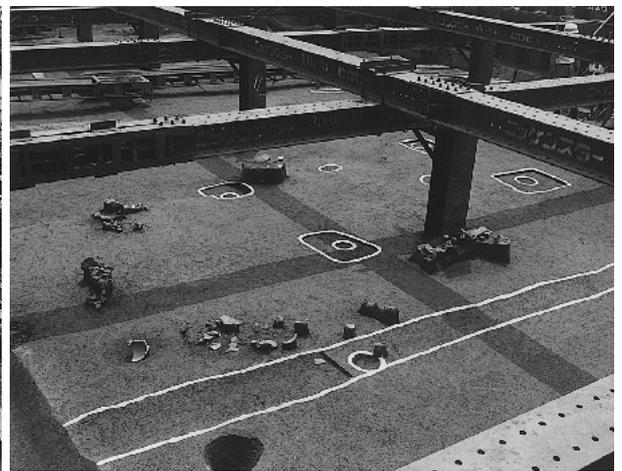
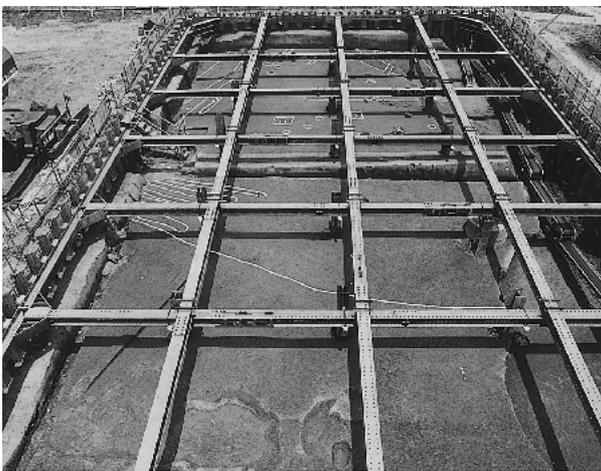


左上 第4-2面 北半部

左下 第5-1面 北半部

右上 第4-2面 全景

右下 第5-1面 南半部



左上 第5-1面 全景

左下 第5-1面 掘立柱建物 1

右上 第5-1面 土器群

右下 第5-1面 柱穴断面

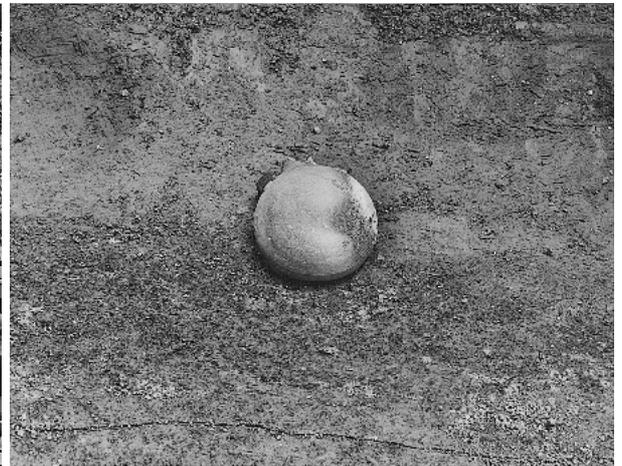
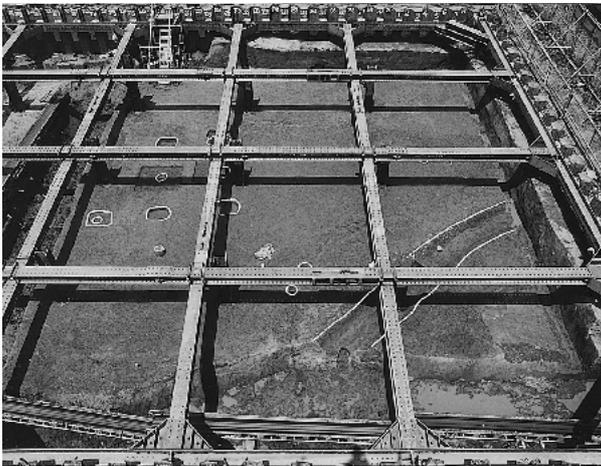


左上 第5-2面 土器群17

左下 第5-1面 ピット14

右上 第5-1面 土器10

右下 第5-1面 ピット20

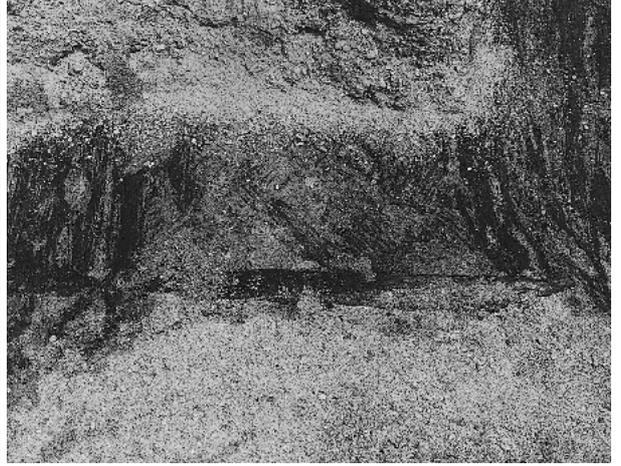


左上 第5-1面 北半部

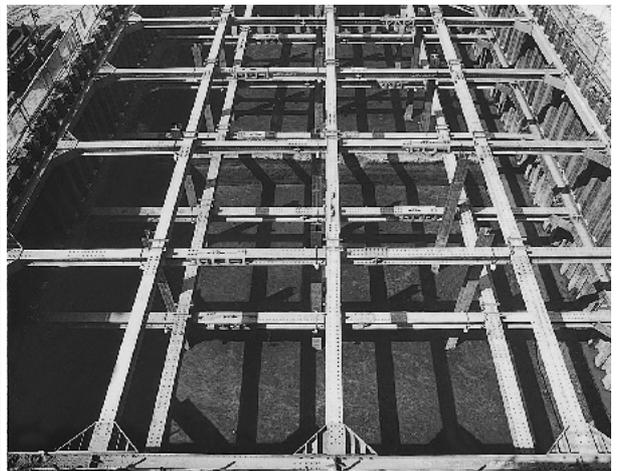
左下 第6面 全景

右上 第5-1面 土器12

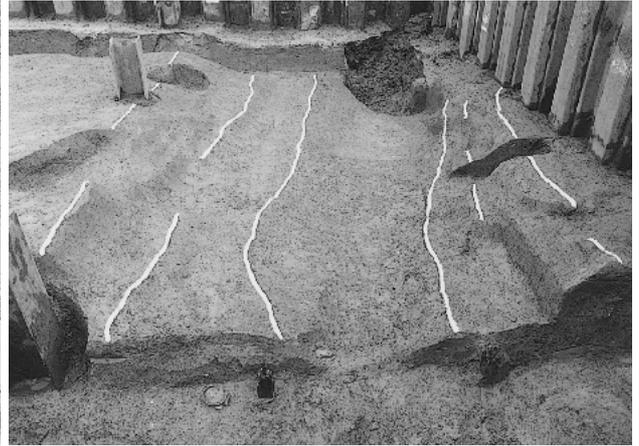
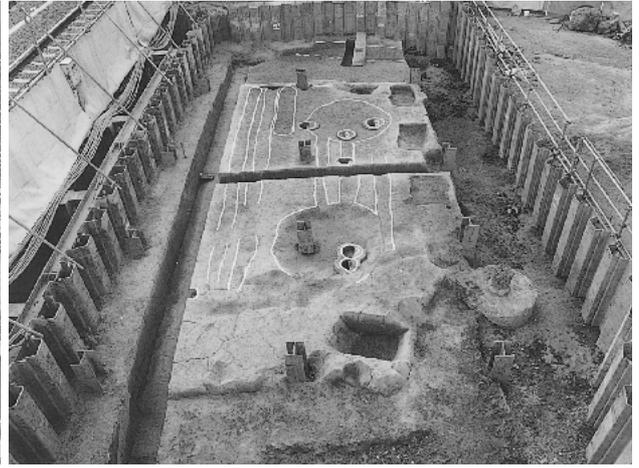
右下 第6面 堰1・2 検出状況



左上 第6面 堰1・2 検出状況 左下 第6面 堰2 草敷検出状況 右上 第6面 堰1 右下 第6面 堰2 草敷



左上 第6面 堰2 草敷除去後 左下 第6面 堰2 二股木接合部 右上 第6面 堰2 二股木出土状況 右下 第7面 全景

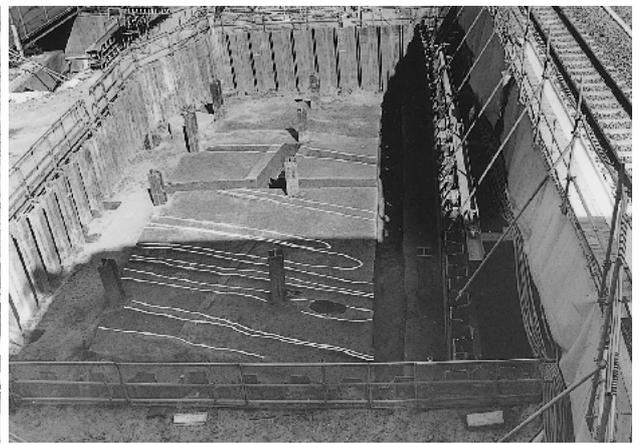
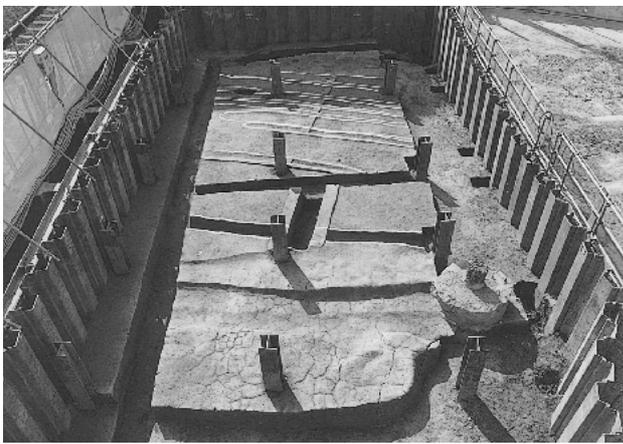
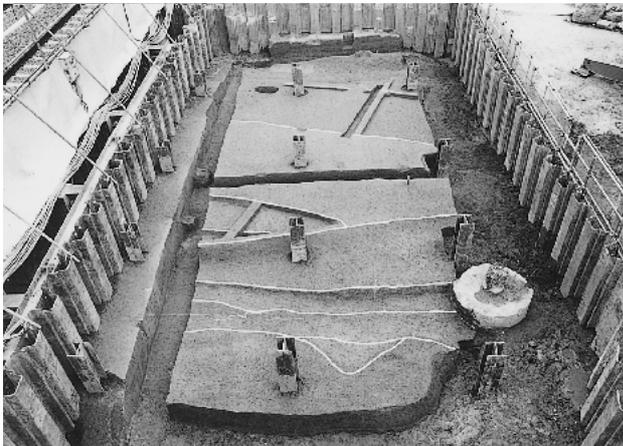


左上 第1面 全景

左下 第3面 全景

右上 第2面 全景

右下 第3面 島畑・道路間

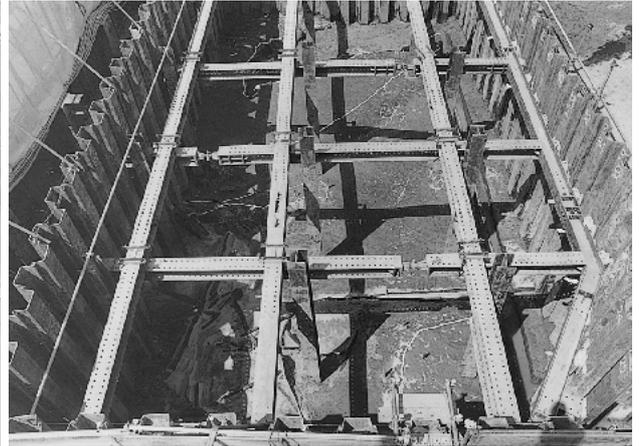
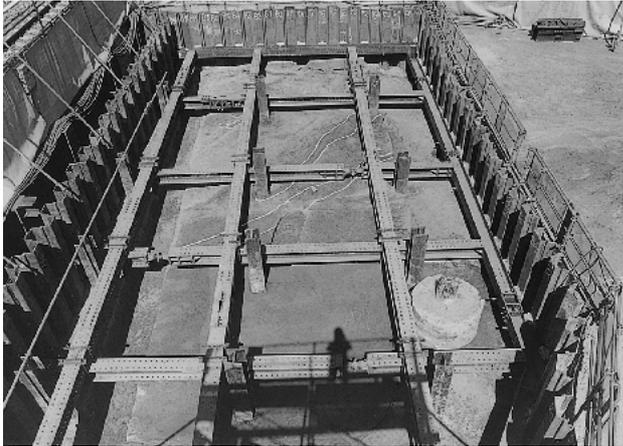
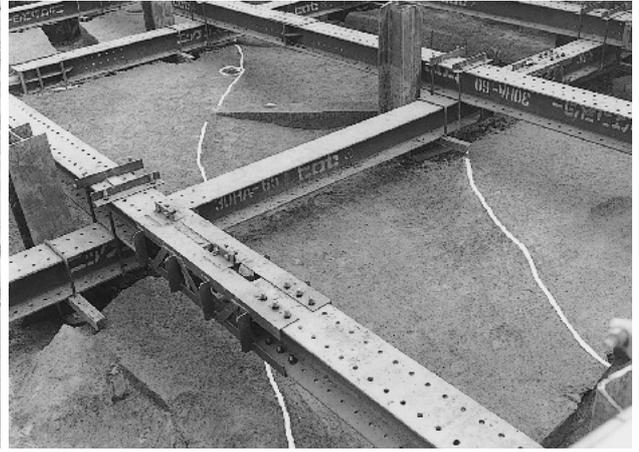
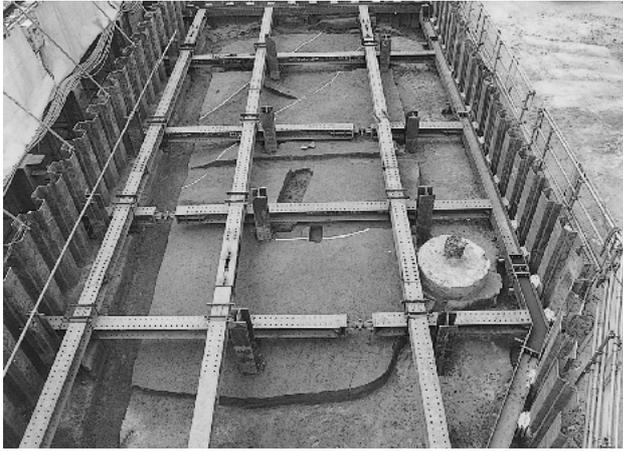


左上 第4-1面 全景

左下 第5-1面 全景

右上 第4-2面 全景

右下 第5-1面 全景

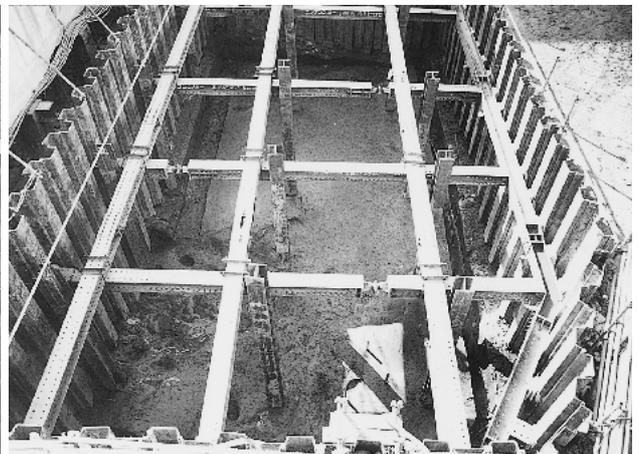
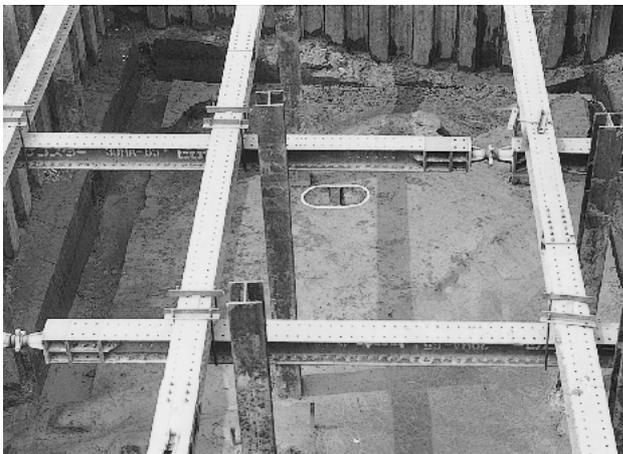
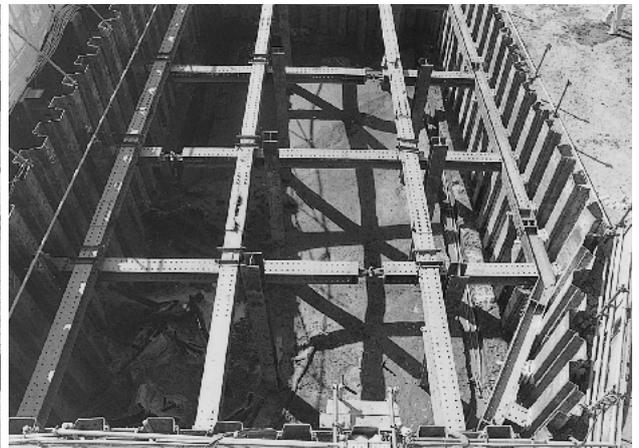


左上 第5-2a面 全景

左下 第5-2b面 全景

右上 第5-2a面 溝 14

右下 第6面 全景

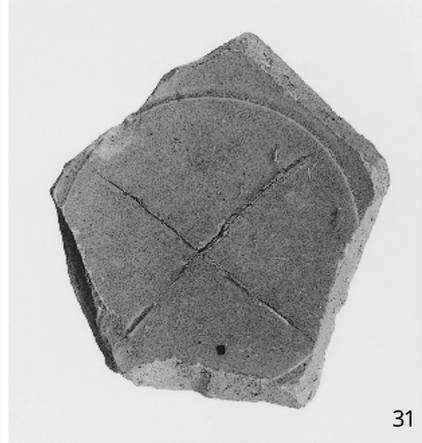


左上 第6面 堰

左下 第7b面 土坑 3

右上 第7a面 全景

右下 第8面 全景





91



94



92



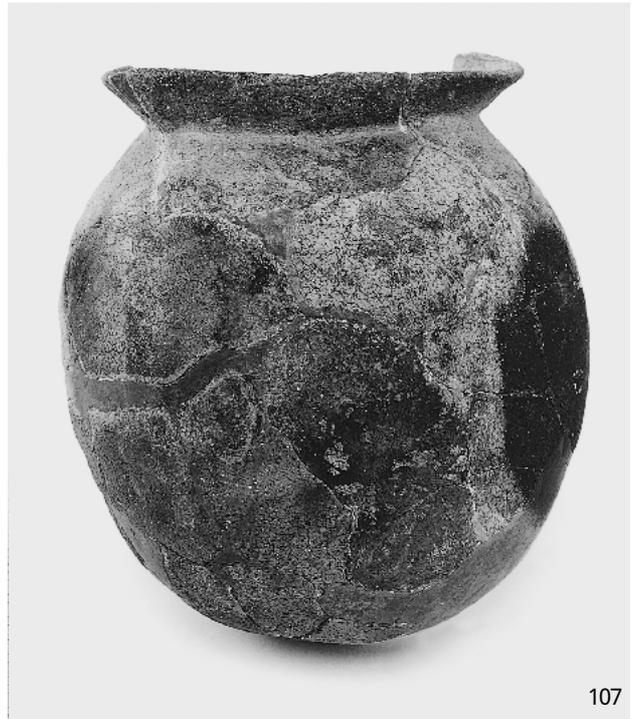
96



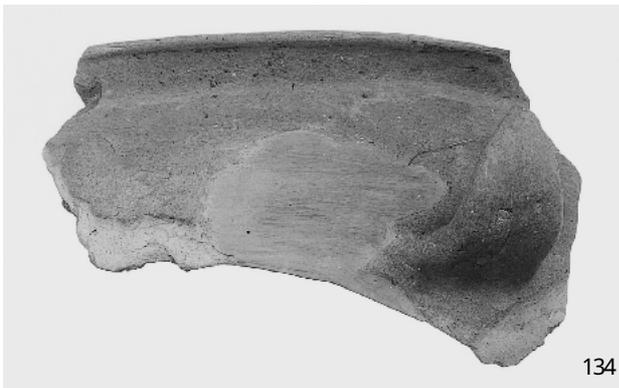
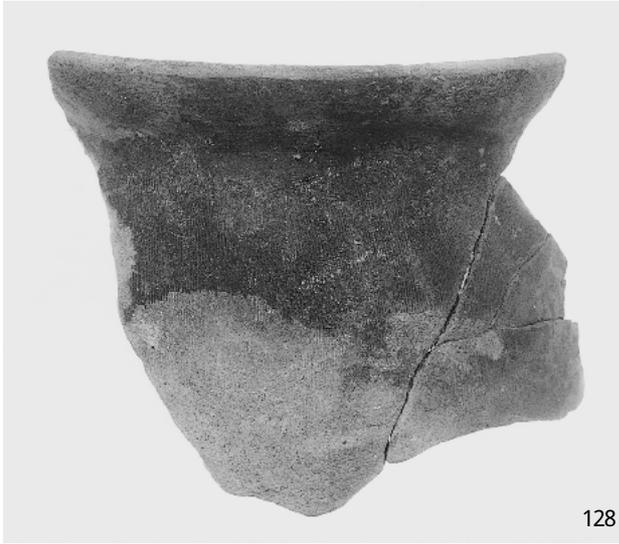
93



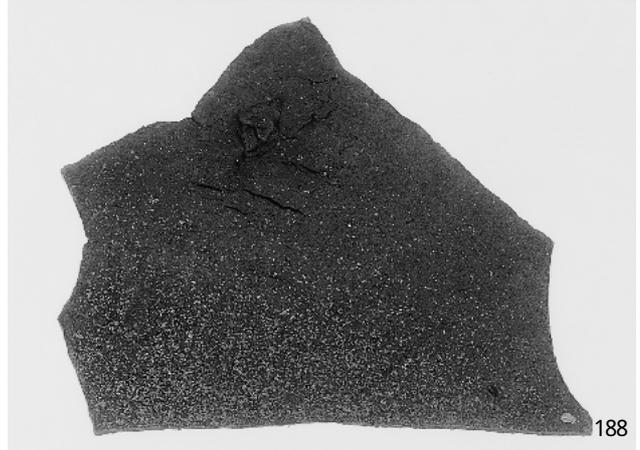
97





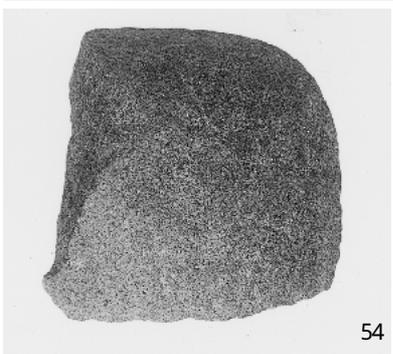
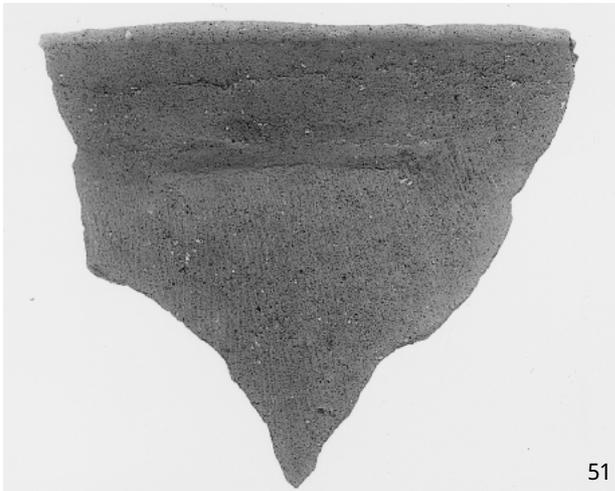


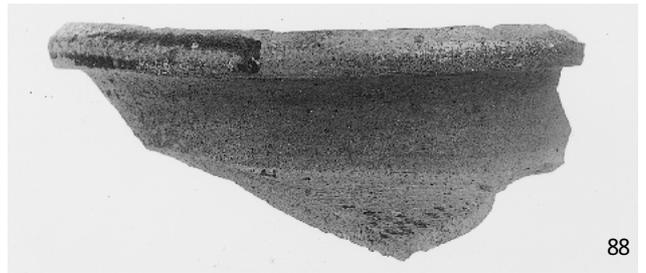




















報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき・りゅうげちくはくつちょうさほうこくしょⅡ		
書名	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ		
副書名	一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査		
巻次			
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書		
シリーズ番号	第26集		
編著者名	後藤信義・島崎久恵・長田芳子		
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター		
所在地	〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生 2丁目11-3 小森ビル 4階		TEL 06-934-6651
発行年月日	1998年3月31日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		経度・緯度	国土座標 第Ⅵ系	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 りゅうげちく ・竜華地区	おおさかふや 大阪府八尾市 しづかわ 渋川	27212		北緯 34°34'37" 東経 135°35'00"	X = -153.088 ~ -153.124 Y = -37.833 ~ -37.874	その1(96-1) 1996年2月 ~1996年3月 その2(96-1) 1996年4月 ~1996年7月 その3(97-1) 1997年7月 ~1997年8月	552m ² 173m ²	一般府道住 吉八尾線付 け替え事業 に伴う発掘 調査

所収遺跡	トレンチ	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 ・竜華地区	その1・ その2 (96-1)		中世~現代 平安時代 飛鳥時代 古墳時代前~中期	鳥畑・水田・土坑・ ピット・溝 掘立柱建物 土坑・ピット 土坑・土器群・旧河 川・堰	陶器・磁器・瓦器・ 瓦質土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・韓 式系土器・弥生土器 ・鉄鏃・木製品(建 築部材・堰材)	
	その3 (97-1)		中世~現代 平安~飛鳥時代 古墳時代前~中期	鳥畑・水田・道路状 遺構・土坑・ピット ・溝 ピット・溝 旧河川・堰・土坑	陶器・磁器・瓦器・ 瓦質土器・須恵器・ 土師器・耳環・鉄滓 緑釉陶器・須恵器・ 土師器 須恵器・土師器・弥 生土器・縄紋土器・ 木製品(堰材)	

久宝寺遺跡・竜華地区 発掘調査報告書Ⅱ

- 一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査 -

発行年月日 1998年3月31日

発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3

小森ビル4階

☎ 06-934-6651

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所